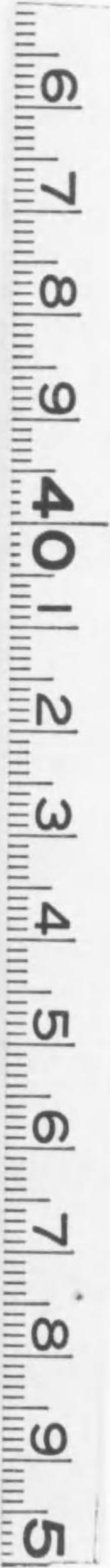


特214

757

258

333



始



原 著
馬國

特214

757

新朝類日記

後編

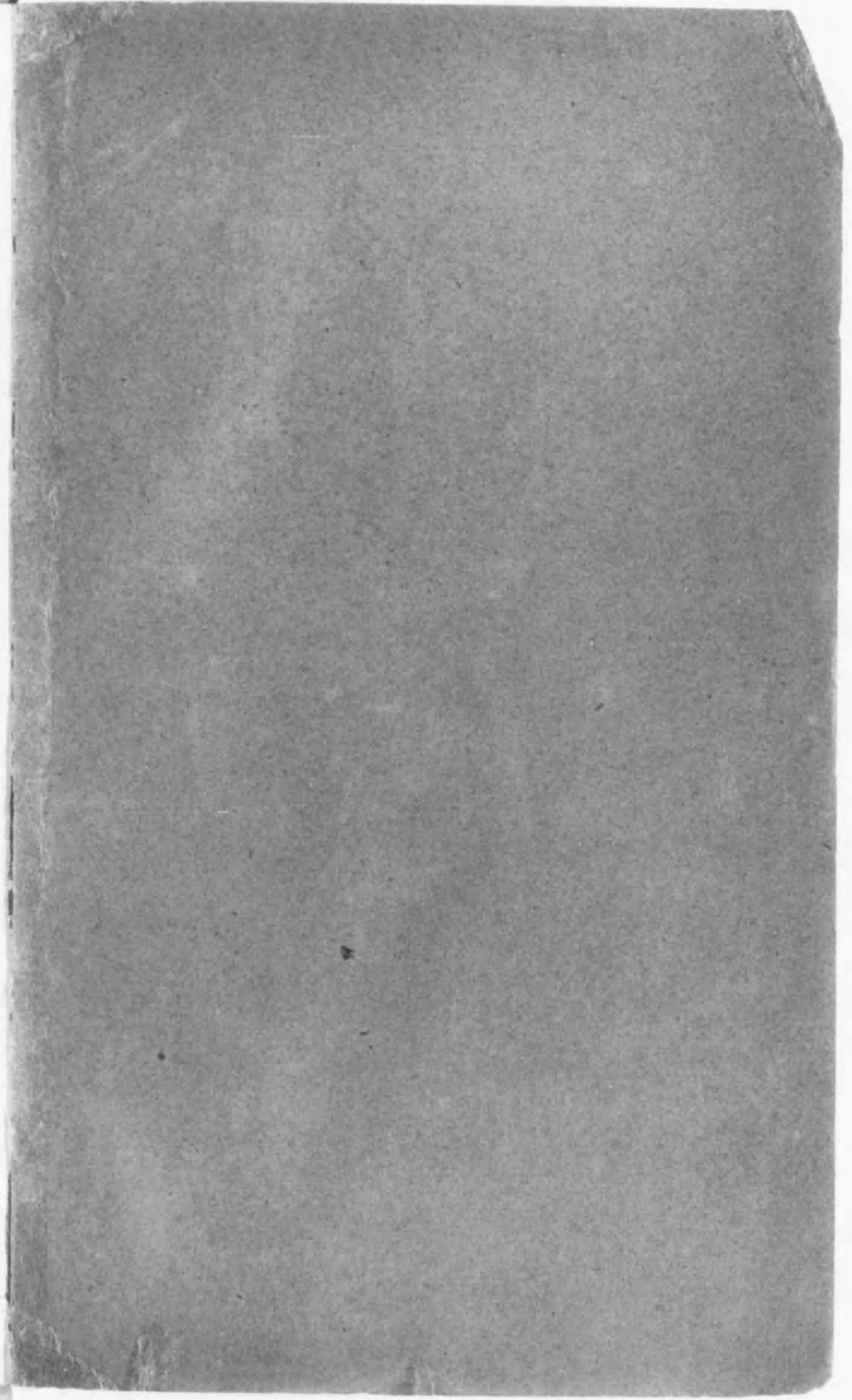
發行所
東京



特 214
757

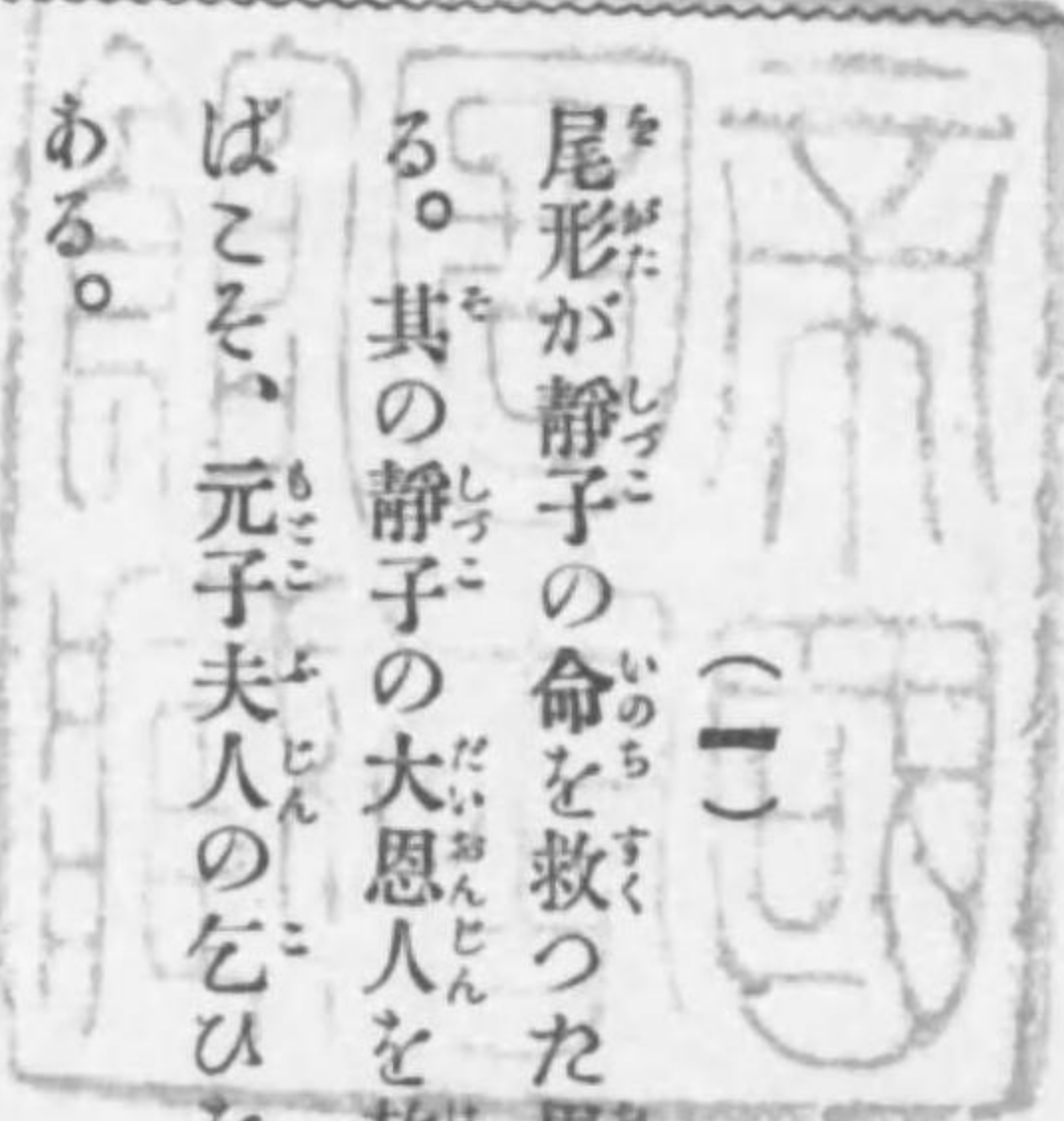
新
朝
顏
日
記
編後

明治
10 12 19
内交



新朝顔日記 後編

伊原青々園



尾形が静子の命を救つた恩人である事は直方自身も現に目撃して知つて居る。其の静子の大恩人を放免してやる事が静子の歡心を買ふ所以だと思へばこそ、元子夫人の乞ひを容れて栗田檢事正にまで其の内意を傳へたのである。

然るに、直方の爲めには實に意外の意外。静子と尾形との間には其れ以上に色戀の關係が成立つて居るとは、手紙の文句といひ、栗田の鑑定といひ、最早疑ふべからざる事實であると信ずると共に、尾形に對する嫉妬心はムラ／＼と心の底に湧いたのであつた。今は自分に取つて戀の敵たる尾形俊

助を、自分の差金で何うして放免する事が出来よう。放免すれば直さま静子の許へ駈込んで、二人が手を握りあつて泣いたり笑つたり、其れを見すゝ知りながら、何うして其うさす事が出来やう。

其の戀の敵たる尾形が勾引されて居るこそ物外の幸ひ、此上は出来るだけ長く未決監へ留めて、静子との間を出来るだけ遠ざけて置いて、さて其の間に静子を自分の手に入るべき策を廻らさう。直方は斯う決心したのである。

『では、尾形俊助を歸す事は御取消しですか。』何にも知らず栗田検事正は問ふた。

『左様の些し又考へた事があるので。栗田さん。私が改めて御答へ申すまでは、矢張未決に置いて下さい。』

『其うですか。では思召の通りに致しませう。』

一方に、直方が心の中に斯んな波瀾が起つたと夢にも知らぬ元子夫人は、角

筈の屋敷へ歸つて、屈山老人には内所で今日の結果を娘の静子に物語つたが、今夜のうちにも尾形が放免されるであらうといふ吉報が静子の耳に夢かとはかり嬉しく響いた。

『まあ、其う。綾子さんまで願つた事は願つたけれど、大かた駄目だらうと思つて居ましたに、綾子さんの御父さまが其んなに御やさしく言つて下さるなんて、私本當に有難いと思ひますわ。私、綾子さんに直ぐと御禮の手紙を出しませう。』

『其う。其れは今出しても關はないが、尾形さんが御出ましになつてからの方が宜いかと私は思ひます。』

『其うねえ。餘り慌てゝ出しても悪いでせうから、然し、尾形さんは屹度放免になるのですわね。』

『あゝ、金井さんは私に屹度さうすると仰やつたよ。』

「済まないけれど、綾子さんの父様は此れ迄嫌な方とばかり思つて居ましたが、して見ると、矢張情も涙もある御優しい御方なんですわね。左様。手紙で禮なんか言ふよりも、母さま、あなたと一所に御禮に参りませう。」

「其の時は私だつて行くけれど。静子や。お前に聞かすと又嫌な顔をせねば成らぬ困つた事が出来ました。」

「母さま。何んな事。氣になるから早く聞かして頂戴。」

「他ぢやないがね、綾子さんの父さまが、又お前を是非とも奥さんにはしつて。」

「あら、嫌な事。静子は何か怖ろしい物でも見たやうに急に其の顔の色を變へた。」

(三)

元子夫人は令嬢静子に一切の始末を包ます物語つた。静子を娶はす事につ

いて自分が萬一否やを言へば、直方が決して容易に尾形を放免せまじき口ぶりの見えたので、心にもなく、自分だけは承諾すると答へた事までを打明けたが、静子の顔は益々薄暗くなつた。

「まあ、母さまは其んな事を仰やつて。でも、妾死んだつて綾子さんの處なんかへ御嫁に行く事は出来ませんわ。」

「其れは私だつても、お前を彼んな處へ遣らうとは思ひませんが、ついで物の方便で、金井さんの前だけ其う言つて置いたのです。」

「でも、母さまが約束遊ばしたのなら、向ふは何時か其の實行を迫つて来るでせう。」

「さあ、困まるといふのは其處なんだが、よしんば私だけが承諾したとしても、お父さまが金井なんかへお前をお嫁に御遣はしになる氣遣はないのだからね。」

「其れは其うだけれど、幾ら方便でも、母さまが其んな約束を遊ばすなんて、私情ないと思ひますわ。」

「静子や。腹を立てないで堪忍しておくれ。今もいふ通り、私が其れを行けないと言へば、宜い、其の代り尾形についての願も聞入れる事は出来ないと、言つたやうな金井さんの調子なんだから、折角好い都合に行きかけて居るものを、其の爲に打壊すも何だと思つて、つい間に合はせに其んな返事をしたんだから。」

「其れは私も母さまに無理はないと思つて居ますわ。では、綾子さんの御父さまは心から出た親切で私らの願ひを聽いて下すつたんぢや無いのね。」

「つまり、尾形さんの事でお前や私に恩を着せて置いて、そうして自分の望みを遂げようと言ふんだわね。」

「まあ、何と言ふ卑劣な方でせう。」

「内のお父さまは、其の卑劣な事を御存じなんだから、金井さんを御嫌ひ遊ばすんだわね。」

「其う。だから、私を彼處へ御嫁に遣らうなんて、決して仰やる氣遣はないのよ。」

「其う〜。静子や。だから、お前は安心して御出で。」

親子が熱心に語つて居るうち、何時の間にやら玄關には來客があるらしい。女中の取次ぐけはひが此處まで聞えるのである。

「鳥渡、母さま。御客様よ。」

「其うねえ、御父さまの處へだらう。誰か知ら。」

元子夫人も小首を傾けて居る處へ、女中の箕盆を運ぶ足音が近くなつたので、静子は小聲で尋ねた。

「御父さまの所へ御客さまは誰なの。」
「はい、何時やら御嬢さまと一所に入らした金井さんと仰やる髯のあ
る御方で御座います。」

「えッ、髯のある金井さん。」元子夫人は眼を圓くした。

「母さま。最早遣つて来たのよ。」静子は思はず身を顛はした。「そうして、

御父さまは座敷へ通しても可いと仰やつたの。」

金井直方に快からぬ父屈山とて、若や面會を拒絶はせぬかと思たのである。

「はい、通して可いと仰やいましたので。」

親子は眼を見合して一時に溜息をついた。

(三)

金井直方の訪問にあづかりて、當り前ならば門前拂もしかねまじき加賀見
屈山が、順ほに座敷へ通して面會したのには抑もの曰くがある。其れは、心

にかゝる今度の焼討事件と名士檢舉事件とについて、新警視總監たる直方
を當つて見たらば新聞に報道せられたより以外の真相が多少は探れるだら
うと信じたからであつた。

主客の座が定まつて挨拶が済むと、主人の屈山から先づ口を開いた。

「金井さん。今度はえらい御出世ぢやな。御手前は何うしても私が言ふ

通り好運兒ぢや。あッは、、其れに違ひはあるまい。」

「其う言はれると痛入るて。總監といふた所で矢張刀筆の吏ぢやもの。」

「刀筆の吏でも、御手前のやうになれば、其處らに羨ましがる者は幾ら

もあらうでは無いか。時に、今度は馬鹿な騒ぎをやらかしたでは無いか。

御手前などは何うせ政府の手足になつて働かねば成るまいから、随分御

忙がしからうに、此の田舎まで遣つて来る暇が能くありましたの。一體

政府の思はくは勾引した輩を何う始末するといふのぢやな。」

「いや、其んな職務の上の事は御談しいたす譯に行かん。」

「成程、職務上の事。此奴は屈山一本参つた。あッは。そうして御手前は職務上の談も迂かり出来ぬ此の場合に、何として此處へは來られたの。」屈山は何時もの嘲りを以て相手を見下した。

「加賀見さん。其ういふ理屈責めの挨拶はよして貰はう。今日はあなたに極めて内端の談があつて御尋をしたのぢやから。」

「ふむ、極めて内端の談。それは何事であらう。私には一向呑込めん。」
「其れは他でも無い。今度勾引された嫌疑者のうちで、尾形俊助といふ法學士ぢやが、あなたは彼れを御存じかな。」

「む、名前は知つて居る、當人にも面會したが、いや、金井さん。其の事で私は今日まで疑問を抱いて居つたのぢや。」

「疑問とは。」直方は瞬きながら問返した。

「大かた御手前に聞いて見たら分かるであらうが、其の尾形といふ法學士は、世間の評判で聞くと、滅法な才物で、現在今度の事件でも美事な働き振をしたらしく新聞に書いてあるが、私の會うた尾形俊助は其うでなかつた。」

「何ういふ男ぢやとあなたは思はれたな。」

「丸で物にならん。第一輕卒で、重みといふものが無くて、喋舌る事が一向要領を得ん。才物よりは先づ馬鹿ぢや。其れを世間で評判するのも私に解せんければ、今度の事件で政府から睨まれるほど働いたといふのが腑に落ちん。さすれば、事によつたら私の會うたのは今度勾引された尾形と同名異人であるまいかと思ふのぢやが。」

「では、加賀見さん。あなたは尾形俊助を馬鹿と見たのぢやな。」

「左様、私の疑問といふのは其處ぢやて。」屈山老人は相手の返事如何に

と待兼ねたが、直方は鳥渡詞を途断らして再び口を開いた。

『如何さま、あなたの眼鏡は高い。』

『では、矢張尾形俊助は世間の評判と違ふかな。』

『違ふとも、彼奴は眞赤な喰はせ物ぢや。私も今度の事件で彼奴が勾引されたので始めて正の物を確めたが、新聞ではえらい學者で氣骨のある男子ぢやと評判し居る、處が、事實は丸で反對ぢや。人間が輕薄で、見得坊で、所詮まぢめに政治運動などをする志士では決して無い。』

『其れを、何うして政府が眼敵に取つたのぢやらう。』

『左様さ、全く見込違ひぢや。大かた上つ面ばかりを見た探偵の報告で買被つたのでもあらうか。時に、金井さん。私が内端の御談といふは矢張彼奴が馬鹿であるといふ一つの證據ぢや。實は其の尾形めが、此方の令嬢とは夫婦の約束をして居ると専ら自分で言觸らして居るさうぢや。』

『馬鹿な事を。』屈山老人は苦切つた。

(四)

金井直方が態々こゝへ訪問したは、自分の爲めに戀の敵であると認められた尾形俊助と静子との仲を離間すべき目的だつたのであるが。其れにして、屈山が二人の關係に對しての思はくは如何にと様子を考へて居るうち、意外にも屈山老人が口を極めて尾形の愚物である事を罵るので、其の機に乗じて肝腎の離間策を行はうとするのであつた。

『いや、加賀見さん。其ればかりでは無い。彼奴は未決監へ届いた怪い女の手紙を振廻して、此れは當家の静子さんからの艶書ぢやなぞと言ふて居るさうぢや。』

『怪しからん奴ぢや。』

『そうして、此方の奥さんから差入物があつたなぞ、と此れも未決監で

彼奴自身が言觸らして居るといふ事を聞いたが、あなたの家庭に限つて其ういふ事のあらう筈がない。第一あなたくらゐの人を見る明を以て、尾形俊助ごとき愚物に令嬢を娶はさるゝ譯は斷じてあるまい。此れは彼奴が何か爲にする所あつて嘘をつくのであらうと私は推測したのぢやが、私とても年頃の娘を持つて居るから人ごと、は思はぬ。其ういふ根もな事を言觸らされて、あなたが何のやうに迷惑されるかと思ふから、わざわざ知らせに參つたのぢや。

『如何さま、御手前の親切は屈山御禮を申す。世の中に馬鹿ほど怖いものは無いといふが、全く其の通り。尾形といふ奴は馬鹿なればこそ左様な事も言ふのであらうが、何を隠さう、實は此の屈山も、尾形俊助の評判を聞いた時は、娘の聲にもしたいと思ふたのぢや。思ふたによつて態々宅へ迎へて面會をして見たが、いや、聞くとは大違ひな愚物ぢやほどに、

今日では迂つかり縁談など申込まなかつたを仕合と悦んで居るのぢや。』
『では、あなたのような眼の高い人でも、一度は世間の評判に欺まされたと見える。いや、危いこと。然し、此の後も用心が肝要ぢや。向うは其ういふ事を言觸らすくらゐぢやから、今度未決を出たら何んな無法を働かうも知れぬによつて、兎角令嬢の身の上を。』

『あつは、家の娘は大丈夫ぢやが、其んな馬鹿者の言觸らす事を世間で取合はぬやうに、御手前から計らつて下さい。』

『其の邊は私が心得て居る。加賀見さん。では、今日は急いで居るから此れで御免を蒙る。何うか奥さんにも御令嬢にもよろしく。』

『左様かな。わざ／＼御親切に知らして下された御親切な辱ない。』
直方が胸には一物。此處を立つた跡で、屈山老人は頻りに考へ始めたが、急に手を叩いて、元子夫人を呼び來るべく言付けた。

(五)

金井直方を送出した後で、屈山老人は元子夫人を呼んで更に直方から聞いた事實を確かめたが、無論元子夫人の口から、自分が果して尾形俊助に差入物をしたとも、又令嬢静子が果して慰問の書を送つたとも、打明けて語るべくもないので、屈山老人は愈々尾形が下劣なる根性から根なし言を言ひふらすのであるとのみ思詰めた。

「む、其うであらう。私も嬢やお前が其んな馬鹿な事をしようとは思はぬから、金井には誤解せぬように能く言聞かして歸してやつた。しかし、何うして尾形といふ奴は其んな下らぬ嘘を吐くのであらう。」

「でも、本當に尾形さんの口から出たのか分りませんわ。」

元子夫人は尾形俊助に對して餘りに氣の毒と思ふにつけ、遠廻しに辯護を試みたが、屈山老人は一言の下に打消してしまつた。

「いや、尾形なら其ういふ下らぬ嘘を吐きかねぬ奴ぢや。金井も今そらいうて居つたが、彼奴は世間で評判するとは大違ひな喰はせ物ぢや。そうして、奥や。此の後も尾形が何ういふ馬鹿な噂を立てるか知れぬから、嬢にも能く譯を聞かして、餘程注意せぬといかん。」

「畏まりました。能く静子にも其の事を申聞かすで御座いませう。」

「む、其うして御くれ。」

「それから、あなた。金井さんが先つき入らしつたは、何か他の御談があつたのぢや御座いせんか。」元子夫人は例の静子に對する求婚を再び申込んだのではあるまいかと思つたのである。

「いや、何も他に談はせなんだ。全く好意の上から、尾形が其ういふ事を言觸らして居るといふ事を忠告に來てくれたのぢや。」

「左様で御座いますか。」

元子夫人は其のまゝ、良人の前を引下つたが、金井直方が尾形について斯く良からぬ噂を齎らしたは何か爲にする所があるのだらうとの意見を、此の事實と共に令嬢静子に語つたが、静子も矢張り同意見であつた。

『母さま。屹度其うよ。お父さまに尾形さんの事を悪く吹込んで、此處へは尾形さんを寄せ付けまいといふのでせう。』

『あゝ、私も其うだと思つて居るよ。でも、今更にお父さんに實は是れ〜ですとも言へないし、本當に困つた事になつたわね。』

『そうして、金井さんは、母さまに約束遊ばした通り、尾形さんが今夜のうちにも放免になるよう計つて下さるでせうか。』

『さあ、其れも何うだらうね。お父さまの處へ来て、彼の方の讒訴を遊ばすようでは、其れも覺束ないか知れないよ。』

『私も其う思つてよ。』

然しながら、元子夫人と静子との此の想像は誤つて居た。其の夜こそ尾形俊助は放免の運びにならなかつたものゝ、翌日の午後に至つて、出しぬけに嫌疑者のうちの俊助ひとりだけが、證據不充分といふ名の下に未決監から免されて、彼の有楽町の下宿屋へ歸つたのを、母子は其の翌朝の新聞で始めて知つたのである。

(六)

尾形俊助こそ令嬢静子に對する戀の敵と知つて、直方は折角自分で取計ひかけた放免の一件を躊躇したのであるが、屈山老人に打付かつて本人と加賀見家との間に渡る可からざる溝を掘つた上は、よし尾形を再び娑婆へ出した所で、自分の爲め然ほど恐るべき敵でなきのみならず、一方には、尾形を免す代りに自分の求婚を成立たしめてくれといふ元子夫人への約束に對して、本人を放免した方が却て自分の得策と考へたので、終に其れを斷行

したのである。

其んな魂膽があらうとは知らぬ俊助には、勾引されてから放免になるまで一切夢のやうに下らない。全く身に覚えなき罪名で未決監へ打込まれて、毎日馬鹿々々しい糺問を警部から受けるほかは、獄窓の下の飼殺し、其れも政府が一般の輿論を鎮壓する陰險手段と知つたので、急には出獄の出来ぬと思ひのほか、自分ひとりが證據不十分で放免されて、茫然未決監の門前まで出ると、何時の間に聞いたのか、其處には友人知己が山なすばかり出迎へて、中には全く見知らぬ人までが「尾形君萬歳」を唱へた。

是れから直ぐに出獄の祝宴を開くといふ一同の申込であつたが、尾形俊助は其の好意を謝すると共に、此の申込を拒絶した。其れは自分ばかりが放免された所で、同時に勾引された人は尙だ獄窓に呻吟して居るのである。一體今回に於ける其の筋の遣り方は公明正大なる政治家の態度では決して無

い。罪なき罪を搜つて吾れを拘禁し、以て輿論を威壓しようとした其の暴虐無道の所爲は、諸君と共に大いに世間に訴へねば成らぬのみならず、最初より根本の問題である對露事件についても愈々政府を攻撃して其の戒心を求めねば成らぬ。かるが故に、今日は未だ尾形俊助一個人の爲めに祝宴などを張つてもらう時機ではないとの意味を説明したが、一同は尾形の主張を容れて、宴會を廢する代りに下宿まで送つて行かうとの事であつた。

其れだけは尾形自身の拒むべき限りでない。一行の大勢に送られて有樂町の扶桑館へ歸ると、又一しきり勇ましい「萬歳」の聲が揚がつて、送つた人は散りゆくになる、親しき人たちが座敷へ上がつて勾引以來の消息を語りもすれば聞きもするうち、同じく尾形の放免を知つて政府反對の新聞記者が入代り立代り訪問する。

其の日も、其の翌る日も、全く此の應接に忙殺されたが、自分が筆を執つて

發表しようと思つた今回の事件と外交の今後に對する意見は、大かた此等の訪問者に語り盡くしたのであるから、最早自分の筆を勞すべき必要はないので、此の上は勾引中に厚意を表してくれた人たち、而も其のなかで最も感謝せねばならぬは加賀見夫人の鄭重なる差入物と、令嬢静子が温かな慰問の手紙、それに對して早速答禮せねば濟まぬと氣が付いて、漸く訪問客の途絶えた午後三時頃、有樂町を出かけて新宿までは電車で、其處からは車を雇つて、是れや始めて加賀見屈山の屋敷を音づれた。

取次に出た女中に名刺を出して、夫人に會ひたいといふと、生憎奥さまは御留守だとの事なので、當り前ならば令嬢静子にといふべきであるが、如何に見識り越しの仲とは言へど、處女に對して面會を求めると、女中は件の名刺を手にした其れでは先生に面會したいとの意を通すと、女中は奥へ行たが、暫くたつと再び出て來たまゝ、尾形の前へ立はだかつて、

「あの、旦那様が言はつしやるには、斯んな奴に會ふ事は出來ないから、遂歸してしまへつて。」

ばたりと其の手から放した名刺は尾形自身の足下に落散つた。

(七)

屈山老人が傲岸なる人物である事は尾形も仄かに知る所であるが、斯くの如き冷遇を受け様とは意外だったので、彼れは思はず其の色を變へた。然しながら未だ一面識なき先輩に紹介もなく面會を求めた自分の行爲も禮に於て缺て居ないとは言へないと思返して其の瞬間には、自ら顔を和らげた。

「いや、是れは失敬しました。實は出しぬけに上つて甚だ恐入りますが、其の譯は先生の御眼にかゝれば御わかりになるのですから、何うか枉げて御面會を願ひたいと其う言ふて下さる。」

「でも、旦那様は會はねえから遂歸せつて言はつしやるんだもの。内の

旦那様、却々強情だからダメだよ。』

『まあ、其んな事を言はずと、もう一度奥へ其う言ふて下さい。』

『其うかね。ダメな事は知つて居るけんど。』

取次の女中はぶつ／＼言ひながら再び奥へ入つたが、其處に屈山老人の聲高く應對するのが玄關まで手に取れるように聽える。

『ひ、うるさい奴ぢや。會はんといふたら決して會はん。』

『でも、御客様が、旦那様にもう一度頼んでくれつて、歸らねえだもの。』

『歸らなくば摘み出してしまへ。尾形俊助とかいふ破廉耻極まる男に此の屈山は決して面を會はさぬ、と能く其ういふて聞かすがよい。』

『へい。だから、言はねえ事ぢやねえ、とてもダメだといふものを。』

女中が佛頂面をして再び玄關に立出でた時に、俊助は既に一切を聽了つたのである。

『おめえ様にも聞こえたらう、旦那様は聲が高いから。何うしても旦那様會はねえ、おめへ様みたいな何とかな男には面を會はず事は出来ねえつて、大層腹を立て、居さつしやるだ。』

『其う。何うしても御面會が出来んといふなら仕方がない。僕は此のまゝ歸るが、奥さんと御令嬢に此の名刺を差上げて、よろしく申上げたと云て下さい。』

『奥さまも、お嬢様も、留守だから、歸つて來さしたら其う言ひますべえ。何うも是れは御氣の毒さま。』

女中の詞を後ろに、ふいと表へ飛出して、其處に待たした車に乗つたが、さて何うしても屈山老人の自身に對する今日の仕向について合點が行かぬ。紹介なしに面會を求めたゞけで、斯ほどに立腹するとすれば、取りも直さず屈山老人は常識に外れて居ると言はねば成らぬが、然しながら、自分の想

像した所で、屈山老人は狷介不羈の老壯士でこそあれ、斯かる無法の挨拶をする人では決してない。而も自分の事を破廉耻極まる男と罵つた其の一言、これは何か向ふに誤解があるではあるまいか。何かの誤解から自分に憤りを含んで居らるゝのではあるまいか。

車の上に斯んな事を考へて居るうち、何時しか新宿の車庫前へ来たので、元の通り其處から電車に乗換へたが、矢張心の中には同じ事を繰返して、四谷も麴町も夢中に過ぎ、車掌が「日比谷」と呼ぶ聲で始めて気が付いて車を降りた出合頭。

「まあ、あなたは尾形さんぢや御座いませんか。」
横合から女の聲がしたので振返ると、其れは加賀見の令嬢静子であつた。

(八)

静子の顔を一眼見ると、只つた今屈山老人から冷遇を受けた事が最先に胸

へ浮んで、尾形は快からぬ顔をした。

「あゝ、御令嬢でしたな。」

「此の度は御めでたう存じます。」
無事に出獄した悦びを言はれたと気が付くと同時に、自分が今日しも何故に加賀見の家を訪問したかといふ最初の心に立歸つた。

「いや、あなたとお母さまとは色々御心配をかけまして、有難う。實は今あなたの御宅へ御禮がてらに上つた所です。」

「まあ、其うで御座いましたか。本當に生憎なもので御座います事ねえ。私も實は母と一所に先程あなたの御宿へ御尋ね致しましたので。」

「其うですか。だから御宅では御二人とも御不在だと伺ひました、然し僕も出違つて大きに失敬をしました。」

「何、あの、今朝の新聞で、あなたが御歸り遊ばした事を存じましたので、

母も大層悦びまして、其れならば御機嫌伺ひに上がらうと申しまして、二人で出かけましたのですが、あなたは御出ましになつたと伺ひましたから、母だけを歸しまして、私は鳥渡そこまで用達しに參つて、只今歸らうと致す所なんで御座います。』

『其うですか。でも、其處で御眼にかゝつたは好都合ですな。』

『本當に私も左様に思ひます。さうして、尾形さん。母も私も留守の處へ御出で下さいまして、あの父には御會ひ下さいましたのですか。』

静子は氣遣はしげに打守つたが、尾形は苦笑した。

『先生には御眼にかゝらなかつたのです。いや、御眼にかゝらなかつたのではありません、御眼にかゝれなかつたのです。』

尾形の口ぶりを聞いて、静子は早それと察したのである。

『では、何か、父が失禮な事でも申しは致しませんでしたらうか。』

『其うですな。實は僕は先生から門前拂を食つたのです。』

『まあ、飛んだ御無禮を致しまして。あなた。何うぞ御勘辨を遊ばして。父は誠に頑固者で御座いますから、私も若しや其ういふ御無禮を致しはせまいかと、先程から心配して居たので御座います。』

『して見ると、あなたは先生が僕を門前拂にされる事を豫想して居つたと仰やるのですな。』

『其うで御座ます。尾形さん。其には色々込入つた譯が御座いますので。』

『込入つた譯とは。』

尾形は先つきから不思議に堪へなかつた其の疑問を解釋すべき端緒を得たと知つたので、静子の方を凝と打守つたが、丁度その時に青山行とした電車が向うから來たので、待合はした客がドヤ／＼と人波打つて駆寄つた。

『何かと色々御話を伺ひたいですが、斯んな往來で立談するのも可笑い

ですから。御令嬢。何うでせう。僕の宿は直ぐ其處なだから、失敬ですが、もう一度御運び下すつては。』

『はい、有難う存じます。』

『いや、然し、あなた御一人で僕の宿へ御出でを願ふといふは頗る穩當でありませぬ。』

『尾形さん。其んな事は決して御座いません。では、御宿へ寄りまして色御談を致す事に致しませう。』

静子の方から歩み始めたので、俊助も其れについた。

(九)

扶桑館の二階座敷で差向ひに坐つたは、言ふまでもなく尾形俊助と加賀見静子とであつた。

『先刻の御話で承まはると、屈山先生が僕を拒絶になつた事は、あなたが豫想して御出で、あつた。其れは一體何ういふ譯ですな。』尾形の方が口を切つた。

『尾形さん。其の御談を致す前に伺ひたいことが御座いますが、丁度あの焼討騒ぎの始まりました前の晩の事で御座いました、宅で月見を催しました節、あなたは他の人をあなたの御名前で手前へ御よこし遊ばしは致しませぬか。』

俊助は驚いて眼を見張つた。

『それは餘に意外の事を聞きます。御宅で月見の催しがあつた。僕は些とも知らぬのですから。』

『では、あなたには御覚えがないので御座いますね。』

『勿論ですとも。そうして、御令嬢。あなたは何うして其ういふ御質問を僕になさるので。』

が豫想して御出で、あつた。其れは一體何ういふ譯ですな。』尾形の方が口を切つた。

『尾形さん。其の御談を致す前に伺ひたいことが御座いますが、丁度あの焼討騒ぎの始まりました前の晩の事で御座いました、宅で月見を催しました節、あなたは他の人をあなたの御名前で手前へ御よこし遊ばしは致しませぬか。』

俊助は驚いて眼を見張つた。

『それは餘に意外の事を聞きます。御宅で月見の催しがあつた。僕は些とも知らぬのですから。』

『では、あなたには御覚えがないので御座いますね。』

『勿論ですとも。そうして、御令嬢。あなたは何うして其ういふ御質問を僕になさるので。』

「あなたに御覚えのない事なら御免遊ばしませ。それでは、尾形さん。あなたは彼の藤波商會へ勤めて居ります荒川實といふ男を御存じで入らつしやいませうか。」

「荒川實。何だか聞いたやうな名前ですな。尾形は暫く小首を傾けて、『あゝ其うでした、僕も些しは知つて居ます。確か以前は先生の門下に居つた筈ですな。』」

「左様で御座います。父に教はりました縁故から折々手前へ参りますが、一體父はあなたの御名前を伺つて、疾うから慕つて居りましたので。『静子は流石に自分の婿にしようと思つたとは言ひかねて顔を根らめた。』」

「屈山先生がですか。」

「左様です。其れは私や母があなたに御眼にかゝらぬ以前からの事で御座いますが、荒川があなたとは御懇意だからと申しますので、一度是非會

つて見たいから、月見の催しに御一所に御連れ申してくれまいか、と父が頼みまして、荒川は承諾しました。」

「其んな事が全くあつたのですか。實に意外ですな。僕は久しく荒川にも面會しませんが、先生に其ういふ思召のあつた事などは、今日あなたに承はるのが始めてです。」

「では、荒川が父を欺くので御座いませう。其うすると、其の晩に是れが尾形さんだと申して、荒川が同道して参りましたが、あなたと丸で違つた方なので御座います。何時やらも申上げました通り、牛臥で御恩に預かりました事は父へ内證に致して居りますので、見すゝあなたでは無いと存じながら、父に左様申せば、前からあなたと御近付に致して居た事が知れますので、如何いたしたのかと思つて居るうち、荒川と其の人は何か慌て、歸つてしまひました。後で考へますと、大かた化の皮が

露はれさうになりましたので、薄氣味悪く思つたので御座いませう。」

「實に不埒千萬な奴ですな。僕の姓名を騙るなんて。」

「尾形さん、あなたを疑ひましては相済みません、實は今日まで或ひは其うではあるまいかと母と二人で申して居りました、あなたが宅へ入らつしやるのが御うるさいから、故と替玉の人を御よこし遊ばしたのではあるまいかと。」

「其んな事は決してありません、全く僕は知らんのですから。」

「でも、父は其の方を今日でもあなたと思つて居ますので、尾形といふ人は世間の評判や書いた物と丸で違つた愚物だの、虚名ばかり賣つて居る喰はせ者だのと、あなたの事は善く申さないで御座います。其うです、二三日前で御座いました。警視總監の金井さまが御越し遊ばして、矢張あなたの御噂を父に遊ばしたので御座います。」

「あの、金井ですか。何ういふ事を言ひました。」尾形は聞けば聞くほど耳新しき意外の事實ばかりなので、自分の膝の進むのを覺えなかつた。

(10)

「尾形さん。何うか御免遊ばしませ。」静子は金井直方が父に語つた事實を物語る前に顔を赧らめて躊躇した。「金井さんは父へ斯やうに仰やつたので御座います。あなたが私と結婚の約束をして居るとか、未決監で人に仰やつたとの事で御座います。」

「僕が其ういふ馬鹿な事を言つたといふのですか。實に怪しからん。實際無根です。」

「それから私の方から艶書が來たとか仰やつたとの事で御座います。」

「矢張僕が言ふたと言ふのですか。實に迷惑千萬な。静子さん。成程あなたから御見舞の書面は戴きました。然しながら、其れを艶書だなどと僕

が人に吹聴する筈はありません。一體金井は何ういふ譯で其のやうな根
もない事を先生に言ふのでせうな。」

「私も金井さんが爲めにする所あつての作り事だらうと信じて居りま
す。」

「そうして、爲にするとは何ういふ事なのですか。」何事も知らぬ尾形は
問返した。

「あの、金井さんは、前に私を妻に迎ひたいと父へ申込んで、父から拒
絶を致した事が御座います。」

「其うですか。」尾形は以ての外と言はぬばかりに静子の顔を打守つた。

「其れきり久しく往來せず居りましたが、此の度あなたが拘禁の身と
おなり遊ばしたにつきまして、金井さんに願つて見たり、早く御歸り遊ば
す事が出来やうかと存じまして、實は綾子さんまで私から書面で其の事

を願つたので御座います。すると、綾子さんが早速お父さまへ仰やつて下
すつたさうで御座いますが、丁度母もあなたの所へ差入物を致しに上り
ました節、金井さんに御目にかゝりましたさうで、序に其の事を願ひま
すと、萬事心得たから、今夜にもあなたを放免するように取計はうが、
自分の方で此の通り頼みを聞き入れる代りに、私を是非とも妻にくれと
斯様に母まで仰やつたさうに御座います。」

「では、職權を濫用して私意を逞くしようと言ふのですな。實に金井こそ
不埒千萬な奴です。」

「すると、其の晩で御座いました。金井さんが父の處へ御越し遊ばして、
あなたの事をいろく譏訴遊ばして、是れから氣を付けなければ行けな
いので態々忠告に參つたのだと仰やいました。」

「成程、わかりました。金井直方なら其れぐらゐな小刀細工はしかねぬ

男です。其うして、先生が其れを信じて居られる所へ、僕が顔を出したから面會を拒絶せられた。其れで何事も了解しましたが、然し金井が何を爲めにする所があつて、僕について其んな悪口を放つのでせうか。』

斯う真ともに尋ねられて、静子は又も返事に躊躇したが、

『尾形さん、其れはあなたと私どもが近くなつては、金井さんの爲めに不利益な事があるので、大かた其れで中傷なさるんだらうと存じます。』

『其うですか。何も僕があなた方と近しくしたつて、金井の爲めに不利益な事は無い筈ですが。』俊助は静子が言葉の意味を未だ全く了解しないのであるが、丁度話の途切れた時に、下から女中が此處へ上つて來た。

『尾形さん。此方が入らつしやいなした。』

不作法に立ちながら手渡した名刺には『金井綾子』といふ四字が記されてあつた。

(一一)

尾形は一旦名刺の上に注いだ己が眼を、次ぎの瞬間には静子の方へ轉じた。

『金井の令嬢が來られたさうですが、あなたに御構ひはありせんか。』

『はい、綾子さんなら、私も御眼にかゝつて御禮を申さねば成りません。』

『では、此處へ通しませう。あの、此方へ案内してくれ。』

先づきから、静子の方を物珍らしげに眺めて居た女中は、又も無作法な足取で梯子段を下りて行つたが、暫くすると、綾子が何時ものハイカラ出立で此處へ入つて來た。

『あら、先あ、加賀見さん。あなたも此處に入らしつて。』

『金井さん。あなたには私いろく御禮を申さねばなりませんわ。』

『其んな事は何うでも好くつてよ。』綾子は莞爾に笑ひながら尾形の方へ向き返つて、尾形さん。此のたびは御めでたう存じます。』

「別にめでたくも何ともありません。」
「だつても、私、その御悦びに上がったのよ。」
「其うですか。何うも有難う。」尾形は冷やかに答へた。「然し、金井の御令嬢。」

「はあ、何で御座いますか。」
「僕だけが放免になつたのは、あなたのお父さまの御厚意だとか聞きましたが、果して其うでせうかな。」

「其の事は此處に入らつしやる加賀見さんから私へ御頼みがあつたので、父に其う申したのですわ。」

「で、あなたのお父さまが僕を放免して下さいました。金井警視總監の御好意は忘れんと言ふて下さい。」尾形の詞は頗る皮肉であるが、綾子には何とも感せぬらしい。

「加賀見さん、私、あなたに對しては友誼をつくしたつもりよ。」
「本當に其うですから、私あなたに先つきから御禮を申して居ますわ。孰れ母と一所に御宅へも上がるつもりで居ますけれど。」
「其う。あなたが内へ入らつして下さるの。其うしたなら父さまが何んなに悦ぶでせうね。」

綾子は笑みを含んだが、静子は吾れ知らず嫌な顔をした。

「だつても、私の父さまは餘程をかしいの。加賀見さんにラブして居るんですもの。彼んな御爺さんの癖に、加賀見さんを奥さんに貰ひたいなんて。だから私、さう言つて遣つたの、加賀見さんは私の御友達なんだに、其れが父さまの奥さまなら、私母さまと言はなければ成らないけれど、其んな馬鹿な事は出来ないつて。」
「あなた其う言つて下さつて。」

「わ、言つてよ。でも、内の父さまとあなたのやうな若い人と結婚すれば見つともないんだもの。加賀見さんだつて其う思つて居ませう。」

静子は吾が意を得たと言はぬばかりに打領いた。

「其れから、まだ可笑い事があるのよ。内の父さまは、尾形さんと加賀見さんとが怪いつて大層焼いて居るのよ。」

静子はハツと顔を反けたが、尾形は熱心に此方へ振向いた。

「あの屹度、加賀見さんと尾形さんとはラブして入らつしやるに違ひな
いつて。」

無遠慮な綾子の咄で、尾形は先つき静子が言つた事の意味を始めて悟つたのであるが、側に静子は火のやうに赤くなつた。

(一一一)

「あなたのお父さまは職掌からだけあつて中々邪推深いですな。」尾形は

例の皮肉を言つた。だが、其ういふ邪推を爲すつては、僕よりも第一に加賀見の御令嬢へ御氣の毒なんですから、あなたから誤解のないやうに能く其ういふて下さう。」

「其う。其れは内の父様が誤解だわ。そうして邪推なんだわだつても邪推するなら邪推さして置が好いちやありませんか。加賀見さんと貴方となら好一對の御夫婦が出来るのですもの。私その誤解が寧ろ事實になつたらばと思つて居ますわ。ねえ、加賀見さん。貴方の心だつて其うでせう。」綾子に顔を見られて静子は上氣した。

「嘘よ。私其んな……。」

途切れ〜に答へる静子の詞を綾子は直に遮つた。

「加賀見さん。あなたが幾ら隠しても私知つて居るわ。あなたは此の夏牛臥で始めて御目にかゝつた時から、尾形さんにラブをして居るでせ

う。其うよ。屹度其うよ。其れならば意中を此處で尾形に語つた方が好いわ。實際不合理のラブぢや無いんですもの。私、あなたが尾形さんに對するラブは充分價値あるラブと認めて居るんだわ。』

『私、其んな事は存じません。』

『まわ、加賀見さんは何うして其んなに天真爛漫でないでせうね。』

綾子は嘆ずる如く言つたが、

『金井さん。』

と其の時に尾形が重みある調子で呼びかけた。

『はわ、何で御座います。』

『失禮ですが、あなたが先つきから餘り常識に外れたやうな事を仰やるので、加賀見の御令嬢は迷惑して御出でます。僕も亦其ういふラブとか愛とかいふ言葉は御婦人がたと差對ひで聞く事を好まんですから。』

『まわ、驚きました。』綾子は眞面目に眼を圓くした。『では、尾形さん。あなたはラブといふ詞を其んなに卑み遊ばすのですわね。』

『其うです。時と場合によつては卑まんけりや成らんし、又口にする事を憚らねば成らんです。』

『そうして、今日の此の場合が其うだと仰やるのですか。』

『無論です。』

『尾形さん。私の理想はあなたと違ひますわ。』

『何うせ其うでせう。理想が違ふから、今のやうな事を仰やるのでせうが、僕の眼から見れば、あなたが常識を逸して居られるといふより他はないです。』

『まわ、ひどい事ねえ。其れは、尾形さん。あなたが頑固といふものよ。』

『其うですか。』尾形は冷やかに答へた。

(一三)

あたりに御構ひなしな綾子が詞に、静子は先程から消えも入りたい思ひのするのみか、尾形に對つて是れから戀愛神聖論の大氣焔でも吐きさうな綾子の權幕に、寧ろ此の場を外した方が、と勿々に暇を告げたのであつた。角筈の我が屋へ歸つて、母の元子夫人に今日しも尾形俊助と出合つた一什と、金井綾子にも其處に落合うて禮を述べた事とを告げたが、元子夫人も意外の好都合に行つたを悦んだ。

『丁度い、鹽梅だつたね。私が歸つて來ると、いきなり今日は尾形俊助といふ馬鹿者が來たから、玄關拂ひをしてやつた、と父さまが斯う仰やるんだよ。私は何う遊ばしたのかと思つて、鍋が取次したといふから、彼れに聞いて見ると、お父様は随分ひどい事を尾形さんに仰やつたさうだよ。』
『其うですつて。尾形さんも其う仰しやてよ。』

『で、尾形さんに腹を立たしては濟まないから、何うしたら好いだらうと思つて、私は何んなに心配したか知れませぬ。』

『母さま。尾形さんには私からすつかり譯を御談しましたから、其の心配には及びませぬわ。だから、自分も何か譯があるだらうと思つたが、私に聞いて何事も了解したと、其う仰しやつたの。』

『まあ、好かつたわね。』

『其れから、母さま。其の序に、彼の月見の晩に荒川が尾形さんだつて連れて來た人の事も尋ねて見ました。』

『尾形さんは何う仰やつたの。』

『自分は些しも知らないのですつて。荒川に久く會ふた事もなければ、此處へ呼ばれた事なんか覺えがないのですつて。』

『では、矢張荒川が問へ入つて、何うかしたんだね。そうしてお前。綾

子さんから聞いた事はありませんか。』

『何をで御座います。』

『何をつて。綾子さんのお父さまがお前を所望遊ばす事について、綾子さんが何かお前に仰やりはしなかつたの。』

『金井さんは色々な事を言つてよ。私とは年の違ふだけでも不釣合ですつて。』

『では、綾子さんは、お父さまと同じ腹ではないんだね。』

『其うよ。金井さんは大反対なの、其れよりは似合つた同士結婚するのが當り前ですつて。』

『まわ、其うかえ。では、矢つ張尾形さんを御駕さまにしると仰やるのか知ら。』

元子夫人が冗談で言つた事が事實なので、静子は赤面した。

其の内、屈山老人も一所に夜食を済して、静子は自分の部屋へ閉籠つたが、晝間の事を思出すと、冷汗が出る程極りがわるい内に何となく嬉しい思ひがする様な。綾子ですらも、もし自分と尾形とがラブする事のあれば、其が當然だといふ。而も今日迄は、尾形自身が自分と結婚すべき父の内意を避けて故と替玉を寄したのではないかと疑つた、其れが全くの邪推であつて見れば、何時か見た夢を正夢に、互ひに夫と呼ばれ、妻と呼ばれる望みが無いではない。静子は其の樂き未來を想像して思はず心の中に笑みを含んだ。

(一四)

尾形俊助に對する戀の必ずしも絶望すべきでないを意識すると同時に、差當つての邪魔は金井直方が横戀慕。今ひとつは父の屈山が俊助に對する誤解。此の二つを何うにかして切抜ければ成らぬと思ふにつけ、静子は母の元子に己が意をほのめかして共に善後の策を講じつゝ、ある半ば、茲に静子

母子に取ては由々しき大事が降つて沸いた。其れは、父屈山が突然に朝鮮移住を思立つた事である。徳川家の遺臣として現政府に快からざる加賀見屈山は、今や朝鮮國の現状と幕末の其れを思比べて暗に同情の涙を灑ぐのであつた、而して此の亡國に瀕して居る山河の間に自分の老後を養ふ事の己が運命にふさはしいと考へた彼れは、急に斯くの如き志望を抱き始めたのであつた。京城と仁川とは日本から移住した人に自分の知己があるのみならず、豫て詩文の交りを結べる韓人も二三人はある。其れ等に使つて先づ永住の場所と方法を定めた上妻子を其處に迎へやう、と思立つては矢も楯も堪まらぬ老人の氣性として、内地では未だ日露の交渉が行難んで居る半ばに、東京を立つて彼の地へ赴いた。

無論、元子夫人にまでは自分の内意を打明けたのであるが、遙るく言葉

も通せぬ外國へ住みに行く事は夫人の身に取つて容易ならぬ難題であると言ひながら、一旦それと決心しては女子供の意見など到底耳に入るべき良人でないのと知つて居るので、元子夫人は只事の成行に任せるとして、一言も屈山老人に對して口を出さなかつたのである。

斯くて、角筈の留守には元子夫人と令嬢静子とのほかに奉公人が居るばかり。其の静子も母親から父の決心を聞いて、行末は住馴れた此の東京を後にして朝鮮の住民となる事かと心安からず思ふとは言ふもの、一方に於て仕合なのは彼れ金井直方に對する始末であつた。

屈山老人が朝鮮に立出する二三日前、果して表向きに直方から再び静子を娶りたいとの申込が元子夫人の許まで來つたのであるが、良人が云々で他行する其の取込みを口實に、返事を延び〜にして置いたのである。

さりとして、金井直方の妻となるくらゐなら、一生涯朝鮮でくらすが増しと言

ひながら、床しき尾形俊助と果して夫婦たるべき望のあるものならば、何時までも此の東京に居て、そうして何時かは其の人の側にいらしたい。静子は非常に望める前途を想像すると共に溜息を吐くより外はないのである。

『母さま。本當にお父さまは私たちを彼方へ御連れ遊ばす御心なのでせうか。私それを思ふと、何だか暗らアい穴の中へ引張られて行くような氣持になりますわ。』

『其うだらう。私も困まつた事になつたと思つて居ますが、然し私だけは最う先の短い身體だから、何うでも好いとして、お前みたいな若い者を朝鮮くんたりへ連れて行くなんて、御怨み申しては濟まないけれど、餘りお父さまが御心強いと思ひます。それについて、静子や。私は考へた事があるんだが、あの尾形さんに今のうち私から御願ひ申して、お前を

あの方の奥さまにして戴いては何うだらうね。』

(一五)

元子夫人は詞を續けた。

『私が見た所では、尾形さんに大かた否やはあるまいと思ひます。尾形さんさへ承知して下さつて、愈々お前の連合と極まつてしまへば、お父さまだつて、お前までを朝鮮へ連れて行かうとは仰やるまい。私も親ひとり子ひとりで、お前と別れるのは悲いけれど、まだしも朝鮮でお前までを埋木にしてしまふよりは、其の方が何んなに嬉しいか知れやしない。だから、私は尾形さんの心底を能く御聞き申して見ようと思ひます。』

『だつても、母さま。あなたとお父さまとが遠い朝鮮へ御出で遊ばして、私だけ日本に残つて居ては、何んなに心細いか知れませぬ。』

『其れは今も言ふ通りです。お前ひとり残して行くは辛いけれど、尾形

さんといふ立派な良人さへ出来れば、其の方がお前の仕合だし、又私まで本望と思ひます。就いては、何うしたものでらう。尾形さんを此方へ御呼立てするのも可笑なものだから、私が先方へ尋ねて行つて。あゝ、其うした方が物の順序といふものだらう。思立つたが吉日とかいふから、今日は幸ひ御天気もよし、是れから尾形さんの處まで行つて見るとしようね。

『でも、尾形さんが何ういふ思召で御出でますか。』

静子は向の返事を危んで、言可らざる心痛を胸の中に湛えるのであつた。

『だから、私が尾形さんに打つゝかつて見ようと言ふんです。お前。留守の間は不人だから能く氣を付けて御くれ。』

元子夫人は跡の事迄をくれぐれも言付け、着物を着替へて角筈の屋敷の前まで出かけると、ゆくりなくも向ふから尾形俊助の來るのに出つくわした。

『加賀見の奥さん。其の後は打絶えて御無沙汰を致しました。』

『まわ、あなたは尾形さんで御座いますわね。』

『何時やらは宿へ御尋ね下すつたさうですが、生憎行違ひになりまして失敬しました。』

『いゝえ、其の節は娘が御邪魔を致しまして。』

『御令嬢には飛んだ失敬を致しました。實は其の時分でした。御令嬢から屈山先生が僕に對して誤解をなすつて入らつしやるといふ事を伺ひましたので。』

『はい、實に何とも申上げようが御座いませぬ。色々な行違がありましたので。』

『僕は令嬢から其の事を伺つたんで、氣になつて成らんですから、今日には是非とも御面會を願つて、大いに手前の心情を吐露しようと斯様に考

へて出かけたのです。』
 『では、手前へ御越し下さる所で御座いましたか。尾形さん。私は又是れからあなたの處へ伺はうと存じまして。本當に好い處で御眼にかゝりました。』

『其うですか、矢張奇遇ですな。そうして先生は。』

『良人は久しく他行をいたして居りますが、兎に角これから宅へ御立寄り下さいまし。』

『でも、先生の御留守へ伺つては。』

『いえ、構ひませんから、まあ何うか。』

元子夫人は急に引歸して、尾形を吾が家へ同道したが、静子も其の譯を聞いて、心嬉しく出迎へた。座敷に主客の席が定まつて、一別以來の挨拶が御互ひに濟んで、跡は何時やら金井綾子に戀愛神聖論で惱まされた事、主

人屈山が朝鮮移住を思立つた事、斯んな話題で時間を移すうち、静子が食事の支度にと勝手へ立つた跡で、元子夫人は膝を進めて、娘との結婚一條を尾形に打明けたが、何うかと思つた俊助の返事は案じたより易かつた。

(一六)

『奥さん、あなたの思召は能く僕の胸に了解する事が出来ました。』元子夫人の言葉を聞了つて俊助は徐ろに口を開いたのである。『地位も無ければ財産もない此の俊助に、其ういふ有難い思召は實に感謝に堪へません。僕は其の御厚意を悦んで御受けいたしました。僕は御家の御令嬢を妻とする事を心から満足にも名譽にも思ひます。』

『では、手前の御願を御聞き下さいまして、不束な娘を妻に遊ばして下さいるので御座いますか。』

元子夫人は嬉しさのあまり、息をはずまして言つた。

「其うです。尾形俊助に二言はありませんが、然し奥さん。其れに就いてあなたまで鳥度御含み置きを願はなければ成らぬ事があります。」

「其れは如何な事で御座いませう。」

「はい、他ではありませんが、僕が今日の尾形俊助となる事の出来たは、全く一個の恩人の御蔭なのです。其の恩人は故郷の會津に居る多額納税者で、楯岡四郎藏といふ人ですが、東京へ出て苦學をして居るうち、此の人に救はれて、其れから學資の供給を得たので、大學を卒業する事が出来たのです。」

「其の御談は手前も存じて居ります。」

「其うですか。御存じならば別に詳しくは申上げる必要もありませんが、楯岡といふ人と僕との間には其ういふ深い關係がありますので、今日でも、恩人とも、父親とも、其の人を思うて居るのです。ですから、僕の

一身上に關しては何事でも其の楯岡といふ人に無斷で行つた事はありませぬので。」

「大きに御尤もな事で御座ます。では、娘を貰つて下さいませに就ても、

其の楯岡さんの御差圖が無くては行けないと仰るので御座いますか。」

「其うです。無論、結婚問題なんかについては、恩人だつて喙を容れる譯のものぢやありません。又楯岡といふ人も其ういふ事に干渉する人物ではありませんが、然しながら僕の立場として、一應先方へ形式的にも相談して遣つて、其の同意を経るといふ事が必要なのですから、表立つての契約は何うか其の上での事に願ひたいですが。」

「其れは何方でも手前は構ひません。あなたの思召しを今日伺ひました上は、何うせ表だつての事は、改めて誰か仲人を頼みまして、其の人から取計はすやうに致しませうから。」

「しかし、奥さん。僕の方は其れで極まつても、先生の方が如何でせうな。此の尾形を誤解して入らしつては、先生の方で滅多に御許しが出ないかと思はれるですが。」

「尾形さん。其の事は大丈夫で御座います。其の仲人に口を利かして、是れまで行違ひであつたといふ譯を腑に落ちるやうに話しさへすれば、良人はすつかり迷ひの夢がさめて、あなたが此の縁談を承諾して下さつた事を却て悦ぶで御座いますから。」

「何うか、其ういふ都合に願ひたいですな。實際僕は先生に非常なる誤解をされて居るさうですから。」

「あなたには御氣の毒さまで成りませんが、何うせ分る時には分かるので御座いますから。」元子夫人は斯く言ひながら、傍らにある呼鈴を鳴らした。

「あの鍋や。先つきのものを早くつて。静子に其う言つて御くれ。あの、尾形さん、田舎で何にも御座いませんが、今日は娘が何か素人料理を致すさうで御座いますから、悠くり御遊びなすつて下さいまし。」

「いや、御馳走なんか却つて痛入るですから、失敬ですが僕は是れで御暇を致します。」

尾形は匆々に座を立上つた。

(一七)

静子も勝手から立出で、尾形を引留めようとしたが、彼れは頑として聞かなくなつた。

主人屈山の留守へ尋ねて来るさへ心やましき嫌のあるに、其の留守に静子と結婚すべき内約さへ済し、尙も長座をして馳走にまで預かるは、謹み深き者の行ひでないから、今日は是非此のまゝ、歸らねば成らぬとの事で、流

石に元子夫人母子も此の正當なる理由を打消す辭柄は無かつたのである。さて、尾形を送つた跡で、元子夫人の口から今日の結果は令嬢静子に報告せられた。

「静子や。だから最早尾形さんの腹は極まつて居るんです。其の會津の楯岡さんといふ方から返事が來次第に、お父さまへ申せば、何も彼も其れで決着してしまふといふものです。やれ、私も此れで重い荷物を下したやうな心持がします。」

元子夫人が悦ばしげな顔色を見て、静子も心嬉しく思はぬでは無いが、まだ何やら安んせざる氣色が其の眉宇に溢れた。

「母さま。其れでも尾形さんばかり承諾おそばしても、其の楯岡さんから何ういふ返事が來ようも知れませぬわ。もし楯岡さんが、今度の結婚を不承知だと仰やれば、尾形さんは何うあそばす事も出來ないでせう。」

「其れは其うだけれど、尾形さんの口振では大丈夫なんだよ。楯岡といふ人は其んな事に口を出す人物ぢやないつて、現在尾形さんが仰やつたんだもの。」

「でも、向うから返事の來るまでは安心が出來ないと思ひますわ。」

「お前のやうに取越し苦勞をすれば、何事だつて安心は出來ないけれど、現在尾形さんの仰やつた詞を信用すれば其れで充分ぢやないか。其れとも、お前は彼の方の詞まで疑つて居ますか。」

「あら、其んな事はありませんけれど。」

「其れなら、詰まらない取越し苦勞をするものぢやありません。そうして父さまの方は私が受合つて故障は無いとして、表立つた仲人が入るんだが、誰に頼んだものだらうね。」元子夫人は暫く思案にくれたが、「静子や。何うだらうね。お前が歌を教はつた松柏庵の先生を御願ひ申しては。」

彼の方なら尾形さんとも御心易いんだし、今度の仲人を願ふには彼の方が一番いいだらうと私は思ひますが。」

「だつても、先生に御願ひ申せば、御弟子仲間へ皆知れてしまつて、私どんなに極まりが悪いでせう。」

吾が子ながら静子の跡氣なさに、元子夫人は莞爾と微笑んだ。

「お前の様に耻かしがつては仕方がありません。何方に仲人を御願ひしたつて、何せ一度は人様に知るんだから。では、尾形さんから改めての返事が知れ次第に、私が松柏庵の先生へ伺つて、其の事を願つて見ようね。」
羞を含める静子は微かに其の首を打領いた。

(一八)

尾形俊助が元子夫人から直接に結婚の申込を受けたのは實に當人に取つて意外であつたが、然しながら静子を己が妻にといふ事は彼れが意中の希望

だつたのである。即ち静子が俊助に想ひを運んで居る如く、俊助も亦静子に其の想ひを運んで居たのである。

斯くの如く、静子に對する俊助の戀は何時から始まつたであらうか。牛臥で初對面の時はまだ其うでなかつた。二度目に松柏庵の大會で出會つた時、静子の美しき眸と其のしとやかなる姿とは或ひは俊助をして特別の注意を惹かしめたかも知れぬが、彼れの爲めには未だ意中の人でなかつたのである。蓋し俊助のハートに始めて戀の神の征矢が立つたは、静子から獄中へ齎らしめた其の消息文であつた。

只つた一片の手紙が自分の精神に斯ほどまで著しき感動を何故に與へたかは俊助自身に説明し得なかつたのであるが、彼れは一たび静子の慰問の書を手にしてより、何とはなしに其の人なつかしいと思ひ初めたのである。而して自分の戀に落ちた事を始めて自覺したのである。

出獄してから直ぐさま角筈を訪問した心の底には、假令俊助自身も意識せぬとは言ひながら、其ういふ意味が含まれて居たのかも知れぬ。そうして其の歸り路に静子と出會つて己が宿へ同道した時、俊助は今まで覺えぬ血の躍りやうを覺えたのであつた。

今日しも再び加賀見の屋敷へ足の向いたは、言ふまでもなく、俊助の胸に其の思はくがあつたからであるが、思ひがけなくも、結婚問題は元子夫人の方から口を切られたので、二つ返事で承諾の旨を答へて、匆々に宿へ歸るや否や、故郷の恩人たる彼の楯岡四郎藏へ宛て、一通の書面を送つた。

其れは、今度の縁談について楯岡の同意を求むる文面であつたが、無論先方に異存のあらうとは思設けぬながら、其れに對する返事を一日千秋の思ひで待つて居ると、何故か向ふからは一向使りが來なかつた。然しながら、俊助は其れが爲めに決して悲觀はしなかつた。何となれば、楯

岡が日ごろの性質を能く呑込んで居るからで、彼れは草深き田舎にこそ潜んで居れ、度量の海ほど廣い大人物なのである。そうして一個人の結婚などについて齟齬干渉するやうなせせ細しい人間では無いのである。随つて急に返事の來ぬのも、楯岡の頭のうちには、善惡いづれとも餘り今度の問題に重きを置いて居ぬからであらうと信じたのである。

此の間にも、俊助は始終加賀美家へ出入して、未來の妻たるべき静子、未來の姑たるべき元子夫人と愈々親みを重ねたのであるが、或る日、いつもの通り散歩がてらに角筈の家へ訪づれると、静子の顔色の常ならぬのを認めためたので、

『静子さん。鹽梅でも悪いのですか。何だか今日は變ですぞ。』

『いえ、何うも致しませんの。』

静子の答へに變りはないが、其の力なげなる調子は愈々俊助の耳に異様に

響いた。

(一九)

「静子さん。あなたは僕に物を隠すんぢやありませんか。」
 「何うして、其んな事を仰やるの。」静子の聲は益々沈んで聞こえる。
 「でも、餘つ程妙なんですよ、僕が推測するに、あなたは非常な心配を
 懷いて居ますな。静子さん。心配があるなら僕にも話して下さい。えッ、
 静子さん。「尾形は重ねて名を呼掛けた。「僕の爲めにあなたは未來の妻ぢ
 やありませんか。是から先き百年の苦樂を共にせねば成らぬあなたと僕
 とです、其れに心配事があつても僕に隠すなんて、餘り水臭いといふもの
 ですよ。あなたに愁があるなら僕も其の愁を分けて貰はう、又あなたに悦
 びがあるなら、僕も其の悦を分けて戴かう。これが夫婦としての當り前ぢ
 やないですか。さあ、聞かして下さい。あなたに何ういふ心配があるか。」

「でも、尾形さん。私とあなたとは全く其んな間柄に成れませうか。」静
 子は淋しさに言つた。

「其んな間柄。」俊助は眼を見張つた、「ぢやあ、あなたと僕とは夫婦にな
 れないと言ふのですか。」

「いえ、成れないとは申しませんが、成れますか、如何でせう、とあなた
 に御伺ひを致すので御座います。」

「これや、愈よ怪しからん。あなたは何うして其ういふ事を……。あ、
 分かつた、では金井直方から又何か申込んだのですな。」

「いえ、其うちや御座いませんの。綾子さんのお父さまへは、あれつさ
 り父が不在だからと申して、母からまだ何とも返事を致さずに居るので
 御座います。其れよりも、尾形さん。楯岡さんとやら仰やります方の御返
 事は如何で御座いませう。」

「ひ、分かりました。では、あなたは楯岡の返事が遅いから、故障でもありはせぬかと仰やるのですな。」

「其うで御座いますの。」

「なに、其れなら大丈夫です。何うしたんですか、此方からは直ぐあなたと結婚する事を言ふて遣つたのですが、今日まで返事のない處を見ると、何か取込んで居るのでせう。其れとも、急いで返事を出す程の事件では無い、自分の返事を待たんでも實行して差支ないといふのでせう。何時やらも申した通り、楯岡といふ人は此んな事を極めて無頓着なんですから。」

「あなたの仰やり遊ばす事を信じないでは御座いせんが、でも、先き様からはつきり御返事が無いと、私は何だか安心が出来ぬように思はれませわ。」

「其うですか。あなたが其んなに仰やるなら、此れから歸つて、直に返事を催促の手紙を遣りませう。」

「何うぞ其う遊ばして下さいまし。楯岡さんの方が極まらないと、父の方へも申して遣る事が出来ませんかから。」

「全く其うでしたな。静子さん。斯うなれば僕だつて一日も早くあなたに良人と呼ばれ又あなたを妻と呼びたいですから。」

静子は恥かしさうに俯向いたが、包み切れぬ嬉しさは其の笑顔に現はれた。

「でも、尾形さん。もし楯岡さまの方から嫌な御返事が参つたら、あなたは何う遊ばすので御座いませう。」

「あは、、あなたのように苦勞性ぢや困るですな。なに、其の心配には及びませんよ。其れよりも僕はあなたのお父さまの方が何うかと思ふのです。」

『でも、父の方は母が受合つて居りますから。』
 『では、御互ひに取越し苦勞はよしにして今日は久しぶりにあなたの音
 樂でも伺ひませうかな。静子さん。母さまの御部屋へ参りませう。』

『さあ、何うぞ。』

今まで鬱ぎ切つた静子がいそ／＼先に立つて尾形を案内しようとした途端
 に、

『あの、尾形さま。電報が参りましたつて、御宿から使が此れを持つて

参りました。』

女中の差出したは一通の電信であつた。

『あゝ、其う。』

尾形は眉をひそめながら封を切つて見ると。

「シユジン キトク スグ コイ タテヲカ。」

として、差出し局は「若松」と記されてあつた。

(110)

若松の楯岡よりの電報で、主人危篤とあるからは、言ふまでもなく、尾形
 俊助の恩人たる四郎藏が死に瀕して居るのである。

其と聞たらば直に驅付くべきは勿論である上、直ぐ來いと記してあるは、何
 か自分に遺言などのあるのであらう。件の電報を手取るや否や、俊助は、
 静子にも又元子夫人にも仔細を語つて、匆々に加賀見の屋敷を辭し去つた。
 有樂町の下宿まで車で歸つて逗留中の着替などの支度を整へ、其の日の午
 後の急行列車で上野を出立したが、郡山で岩越線に乗替へる時間も都合よ
 く行つて、若松へ着いたのが彼れ此れ夜の十一時過ぎであつた。楯岡家は
 停車場から些し離れた慶山といふ山の下に廣い屋敷を構へて居る。其處ま
 で車を飛ばして門前へ降りると、門の内にザワ／＼人の出入するのが、俊

助には一種物恐ろしい感を興へた。此の奥座敷に恩人の四郎藏が今ごろは断末魔の苦みをして居るだらうか。若くは東京からの道中が間に合はなくて最早息を引取つたのではあるまいか。常には何事にもピクともせぬ俊助が胸を跳らして玄關へ飛込ひと、豫て懸念な楯岡家の大番頭で三郎右衛門といふ老人が、彼れの姿を見付けて、いそ／＼奥から立出でた。

「やあ、俊助さま。能く来て下さりました。旦那さまは今朝からは御前様ばかり御待兼で御座います。」

此れを聞いて、まだ存命である事だけは知れたが、そうして、病氣は如何なる容體で、何時からの發病であるか、俊助が詞せはしく尋ねると共に三郎右衛門老人は懇ろに答へてくれた。

日ごろ達者自慢の主人楯岡四郎藏も、何うしたもののか、此の秋の始めから急に弱つて、別に何處が悪いといふ程でもないが、三日に揚げず不快がちで

居た事、醫者にかゝれと家族が注意しても其れほどの事はないと自分で打捨て、置いたが、先月の末、愈々堪まらなかつたと見えて、自分から言出して醫者に診察して貰ふと、病は腎臟萎縮で輕からぬ容體であるが、然しながら昨今のうちに何うといふではないから、養生が肝要であると教へられた事、すると、東京では日露の外交事件が喧かましくなつて、焼討騒ぎが始まる、俊助はじめ在野政客が檢舉される、國事に熱心なる四郎藏は二たび其れを新聞で見ながら、現政府の不忠實にして専横なる事を憤ると共に、病勢日ましに進んだ、さりとて係りの醫者はまだ何とも言はぬが、當人は最早生命の旦夕に迫つたといひ、其れにつけて尾形に息のあるうち言つて置きたい事があるから、呼寄せて呉れとの言付で、急に電報を出した事、三郎右衛門老人は最も簡單に右の始末を語つた上、更に詞をつけた。

「俊助さま。兎に角早く御病人の所へ行つて下さいまし。お前を見さし

つたら、旦那が何んなに悦ばつしやるか知れませぬから。』
 老人に案内されて主人四郎藏の部屋へ通ると、其處には一家一門の眷族を
 はじめ、出入の重つた者が、次の間から枕元までギツシリ詰めて、愁の雲
 は一座を掩うて居る、其の真ん中に横はつた主人四郎藏が、此の春、俊助
 が東京で會うた時とは、見變るばかり瘠せ衰へで、病苦に呻いて居る有様
 は二眼と見られぬ痛はしさに、俊助は愁然として眉を瞬いた。

『先生、俊助で御座います。只今着きました。』

『旦那さま。俊助さまが東京から見えましたよ。』

妻君の峰子といふが、耳に口を寄せたので、病人は始めて眼を見開いた。

『うむ、俊助か。私はお前を待兼ねて居つた。さあ、此處へ来てくれ。』
 病苦を力めて獨りで起直らうとするを、左右から介抱人が手を添えた。

(一一一)

『丁度、正午前でした。電報が届きましたので、驚いて駆付けたので
 が、何分路のりが遠いもんですから。』

『む、其うぢや。私も事によつたら、お前には會ふ事が出来んで死ぬ
 かと思ふて居つた。私は……此の私は……。』

四郎藏が苦い息の下から何やら言ひかけようとしたのを、俊助は制止めた。

『先生、でも、其ういふ心細い事を仰やつてはいけません。此れくらゐな
 病氣に打負けるやうなあなたで無い事は此の俊助が保證いたします。』

『いや、駄目ぢや、幾らお前が力を付けてくれても、此の私はもう行かん、
 私は覺悟をして居る。今夜のうちに死ぬのぢやと覺悟をして居る。俊助』
 『はつ。』

『其れについて、お前に言残して置く事があるので、わざ／＼呼寄せた
 のぢや。』四郎藏は言ひかけて、落窪んだ眼で頻りに四方を見渡して、『む

「む、俊助に内所の談があるから、皆あつちへ立て御くれ。峰。お前もぢや。」
妻たる峰子夫人までを遠ざけての遺言は如何なる大事かと、俊助はソツと病人の顔を打守つたが、峰子をはじめ人々が此の座を去つたを見済まして、四郎藏は瘦せ細つた手で磨いた。

「俊助。もつと近く寄れ。お前は東京で結婚するとか言つてよこしたな。」
「先生。其の御相談に、何時か書面を差上げたので御座います。」
「む、其れは見た。慥かに見たが、手紙で返事をして片便りぢやから、病氣さへ些しでも快くなつたら、私が東京へ出向かうと思ふうちに、此のさまぢや。東京へ出るところか、今夜限りの命ぢやから、此の通りお前を呼寄せて頼むのぢやが、俊助。大かた私が頼みはお前に取つて苦痛ぢやらう。苦痛ぢやらうが堪忍してくれ。今こゝで私の思はくを打ちつけに言うてしまふが、お前には疾うから私の心で極て置いた嫁があるの

ぢや。だから、今度の縁談だけは暫く見合はせてはくれまいか。俊助。氣の毒ぢやが、此れが私の一生の願ひぢや、人にも少しは知られた此の四郎藏が僅かばかりの事でお前に恩を被せて置いて手前勝手な事をいふと必ず怒つてくれるな。さて、私の思はくを此の通りお前へ打明けるにいつては、昔の恥から言はねば成らぬ。俊助。馬鹿な奴ぢやと思はずに、能う聞いてくれ。」

(三三)

瀨死の病人楯岡四郎藏が苦しき息の下から語り出した次第は次の如くであつた。
會津四郡に楯岡と言へば、松平家の入郷以前から大分限として知られた舊家。四郎藏は其の惣領に生まれて先祖代々の家督を継いだのである。
廿歳臺に今の細君を迎へて、夫婦の仲に一粒種の四郎次といふ男子を儲け、

家庭も圓滿なれば、四郎藏は一郷の名物と仰がれ、政治運動にも身を入れ、一時は多額納税者として貴族院議員たるの榮譽さへ擔つた。苦學生尾形俊助が四郎藏に知られて其の補助を受けたは、此の議員時代からの事であつたが、さて地方の紳士の模範ともいふべき四郎藏も色戀の道だけは思案の外といふ諺の通り、お芳といふ小間使に人知れず手を付けて、其の腹に女の子を擧げた。

本妻腹には只つた一人の男の子があるだけだから、當り前ならば公けに其の女の子を内へ入れて育んでも然るべきであるが、紳士の體面を重んずる四郎藏は、隠し妻との間に私生兒さへ儲けた事を深く慙ぢて、妻にも語らねば世間にも秘密にし、お芳は相應の縁を見付けて自分で片付けた上、鶴子と名づけた其の女の子はまだ乳放れさへせぬうち他へ里子に遣つてしまつた。其れは今から十七年以前の事で、ことし鶴子は丁度十七歳である。

里子に貰つたのは秋田繁之助といふ福島縣の官吏で、其のころ若松に在住し、夫婦の間に一子のないので、斯の通り四郎藏の落胤を親知らず子知らずの約束で貰つたのであるが、其の後、秋田は諸方に轉任して終に東京住居となつた。

無論鶴子も養父母に伴はれて故郷を遠く放れてしまつたが、其れからは四郎藏とは人知れず消息を絶さず、或る時は、四郎藏自身に東京へ出た序でに、秋田一家を訪づれて自分の娘鶴子と對面した事も二三度はあつた。而して、表向きは親子の縁の切れたとは言へ、此の鶴子にふさはしき婿を娶はしたいと思ふにつけ、自分が保護の下に男一匹に仕上げた尾形俊助を思ふ心は密かに四郎藏の胸の中に往來して居たのである。

然しながら、鶴子の事を世間に深く秘したる彼れは、今更俊助に對して自分の秘密を語る事の極が悪く、今日まで其のまゝに打過ぎたのであるが、其

の後鶴子の養父繁之助は病死して、養母とふたり、僅かばかりの遺産と、四郎藏が鶴子に付けてやつた五百圓ばかりの金とを資本に、今では秋田家の故郷たる肥前の長崎で幽かな暮らしをして居ると、一封の郵便で知つたばかり、折ふしの消息は此方からも絶やさぬと言ひながら、風につけ雨につけ、遠國放れたる吾が子の鶴子が事を四郎藏が思出さぬ日とては無かつた。而して、何時しか俊助に此の始末を打明けて、吾が落魄たる鶴子の良人として衰へかけた秋田の家を興してくれとの事を頼まうと思ふうち、意外なる大病に取りつかれ、自分の命のはや長からぬ事を覺ると共に、息あるうちに其の事を俊助に語らうべく、電報で呼寄せたのであつた。

「俊助。何うぢや。私の頼みはお前に迷惑ぢやらうが、此の四郎藏が生願ひぢや。其の加賀見とやらいふ方の縁談は断はつて、娘の婿になつてくれぬか。押付がましいが、實は長崎の方へも薄々お前の事を言うてあ

るのぢや。其れともお前は嫌か。む、黙つて居るのは不承知と見るな。」

(1111)

俊助が返事に躊躇するを見て、四郎藏は是非なさそうに溜息をついた。

「俊助。成程、私の頼みが無理であつた。もう何にも言はぬ。此の四郎藏がお前の世話をしたのは、有爲の青年を愛するといふ義侠心からではなうて、娘の婿にしようといふ目的があつたからぢや、と大かたお前は私をさげすんで居るぢやらう。あゝ、死ぬといふ際に詰まらぬ事を言出して、淺ましい私の心をお前に見せたのは此の四郎藏の不覺であつた。俊助。何事も水に流して御くれ。決して私はお前の意思を束縛するやうな事はもう決して言はぬから。矢張今までの四郎藏ぢやと思つて快く死水を取つてくれ。私の望みは最早其れだけぢや。」

現在死にかゝつて居る恩人の口から斯う言はれては、俊助も頼みの次第を

此の場で承諾したいは胸一杯であるが、然りとて、一方に於て加賀見家の母子に對し、現に静子と結婚の内約を結んで置いて、今更その約束を破る事は男子として能う出来ぬ。されば、切破詰まつた此の場合に何と答へをしたものであらう、と心の中に當惑して居るを、四郎藏は自分勝手の事を言出したので、相手の感情を損うたと思つたらしい。

「俊助。機嫌を直して何とか口を利いてくれ、先つきの談は私の方で取消すから。あゝ、今までは親子も同様に付合つた私とお前ぢや。死ぬといふ際に其のお前を氣まづくさしては、私は思ひが残つて成佛する事が出来ぬ。俊助。そのやうに黙つて居すと、打解けて笑つた顔を見せてくれ。」
 其れを聞いて、俊助の胸の内は愈々堪まらなくなつた。加賀見一家へ對しては假令如何なる不義理とならうとも、又如何なる破約をしようとも、明日をも知れぬ恩人の頼みを容れて、満足のうちには死なしたい。此の十年の

間、海より深き恩を擔つた其の人の只つた一つの頼みを拒絶して此のまゝ、永き別れとなることは、何うしても良心に對して忍びない。俊助は心を決して始めて口を開いた。

「先生。僕は先生の御詞は決して背きません。如何にも其の鶴子さんと結婚して秋田の家名を襲ぐ事を此の場に於て誓ひます。」
 四郎藏は眼を見張つた。

「俊助。もう其の話はよしてくれ、私の方で取消したのぢやから。」
 「あなたが御取消しになつたなら、今度は僕の方から、先生に御願ひを致すのです。何うか鶴子さんを僕の妻に戴いて、而して其の秋田家の養子に僕を成すつて下さいまし。先生。此の通り御願ひです。」
 「む、其れでは、お前は矢張私の希望を容れてくれる氣か。俊助。私はお前に禮をいふぞ。何うか娘を可愛がつてくれ。」

「はッ、先生に誓つた詞は破りません。」
四郎藏は更に思出したやうに、

「しかし、鶴子が今では何う生立つて居か。其は私にも分らんから、もしお前の妻として大した差支のない女ならば妻にしてくれ。もし亦お前の妻として故障のある女ならば、其は是非に及ばん、お前に強ひて結婚してくれとは言はぬが、其れなら切めて秋田の家だけを守立て、やつてくれ。」
「先生。御詞の通り誓つて實行いたします。」

「む、忝ない 俊助。手を貸せ。私はお前の其の詞を聞いて、此の世に思残りのなく死ぬ事が出来るのぢや。」

俊助の手を緊と握詰めた拳の上には嬉涙がホロ／＼と落ちた。

(二四)

尾形俊助が後の事を引受けた其れに氣の弛んだのか、四郎藏の容體は其の

朝のうちに段々悪くなつて、曉がたの四時といふに息を引取つてしまつた。妻の峯子は素より、俊助と同じ年輩で今は學校生活を止めて家事を手傳つて居る總領息子の四郎次、そのほか一家一門の悲嘆は言ふまでもないが、俊助もさながら父を喪へるが如く愁の涙に沈んだ。

其れからの跡片附に、俊助も幹旋の勞を取り、家中引繰り返す混雜に他の事は思出す暇とてもなかつたのであるが、野邊の送りが首尾よく濟んで、差當つた自分の用事が無くなると共に、俊助が胸に浮ぶは、恩人四郎藏へ其の臨終の際に誓を立てた一言である。

其れを實行するについては、是非とも加賀見の静子との契約を破らねば成らぬのであるが、俊助には其れが熱鐵を呑むより辛いのである。静子の母には彼れほど熱心に念を押され、自分とて私かに意中の人と思つた其の未來の妻を捨て、恩人の娘たる鶴子の婿となる事は義理としても人情として

も忍びられぬ。

今ころは、静子が如何に自分の歸京するのを待兼ねて居てあらうか。而して四郎藏の安否を氣遣ふと共に、二人が結婚について四郎藏の意見の善悪いづれであるかを如何に案じて居るであらうか。東京を立つ時も、其の前も、楯岡家には何等の故障のあるべき筈がないから安心してくれと自分が斷言をしただけに、よもや斯ういふ結果にならうとは静子も夢には思ふまい。

静子ばかりではない。自分だつて、全く豫想外の事であつた。恩人四郎藏は静子と自分の結婚を快く承認してくれて、今度歸京すると勿々に、良人と呼ばれ、妻と呼び、互ひに樂き新生涯を始め得る事の出來ようと思つたものを、待設けた事はがらりと轉倒して、自分は最早静子の良人ではない。恩人の娘とは言ひながら、一面識さへなき婦人を妻として一生を送るのが自分の定まつた運命なのである。

否、其れは定まつた運命では無い。恩人に誓つた言葉さへ反古にすれば、鶴子と結婚する必要も無ければ、静子への契約を破るにも及ばない。自分の恩人と思つた二人が差對ひで約束して、而も鶴子の事は妻君の峯子さへ夢にも知らぬ秘密である。自分が誓つた其の四郎藏が亡くなつたのであるから、死人に口はなし、假令長崎の方へは自分の事を薄々書面で言送つてあつたところが、其ういふ事は頼まれた覺えがないと言つてしまへば其れまでの事である。さすれば、死人に誓つた事は水に流してしまつて、飽くまでも加賀見母子への約束を守り、静子と結婚しようか。

いや、其ういふ不徳な事は此の俊助に何うあつても出來ぬ。自分が遺言を承諾すると答へた時、恩人は喜んで笑つて手を握つた。其の時の其の面ざしを今眼の前へ思出すにつけ、假令生きて居る静子母子には言葉を食む罪人とならうとも、死人を欺く事は良心に對して忍び得られぬ。だから

の良人たる事を誓ひし者に候、其の誓を破る事の不徳義なるは無論に候へば、斯くの如く止むを得ざる恩人の囑望を拒絶すべしと一旦は決心致し候。然しながら終に其は不可能に歸し候。

『小生は、死に瀕せる恩人が其の苦衷を語り候を聞きて、假令御許御二人様には義理知らずと思はれ候とも、大恩ある故人が最期の使命に背かざるべしと覺悟仕り候。斯くて、小生は故人の意に盲從して愛情なき一面識なき或る婦人と結婚すべしと決心仕候。』

『されば、小生は最早静子様の良人に無之候。寧ろ御二人様を賣つたる不徳義極れる悪魔にて御座候。其御二人様の御怒りと御恨み、且つは小生自身が自ら愛する人を棄て、愛せざる人と同棲する苦痛とは、死せる恩人に對する犠牲として甘受仕るべく候。』

『御二人様は、斯くの如き俊助を怒りたまふべきか。もしくはは憐みたま

ふべきか。其は御二人の思召のまゝ、如何やうともあるべく候。せめて御眼にかゝり事情御訴へ申上げたく存候へども、其れは餘りに厚かましと、故と書面にて申上候。此れが御二人様に宛てたる俊助が最後の消息たるべく候。此の上は御一門の幾久しく榮えて皆々様幾久しく幸福ならん事を蔭ながら奉祈候。泣血百拜。』

尾形俊助

加賀見元子様。

静子様。』

俊助は若松から此の手紙を出した翌日、直ぐさま長崎へと出立したが、東京は素通りにして有楽町の己が下宿へさへ立寄りなかつた。

(二二六)

『母さま。尾形さんは何う遊ばしたのでせうね。』

俊助しゅんすけからの書面しょもんを受取うけとつた静子しづこは、餘あまりの事ことに涙なみださへ出でないのである。

『本當ほんたうに呆あきれてしままうわ。尾形おがたさんに限かぎつて、よもや斯かういふ事ことはあるままいと思おもつて居ゐたに、此こでは私わたしたちをベテンに掛かけたのも同前どうぜんぢや無ないか。』

元子夫人もとこふじんは腹立はらだたしげに涙なみだぐんで居ゐる。

『其それは其そうだけれど、此この手紙てがみで見みると、尾形おがたさんも餘程よほど退引のりひきならぬ義理りに挿はさまれなすつたのかと思おもはれます。』

『何なうせ、其それは義理ぎりの板挿いたはさみかも知しれないが、だつても此方こつちが先約せんやくだらうぢやないか。先約せんやくの方は勝手かたて次第しだいに断ことはつて、他ほかへ婿むこに行くから其そう思おもつてくれとは、何なんといふ破やぶれかぶれな挨拶あいさつだらう。斯こんなに踏付ふみつけにされて居ゐて、お前まへはまだ尾形おがたさんの肩かたを持もつんだね。』

『母かあさま。其そうぢやありませんわ、私わたしだつて何なんなに口惜くやしいか知しれませんけれど、此この御手紙おてがみに復雜ふくざつの事情じじやうがあると書かいてありますから。』

『其それは人ひとの秘密ひみつだから言いへないとおるぢやないか。其そういふ暗い言譯いひわけは言譯いひわけにや成なりません。』

『其そう母かあさまのやうに怒おこつてばかり居ゐては兩方りやうほうの感情かんじやうが疏通そつうしないぢやありませんか。此この書面しょもんだけでは餘あまり簡單かんたんで譯わけが分わらないから、母かあさまが尾形おがたさんの御眼おめにかゝつて、能よく伺うかつて見みるのが必要ひつようだと私わたしは存ぞんじます。』

『其それはお前まへが言いふまでもありません。何なうせ東京とうきやうへ歸かへつて御出おいででだらうから、私わたしは先方せんほうへ尋たづねて行いつて、みつちり譯わけを糺たださなくては此こまゝに放任うちやつて置おけなす。』

『其そうもしたら、もつと詳くはしい尾形おがたさんの思召おほしめも知しれるでせうから。』

主人あるじ屈山くつざんが他行中たぎやうちゆうなので、さなきだに物淋ものさびさ加賀見かがみの家いへは、俊助しゅんすけからの此この書面てがみが届こいてから、一層そう陰氣いんきになつたが、其その翌ある日ひより元子夫人もとこふじんは殆ほとん

ど毎日のやうに有楽町の尾形が宿を訪れたが、本人の俊助は會津へ出立したきり歸京せぬとの事で、何時も要領を得ずに歸つて来る。一方に令嬢静子は毎日氣分も鬱さがちに、自分の部屋へ閉籠もつたきり、人知れず泣いてくらしして居るうちに一月ばかり経つてしまつたが、俊助は今に東京へも歸つて來ねば、會津にも居ないで、何處かへ旅行したとの風聞が静子母子の耳に入つた。

『母さま。もう尾形さんの事は打捨つてしまひませう。御眼にかゝつて譯を聞いたところで、何うせ此方の約束は取消すといふのですからね。』
 『其うねえ。腹を立つたり、恨んだりした處で、向ふが嫌だといふものなら仕方がないんだが。静子。お前は其れで諦めが付きませうか。彼の手紙が來てから、毎日眼に見えるやうに瘡せ細つて、此の上にお前の身體に病氣でも出たら、私は何うしようと、其れが心配で成りませせん。』元子

夫人は斯ういふ間にも、涙が留度なく其の頬を流れて居る。

『ですから、母さま。私も尾形さんの事を成るだけ忘れようと思つて居ますが、其れには、早く御父さまが朝鮮へ呼んで下されば可いと思ひますわ。東京に居ると色々な事を思出したり何かして、何時も悲くなつたり口惜くなつたりしますから、寧ろ知らぬ土地へ行つて、父さま母さまと三人で一生涯仲よく暮らしたう御座います。』

静子がホロリと熱涙の一滴を見て、元子夫人は堪まらなくなつて袂で己が顔を掩ふた。

(二七)

静子母子に對する私の契約を破つて、恩人の遺命を全うすべく、健氣にも心を決した尾形俊助は、先づ故人の落胤なる鶴子と其の養母とに面會して、自分の意を告げる事の一日も早さだけ其れだけ故人の靈を慰めるであらう

と考へたので、東京さへ素通り長崎へ向つたのであつた。故四郎藏の遺言状によつて、俊助へ分配せられた金は尠からぬ高であつたが、是は自分への名義と言ひながら、實は陽はに言へぬ落胤の鶴子へ故人よりの贈物かと思へば、現金の保管は楯岡家の相続人たる四郎次に托し、自分は旅用に必要なるだけの金を懐ろに、海陸恙がなく長崎へ到着して、宿屋へも着かず、四郎藏から聞いた處名を目當に秋田といふ家の所在を捜した。處は長崎の鍛冶町で、秋田お捨といふが鶴子が養母の名前と聞いたので、其れを便りに行つて見ると、先々月引越して今は八幡町の芝居裏に居ること。更に車を飛ばして其處を捜したが、薄暗いやうな狭い横町に、東京で言へば九尺二間に毛の生えた小さな長屋。そこに『秋田すて』と汚れた木の札が掲げられてある。何うせ稼手の主人に死なれて、母子二人でくらして居るだけ豊かな生活であらうとは、俊助も豫期しなかつたのである。

が、然しながら、此の貧民窟が自分の定まれる養家であるかと思ふと、何となく快からぬ感に撃たれた。

格子戸を明けて案内を乞ふと、臺所から立出でたは四十を些し越えたと思はれる年増で、家の見すばらしいには似合はず、小さつぱりした半纏を引掛けて、頭は櫛巻に結つて居る。

『御當家が秋田さんと仰やるのですな。私は遠方から參つたもので、御主人に面會いたしたいのですが。』

『はあ、手前が主人の捨と申すもので御座いますが、あなたは何方さぞから。』

俊助は假初にも官吏の妻君であつたといふから、お捨といふ婦人は今すこし品格ある女であらうと想像したのであるが、此の半纏着のが當人だと聞いて、聊か意外に感じた。

が、然しながら、此の貧民窟が自分の定まれる養家であるかと思ふと、何となく快からぬ感に撃たれた。

格子戸を明けて案内を乞ふと、臺所から立出でたは四十を些し越えたと思はれる年増で、家の見すばらしいには似合はず、小さつぱりした半纏を引掛けて、頭は櫛巻に結つて居る。

『御當家が秋田さんと仰やるのですな。私は遠方から參つたもので、御主人に面會いたしたいのですが。』

『はあ、手前が主人の捨と申すもので御座いますが、あなたは何方さぞから。』

俊助は假初にも官吏の妻君であつたといふから、お捨といふ婦人は今すこし品格ある女であらうと想像したのであるが、此の半纏着のが當人だと聞いて、聊か意外に感じた。

『私は、あの福島縣の會津から参つたのですが。』
 『おや、其うで御座いますか。では、彼の楯岡さんからで御座いませう。』
 さあ、何うぞ御上り遊ばしませ。誠にむさくろしい所では御座います。』
 立ちながら談すべき事件では無いから、俊助は遠慮なしに座敷へ上つたが、
 部屋の内は表がかりと違つて、キッチンと取片付けられ、柱に一挺の三味線
 さへ掛かつて居るのが、俊助には何故とも知らず嫌な感じを催さしめた。
 座敷と言つた所で、上り口と奥との外は臺所があるばかり。一眼に見渡さ
 れる家中に鶴子らしい者も居ねば、何うやら主人のお捨ひとりらしい。其
 のうち、蓑盆を出し、茶を出し、立働ながら御世辭を振替くのが、官吏
 の未亡人としては餘りに摺れ枯らし過ぎたやうだ、と俊助は心の内に思つ
 た。すると、お捨は再び座に着いて、
 『何うもねえ、楯岡さんへも御無沙汰ばかり致しまして、其れに直々に

御手紙を差上げてはバツが悪いといふ事ですから。」と言ひかけて「あな
 たは何事も御存知で入らしやいませうね、手前と楯岡さんとは何ういふ
 續合だといふ事を。」

『無論知つて居ます。私は楯岡四郎藏から頼まれて此方へ上がったので
 すから。』

『まあ、左様で御座いますか。能くねえ。さあ、何うぞ。お茶でも召上
 つて下さいませ。生憎御茶受も御座いませんで。そうして、楯岡の旦那
 は相變はらず御達者で入らつしやいませうね。』

『否。主人の四郎藏は病死を致したのです。』

『おや、まあ飛んでもない事で。其れは一體何時頃なんで御座います。』

(二八)

楯岡四郎藏が病死の始末を、俊助は手短かに説明したが、お捨は頻りに溜

息を吐きながら聞いて居つた。

「まあ、左様な事は些しも存じませんで。皆様がさぞ御愁傷遊ばしたで御座いませう。手前共も楯岡さんに歿くなられますと、何んなに力を落すか知れません。」

「それは、娘御が御聞きになつたら御力落しでせう。」

「はあ、其れにね、彼の方が御達者で入らしやればこそ、折ふしの仕送も戴けるといふもので御座いですが、御當人が亡くなつて仕舞へば、他の御方は娘の事も御存じでないやうで御座いますが、然し、能くまあ、遠方の所を御使ひに入らしつて下さいました。」

「亡くなつた人から呉れくも頼まりましたので。」

「左様で御座いますか、そして其の御用向と申しますと。大かた只今申した通り其處等の事で御座いませうが、旦那は御かくれになつても、手

前まで能く御氣を付けて下さいましたわね。そうして、何か御遺言でも御座いまして。」

「其うです。御當家の事について、私まで内所で遺言がありました。然し其の事は亡なられた人がまだ達者な時分に此方へ言つて寄された筈です。」

「如何な事で御座いませう。」お捨は眉を擧めた。

「其うですな。此方の御娘御は確か鶴子さんとか申した筈ですな。」

「左様で御座います。」

「左様。其の鶴子さんに良人を迎へて、此方の跡目を立てるといふような事を、楯岡さんからは申して來なかつたですか。」

「はあ、其う仰やると思出します。何でも尾形とかいつて相當の人があ

確か御座いました。」

「其うでせう。實は私が其の尾形です。」

「おや、左様で御座いますか。」お捨は何だか氣のない返事であつた。

「私は、先生に一方ならぬ御恩を受けて。言はゞ先生の御蔭で一人前の人間になれたのですが、先生の死なれる時分でした。私を呼寄せて、是れ〜で自分には鶴子といふ子供が長崎に居るから、お前が長崎へ行つて、娘と二人で其の家を立て、くれと斯様に申されましたので。」

俊助が物語る間、お捨は其顔と其身のまはりとをジロ〜見廻して居た。

「楯岡さんからの御用といふのは其れだけで御座いますか。何か他に御ことづけの事は御座いせんので。」

「別段他には何もありませんが、そうして御娘御は何うなされました。」

「お鶴で御座いますか。彼れは其の生憎他へ出かけまして、今日は家に

居ませんが。成程楯岡さんの思召は有難う御座いますけれど、あなたと一所にして家を立てると申した所で、一文なしでは詰まりせんから、矢張先立つものはお金で御座いますね。」

「其れは勿論です。先生も其の事を察せられたのでせう。私には過分な遺産を分配して下さいました。大かた其れで御當家の名跡を起せといふ思召だらうと思ひます。」

「おや、まわ、左様で御座いますか。流石は楯岡さんは苦勞人だけありますね。そうして其れは餘程の金高で御座りませうね。」お捨は持前の反齒を剝出してホクホク笑つた。

(二九)

わざ〜長崎へ来たからは、何を扱置いても恩人の娘たる鶴子に面會するのが當然だ、と俊助は思つたのであるが、養母のお捨の口振りでは、今日

のうちにはトテも歸つて来まいとの事で、肝腎の談も不得要領に、一先づ縣廳前の鶴津館といふ旅宿まで引揚げた。而して今日の訪問の成績を考へて見ると、俊助には腑に落ちぬ事と快からぬ事とが澤山ある。其は第一に、未亡人お捨の人品が賤い事、故四郎藏が自分を鶴子の婿として秋田の家を起さしめんとする苦衷に對しては頗る冷淡である代りに、頻りと金銭問題に立入て、何か楯岡家より遺産の分配でも望んで居らしい事、自分か些し許の遺産を得たと聞いて急に態度の變じた事、此等の事實を思合すと、お捨といふ婦人は餘り感心した女でないのだ。而して故四郎藏の遺命によつて其れを養母と呼ねば成ぬ自分の未來は頗る暗黒なるものなのだ。然しながら、一旦恩人たる四郎藏に盟つた詞は其等の爲めに破る事が出来ぬ。自分の身は何處までも犠牲に供して、九尺二間の秋田家の相續人にも甘んじて居れば、人品の賤さお捨風情を養母に戴いて、飽くまでも故人の

遺命を全うせねば成らぬ。俊助は健氣にも斯う決心した。何は兎もあれ、故人の思ひの種であつた鶴子に會ふのが第一の急務であるから、其の翌る日も再び八幡町の裏屋を音づれたが、お捨ばかりは昨日と同く家に居たに拘はらず、娘の鶴子は今日も不在であつた。お捨の言ふ所によると、實は娘は稻佐の工場へ工女として通勤して居るので、何時も朝は早く、夜も歸りが遅いのであるが、昨夕も歸つて来てから、尾形の事を語つて聞かすと、實父の死を悲むと共に、わざ／＼出向いてくれた尾形の親切を悦んだのみならず、實父の遺命通り、此の上は夫婦となつて二人で自分に孝養を盡くしたいと立派に言つたとの事である。お捨は尙も斯う言つた。

「ねえ、尾形さん。此の通り娘も其の氣で居るんだし、私も亦楯岡さんの御鑑識で、御前さんのやうな立派な御婿様を貰へば、斯んな嬉しい事は

ありませんが、然し、御前さんともあらう人が、此のむさくろしい裏長屋へ婿にも来られまいから、何は扱置き、小ざツぱりした處へ引越したいと言つて、私の懐中では其れも思ふに任せませぬから、何うぞ其方で其の計らひをなすつて、私だちを迎へて下さいまし。其れに娘だつて、着のみ着のまゝで祝言も出来ませぬから、其の支度の處も、楯岡さんからの分前で何うにか其方で爲すつて戴きたいと思ひます。』

此處まで聞けば、相手の腹は最早見え透いて居る。即ちお捨は自分を婿とする事よりも、彼の楯岡家から自分の貰つた遺産が第一の目的らしい。然し、お捨が品性の其れく、る下劣な事は初対面から見貫いて居るもの、肝腎の鶴子の顔を見せぬが何よりの疑問である。

鶴子は果して今も此の家に居るのであらうか。而して鶴子の意思が果してお捨から聞いた通りであらうか。鶴子に面會し。且つ其の事を確めるのが

緊要であると知つたので、然ほど工場が忙いならば、今から自分が行つて面會しようと言出したが、お捨の返事は愈々曖昧であつた。

其の工場は服務中に一切面會を謝絶する規則であるから、尋ねて行つても無駄であるとはお捨の答へであつた。そうして、其れは何といふ工場の名であるかと尋ねると、兎に角、明日は非番で家に居る筈であるから、さすれば俊助の宿まで自分が連れて行くとの事であつた。

(三〇)

お捨のいふ事は當てにならぬと思ひながら、其の翌る日一日を鶴津館で待つて居ると、夜になるまで果してお捨も鶴子も姿を見せなかつた。

俊助は忌まゝしいのを我慢して、次ぎの日、八幡町の裏屋を音づれて、昨日の事を詰ると、お捨は様子をして頻りに過まりながら、當前なれば、非番の筈なのが、工場の仕事が取込んで居るために、非番の者まで服務せ

ねば成らぬのみか、矢張仕事の都合上、昨日からは實は工場の寄宿舎へ泊り詰となつたので、一週間ほどせねば家へは歸つて來られないとの事である。

然しながら、尾形の養子一件は既に鶴子自身も承諾したので、自分も成るべく急いで事を極めたいから、當人が工場に泊まつて居る間に、支度の方は一日も早く其方で取掛つて貰ひたいとの事で、俊助は相變らず要領を得ず此處を立出でた。

『して見ると、當人は家に居ないんだな。』俊助は途中で斯う考へた。『本人は疾うから他處へ行つて居るのを、僕には好い加減な事を言つて、金を引出さうといふ氣なんだ。む、屹度其れに違ひない。』

俊助は斯う推測したもの、其れは推測だけである。何か手蔓を求めて、秋田の家庭と及び鶴子についての真相が探ればせぬか、と種々に思案する

うち、フト胸に浮んだは、此の縣の事務官は自分と大學で同窓の友たりし梶村秀一といふ法學士であつた事である。

此の梶村から警察へ手を廻して貰へば、一切は譯なく知れると心付いたので、宿屋へ歸る其の足で事務官の官宅を訪問すると、丁度梶村は在宅であつた。

一別の挨拶から、用事があつて此の長崎へ來た事、其れから學生時代の昔談が出て、話題は何時果てるとも思はれぬので、俊助は其れを程よく途切つて、何故とは打明けずに、自分の用向を言出すと、梶村は快く引受けて、孰れ判り次第宿へ遊びかた々報告に來るとの事で、俊助は暇を告げた。其の晩、十時過になつて、梶村事務官は果して俊助の宿へ遣つて來た。

『君の問題は警察の方で直に解決したんだが、然し、何ういふ必要があつて、君は其ういふ婦人の舉動を探るんぢやね。』

「失禮だけれど、其の理由は君にも言ふ事を憚るんだ。」
 「其うかね。吾が輩も其う君の隠して居る事を追窮するには及ばんが、實は其の君のいふた當人が餘り名譽ある行動を取つて居らんで、もし、君が聞いて絶望するやうな事があつては行かんと思ふから。」
 「いや、其んな事は決してあれやせん。僕は只事實として聞きたいのぢやが、そうして其の名譽ある行動でないといふは母親の方だらうか、其れとも娘の方だらうか。」

「兩方ともぢや。何でもお捨といふお袋の方は判任官の未亡人ぢやさうぢやが、元が賤い身分で、今では非常に墮落をしとるさうぢや。何とかいふ長崎の遊人とくつついて、其奴の爲めに素つ裸にされたといふ事が此の間の新聞にも出て居つたぢや。つまり母親が其ういふ始末ぢやから、娘までに累を及ばさしめたのぢやらうね。」

「そうして娘の方は。」

「今では大連で地獄を稼いで居るさうで。其れはお袋と其の遊人とがグルになつて賣飛ばしてしまふたとの事ぢや。」
 俊助はぶるぶると身を顛はした。

(三二)

梶村事務官の報告は疑ふべくもない。成程お捨は確かに其んな下劣な婦人らしい。俊助は初対面から自分の觀察が誤まらなかつたを心の中に誇つたが、斯の通り事實の真相が知れたからは、お捨に打付かつて其の口から何も彼も在りの儘を白状するのが第一の急務である。而して其の上で施すべき策を講ずるより他に仕方はない。俊助は斯う決心したので、梶村が尋ねて來た其の翌くる朝早く、再び八幡町の裏長屋へ押掛けると、其の日は今までのやうに、お捨ひとりでは無うて、色の生白い、三十ぐらゐな意氣な男

が火鉢の向うに坐つて居た。是れが梶村から聞いたお捨の情夫だといふ遊人でもあらうかと俊助は心の中に領さながら座敷へ上ると、何時の間にか其の男は出て行つてしまつた。流石に俊助に極りがわるくなつたのか。其れともお捨が合圖でもしたのか。兎に角跡は元の通り俊助とお捨との二人になつて、談判は始められた。先づ、楯岡四郎藏の忘れ形見なる鶴子が始終家に居ないのが不審である事、急に工場へ寄宿することとなつたといふ言譯は聞いたもの、其れが甚だ迂散である事、而して所詮お捨自身のいふ所のみを信ずる事の不安心である爲め云々の手管によつて警察について事實の内偵を致した事、其の報告は斯様々々であつて、而も自分の目撃した所と思合はしてお捨の言分よりも其報告が實らしいと思はるゝ事、俊助は此等の次第を打ちまけて談判すると、其處は女だけ、警察の内偵と聞いて一も二もなく恐入つてしまつた。

お捨の白状する所では、俊助が其の筋から聞取つた事は大かた事實であるのである。成程、自分は生活に窮したあまり、濟まぬ事とは思ひながら、貴娘のお鶴を大連くんだりまで醜業婦として遣つたのであるが、然しながら、今では大連から更に内地へ歸つて、廣島の大手町で稻川といふ茶屋に酌婦をして居るので、此たび俊助が楯岡の遺命を齎らして尋ねて來たに付、ハツと當惑した者、流石に在りのまゝに云々であるとは言へないから、已むを得ず、本人のお鶴は工場に出て居ると言ひくろめると共に、俊助から幾らか金を受取つて内々廣島から呼迎へようと云のがお捨の魂膽だつたのである。始終を聞いた俊助は深き溜息を吐いた。

「む、能く打明けて下すつた。では、娘御が今ごろ廣島に居られる事は嘘ぢやないでせうな。だが、言うても歸らぬ事ではあるが、實にあなたは飛んだ事をして下すつた。僕の恩人たる楯岡さんは、可愛い自分の娘が

其ういふ浅ましい身分になつて居ようとは夢にも知らずに、矢張りあなたと一所に堅氣で暮らして居られると思へばこそ、死ぬ際にわざ／＼此の俊助を枕元へ呼寄せて、お前が婿となつて秋田の家も興せば面倒を見てくれと頼まれたのです。しかし、楯岡さんは寧ろ斯ういふ事を知らんで冥目せられたのが幸福であつたかも知れぬ。生きて居られる内に斯ういふ事を聞かれたら、何んなに落膽せられるか。僕は頼まれた楯岡さんへ氣の毒に思ふと共に、僕自身もぢや、折角遺言を承はつて、宜い、此の俊助が何も彼も呑みまましたと、長崎へ来て見れば何うだ。まさか僕たる者が幾ら恩人の遺言だつて、賤い勤めをした娘御と結婚する事は到底出来ん。いや、其れは既に楯岡さんの遺言にも、お前の妻として故障のある女ならば是非に及ばんといふ一言はあつたけれど、して見ると、僕は殺なされた恩人の志を無にせんければ成らぬのだ。あゝ、實に情ない。實に遺憾

だ。其れは誰がした業でも無い、皆あなたがしたのです。」

「其う仰やられると申譯の次第も御座いませませんが、では、是れから、あなたは何う爲さる積りでせう。」

「無論です。僕は娘御と結婚する事は出来んが、娘御を墮落の淵から救上げんきや成らん。」

(三三二)

既に婦人として其の操を汚せる鶴子と結婚する事は、到底男一匹の體面として敢てしがたきのみならず、恩人楯岡四郎藏が最後の意志も蓋し亦こゝに在つたと知れる尾形俊助は、假令鶴子とは夫妻の關係を結ばずとも、今の墮落の淵から救出す事が、故人に囑托せられた自分の使命であると覺悟したのであつた。

四郎藏の死後、自分に頼られた遺産は少なからぬ高であつた。然しながら

ら、其れは陽はに言へぬ自分の落胤たる鶴子への故人の志しであらう、と思量ればこそ、自分では殆ど手を付けずに、其のまゝ、楯岡家へ現金の保管を頼んで置いたのである。當前ならば鶴子の養母たるお捨に其れを引渡すべきであるが、今の體たらくでは、よしんばお捨に其れを渡した所で、當人の鶴子の爲めに果して其の金が役立つであらうとは信じられぬ。いつそ、此の上は自身が鶴子に面會した上、亡くなられた四郎藏の意志も談して聞かしたし、そうして自分が引受けた遺言の實行の出来るかぎり實行したい。是れが俊助が今更ながらの決心だつたのである。其うと心を決した俊助は、秋田の未亡人お捨には暇乞もそこ〜に長崎を立つて、鶴子の居るといふ廣島へ向けて出發した。途々も恩人四郎藏が臨終の際に自分へ頼んだ其の當時のさまを思出して、俊助は只涙にくれるのであつた。自分と鶴子と結婚の出来ぬ事、秋田一家

が今の體たらく、其れを草葉の蔭から見て、故人が如何に味氣なく思つて居るだらう。

彼れは故人の意を思遣つて愁然たると同時に、何とはなしに心の底に希望の悦びを覺えた。現に自分が鶴子と結婚する事の出来ぬ以上は、今日まで御互に心を許した加賀見静子と再び元の契約をつゞける事が出来るではないか。即ち最初の思はく通り、静子を妻と呼び、又静子に良人と呼ばれる事が出来る今の運命ではあるまいか。

俊助は其う思ふと共に莞爾としたが、其れはほんの一刹那だけであつた。否々、假令鶴子と結婚をせぬとても、其の爲めに静子との元の契約は取返されぬ。正當の道理があるとは言ひながら、恩人四郎藏の遺命を實行する事の出来ぬは、自分に取つて忍び難き苦痛であるべきに、却て其れを僥倖として、他の婦人と結婚する事は、故人に對して濟まない義理である。否、

俊助自身の良心に對して爲し得ざる事なのである。鶴子と結婚をしようとせぬとに拘はらず、無論静子と結婚する事は到底出来ないのだ、其れは一旦四郎藏の枕元で誓つた以上、知切つた道理であるのに、今更未練らしい事を考へたは自分ながら心耻かしい。

俊助が斯んな事を幾たびとなく繰返すうち、汽車は門司へ着いて、其處から小蒸汽で馬關へ渡つたは、既に夕ぐれ過ぎた頃であつた。

此處から上りの發車するまでには尙だ些しばかり時間があるので、停車場の待合室に腰かけて居ると、丁度下り列車が着いたので、ブラットホームから潮の湧くやうな人込に、燈に映つて一さわ眼立つ束髪美人は確かに加賀見静子らしい。俊助は夢かとはかり延上がつて見渡すと、先方でも氣が付いたのか、莞爾と笑ひながら會釋をして此方へ小走りに駆寄つた。

(三三三)

此の馬關に於て加賀見静子を見ようとは、俊助の爲め餘りに意外だつたので、彼れは夢ではないかと疑つたのであるが、然しながら其れは事實だつたのである。俊助が静子と見た姿は矢張本人の静子だつたのである。一たび尾形から絶縁の手紙を受取つた静子は、失望の餘り一日も早く父母と共に遠く朝鮮へ赴かん事を請うて止まなかつたのであるが、静子が其の願ひの叶ふべき機會は思掛なくも速かに來たのである。即ち父の屈山老人は母子二人が朝夕沈みがちに暮して居る角筈の屋敷へフラリと歸つて、朝鮮移住の計畫は既に熟して、馬山浦と云處に宅地も買へば家屋も既に新築に取掛つたに付、今から東京を引拂つて一家其處へ向て出發し様との事であつた。流石に斯様に事が極まつて見れば、住馴れた日本の土地が残り惜くもあれば、尾形と此のまゝに東と西とへ立別れるのが悲くもあるが、それは疾くの昔に諦めた事と無理に諦めを付けて、家財の取片付も勿々に濟まし、さ

て今度往つてしまへば何時會ふといふ見込みもない、知己や友達へ暇を告げたいが、其れでは却て未練心が出るからと、故と何處へも挨拶なしに、親子三人のほか、久しく召仕つた下女のお鍋、合せて主従四人づれ、新橋から馬關まで汽車で通して、其處から船に乗込む筈で、今しも停車場へ降りて来た所を、偶然にも長崎から歸つて来た俊助の眼にも留まれば、最つ先にブラットホームへ下りた静子にも其れと認められたのであつた。而して戀しき人の影を一眼見るから夢心地となつた静子は、跡から續く父母をも顧みず、小走りに群集を押分けて改札口の外へ飛出すと共に、待合室に居る俊助の傍へ轉込んだのであるが、嬉しいと悲いとの胸が一杯で、容易に口が利けない。

『あなたは矢張静子さんでしたな。』

俊助から詞を掛けられて、漸く吾に歸れる静子は涙と共に勢一杯に其聲を擲出した。

『尾形さん。御懐かしう御座います。』

静子の調子が餘りに甲走つたので、俊助と同じく其處に待合はして居る客たちが驚いて一齊に此方へ顔を向けた。

『静子さん。此處では談が出来ないから彼方へ行きませう。』

静子は打領いて俊助の跡についたが、待合室から小暗い處を些しばかりたどつて行くと、鳥渡した廣場になつて、向うの隅にコンモリと森が茂つて居る。此方に高く立つたは荷物を積込む倉庫か何ぞらしい。其の屋根の霜が眞白くなつた上から、月が輝り渡つて静子の眞ッ青な顔を眞ともに照らしたが、先つきから餘程泣いたと見えて、眼臉が腫れて居ると共に、頬の落ち窪んで、肩付のやつれたのが、一層際立って見える。

俊助は其の憐れな戀人の姿を見て悄然としてゐんだが、静子は尙ほシク泣いて居る。

「静子さん。僕の手紙は見て下さつたでせうね。」
 「はい、拜見いたしました。」

「そうして、あなたも、あなたのお母さんも御立腹なすつたでせう。實に僕はあなた方に對して最早顔も合はされぬ不徳義な人間になつてしまひました。然し其れには手紙で申上げた通り、複雑な事情があるのですから、何うか免して下さい。静子さん。全くですぞ。此の俊助が生れてから今度ほど苦痛な思ひをした事はありません。」
 「私……私だつて。」静子は尙ほ泣いて止まないのである。

(三四)

俊助は眼を瞬いた。

「其うでせう。あなたの御心の中は察して居ます。あなたの御心を察するだけ、僕の苦痛は一倍なのですが、其の苦痛を犠牲とせねば成らぬまで

には、實に言ふに言はれぬ苦しい譯があるのですから。静子さん。何事も是れまでの事は夢だと諦めて下さい。僕も其う諦めてしまつたですから。えッ、静子さん。其んなに黙つて居ないで、何とか言ふて下さい。あなたは未だ怒つて居るのですか。いや怒られても仕方がありません。其れは怒られるのが當前なんだから。」

「尾形さん。其うぢやありません。私はあなたを信じて居ます。あなたが何の理由もなく破約遊ばすやうな輕薄な御方でない事は能く存じて居ります。」

「では、あなたは僕の苦心を諒として下さるのですな。」

「はい、其れは充分御察し申して居ります。そうして私ももう決心して居ります。」

静子が餘りにキツパリ答へたので、俊助は身を顫はした。

『そうして決心とは。何う決心をなすつたのです。』
 『私は、最早日本の土地に居ないと諦めました。なまじ日本に居ては昔の事を思出して悲くなりすから、今度父や母が朝鮮へ参るを幸ひに、私も……』
 『静子は其處まで言ひかけて又一しきりサメムと泣いた。』

屈山老人が朝鮮移住の計畫は尾形も既に元子夫人から聞いて居るので今更に驚かなかつた。而して馬關の此の土地で静子と奇遇したのが其の爲であつたと思へば、一切の不思議は解けたのであるが、然しながら、まだ年若き静子が其の青春の希望と歡樂とを日本の故郷に遺して遠き外國へ移住しようと思つた決心した意の中を思遺つては、俊助も泣かすには居られなかつた。
 『其うですか。いや、あなたがたの其ういふ決心を伺つて僕も大に安心しました。然し、あなたに其ういふ決心を御させ申した僕の罪を免していたゞくと同時に、其れまでの成行について詳しい事情を一通りあなたに

打明けるのが正當なんだけれど、手紙で申上げた通り、其れが何うしても出来んですから。』

『そうして、尾形さん。あなたは旅行を遊ばして、其の楯岡さんの御遺言通り、もう他の方と結婚をなすつたので御座いますか。』

『静子さん。其の結婚は……。』

俊助が言ひかけた途端に、停車場で鈴の鳴つたは上り列車の出發を知らせるのであつた。

『何う遊ばしたので御座います。』

『其の結婚ですか。其れは最早せんでも宜い事になりました。』

『まわ。』静子の顔には希望の色が再び燃えた。

『然し、あなたとの契約は矢張破らなければ成らん。静子さん。僕は斯う決心しました。あなたと結婚せん代りには決して誰とも結婚はせん。』

僕は一生涯無妻で暮らすのです。」

「だつても……。」

静子は一口言つたきり詞を途切らしたが、同時に人の足音が聴こえたので、俊助が振顧ると、其れは元子夫人がウロウロ此處へ近付くのであつた。而して停車場では最後の鈴が再び高く響いた。

「静子さん。最早時間が來ました。そして、お母さんに見付かつては極まりが悪いから、僕は此れで御別れにします。」

「でも、尾形さん。」

静子は男の袂に縋らうとしたが、

「おや、お前は何うしたんですよ。先つきから散々人に探がさして。」
母親に聲をかけられたので、アツと思ふ其の間に、俊助は一散に彼方へ駈出した。

月を浴びた其の後姿と、涙ぐんで悲げに見送つた静子とを元子夫人は二つながら見て打領いた。

(三五)

上り列車の廣島へ着いたは、既に曉がただつたので、俊助は停車場前の旅籠屋に泊込んだが、床に入つても静子の事を思ひつゞけてマンジリともしなかつた。

七時に起きて朝の食事を済まし、帳場の番頭を呼上げて、お捨に聞いた通り、大手町に稻川といふ料理屋の有るか無いかを聞くと、番頭は尾形の顔を見てニヤ／＼笑つて居る。

「へい、其れは確かに御座いますが、旦那がたの入らつしやる處ぢや御座いません。」

番頭は俊助が遊びに行くとも思つたらしい。

「僕は其の家へ用事があるのだ。お前に聞いても知れんぢやらうか、其處に秋田鶴といふ婦人が奉公して居る筈ぢや。」

番頭は又笑つた。

「如何で御座いますか、何でも二三人は居る筈ですから。皆兵隊さんが御得意で。」

「うむ、其うか。」

番頭の詞を聞いて俊助は愈々不快の感じを催した。

「では、大急ぎで車を頼む。」

「只今の大手町まで、御座いますな。」

「其うぢや。」

餘計な事と言はぬばかりに俊助は相手を睨付けたが、番頭は例の通りニヤニヤ笑ひながら引下つた。

「旦那がたの入らつしやる處ではない。」何でも二三人は居る。「兵隊さんが御得意。」これが恩人の娘の今の境遇であるかと思へば、俊助は自分が侮辱でもされたやうに感じて、さては四郎藏の臨終から長崎の事を想出すと共に、昨宵このかた静子の事で重くなつた頭が更に二つも三つも荷物のはつたような氣持がした。

其のうち車が來たといふ知らせで、座敷を下りて行くと、玄關には例の番頭が送り出して例のニヤ々笑ひをして居る。俊助は其の笑ひ顔が癢に障るので、成るべく面を反けて車に乗ると、車夫は威勢よく駆出した。

始めて通る廣島の町並も俊助の眼には入らぬ。心の中に、悲いと、嫌など、味氣ないと、いろくを留度なく繰返して居ると、何時しか梶棒が下りて、

「旦那。稻川つていふのは此の家です。」

車夫に注意されて始めて向ふを見ると、成程番頭に注意せられた通り、間

口の三間はかりな二階造の怪い家に、『稻川』とした掛行燈が不景氣につるされて居る。宵に遅くまで起きて居るせい、雨戸も半分しか明けてないので、内はボンヤリ薄暗い中に、食殻の皿や小鉢に刺身のツマや肴の骨を入れたまゝ、其處らちうに散らばつて、俊助は其處へ入るから不快な感じに襲はれた。

『御免なさい。少々頼みます。』

幾ら呼んでも返事のないは、家内中がまだ寝て居るらしい。車夫が見かねて

『おい、お客様だよ。』

大聲で怒鳴ると、

『へー。』

尻聲の長い輕薄な返事をして、矢張薄暗い奥から出て来たのは、今起きたと言はぬばかり、細帯を占めたさりのだらしない女であつた。

『入らつしやいまし。まだ座敷は掃除が出来て居りませんので。』
是れも遊びに来た客と思つたらしい。俊助は愈々不快の念を力めて打消しながら、

『僕は少し尋ねたい事があつて来たのぢやがね、此のうちに秋田鶴子さん……いや、お鶴さんといふ婦人が居やあせんぢやらうか。』

女は眼を圓くして、俊助を見詰めた。

『秋田といふか苗字は知りませんが、お鶴さんといふのは居ります。』

『長崎から来て居る筈ぢや。』

『確か其うで御座いましたよ。』

『ぢやあ、鳥渡會ひたいものぢやが。』

『お鶴さん。お客様だよ。』

又尻聲の長い輕薄な呼聲をすると、何處か暗い中で『はい』と返事をしたら

しよ。

(三六)

無量の感慨に撃たれて、尾形俊助が薄暗い上り端に立つて居ると、聽て奥から搖ぎ出でたのは、此れなん會津の土豪楯岡四郎藏が忘形見、今は此の暖味茶屋で酌婦をして居る秋田鶴子であつた。

先つきから實驗した店先の様子から、又取次に出た婦人の態度から歸納して、故人の娘が、如何にだらしなき、又如何に淺ましき姿で現はれるだらうかと、俊助は寧ろ恐怖を以て其れを迎へたのであるが、意外にも眼のあたりに見た鶴子は其うでなかつた。眼元の涼い、口元の凜と締まつて、而も顔の何處やらに恩人四郎藏の寛やかな面影が宿つて居る。斯んな見すばらしい暖味茶屋には勿體ない程の美人で、而も何處やら落付いて品格がある。身なりも小ざツぱりした絹物に縮緬の羽織を引かけて、途中で會へば、

某がしの若奥さまともいふべき立派な押出である。

「あなたが秋田鶴子さんですか。」

俊助は熟と打守りながら尋ねた。

「其う、私がお鶴ですよ。お前さんは。」

「僕は會津から來た尾形といふ者です。僕の事は長崎の母さんから既に手紙で言うて寄された筈ですが。」

「其う。其れなら手紙で知つて居ますわ。」

俊助の足元までをデロリと見下しながら、

「あの、喜イちゃんや。濟まないけれど、二階の二番を大急ぎで片付けて御呉れ。」

頓狂な返事をして二階へ駈登がつたのは先つきの女らしい。

「あの、今に二階を片付けさせますから、あなた、暫らく待つて、頂戴。」

初対面から甘つたれた物いひは何うせ稼業の習慣とは察したが、俊助には其れが不快に感じられるので、口を緘んださき其處に立つて居る。

『あなた。ぢやあ長崎から入らしつたんだわね。』

『其うです。』

一口言つたさき無言で居ると、二階で例の聲がして、

『お鶴さん。もう宜う御座んすよ。』

『其う、何うも御苦勞さまね……。さあ、あなた此方へ御案内しませう。』

俊助は矢張無言のまゝで、鶴子の跡へついて階子段を登ると、取付から奥へ引込んだ六疊の座敷へ通された。

床には怪いながら山水の幅が掛けられ、其の脇に我流の梅が挿込んであるなど、此の家では晴の座敷と思はれるが、疊には焼焦がしの跡やら、まだ生々しい酒のしみやら、而して室の隅には麥酒のコロップが、さながら昨夜

こゝで起つた亂痴氣騒ぎを語るもの、如く轉がつて居る。

薄ぎたない坐蒲團に据はらせられて、薄ぎたない箱火鉢に手をかざすと、鶴子は改めて會釋をした。

『ぢやあ、あなたが尾形さんですわね。』

『其うです。長崎からの手紙で御存じとあれば、くどい事は言ひませんが、あなたの實の父さまには、一方ならぬ御世話に預つたものです。そうして楯岡さんにも飛んだ不幸がありました。』

『其うですッてね。其れも手紙で知りましたわ。』

俊助は鶴子の答へが餘りに冷淡なのを意外に感じた。

『そうして、尾形さん。貴様は楯岡の遺言で私を此處へ迎に來たのでせう。迎へるといふ譯ではないですが、何うかあなたを今の境遇から救出さうと思ふのです。』

「其れは、矢張迎ひに來たのも同じぢやありませんか。だつて、私こゝを動く事は嫌よ。」
 俊助には愈々意外の詞である。

「こゝといふのは廣島の土地ですか。或は此の家の事ですか。」

「まわ、あなたは理窟つばい事ねえ。私兩方ともよ。」鶴子は斯う言ひながら五月蠅さうに鬢のはつれを撫上げて、涼い眼で俊助の方を見た様子が、恩人四郎藏の物をいふ時の癖に能く似て居ると俊助は心の中に思つた。

(三七)

鶴子の面ざしから格好が恩人四郎藏に似て居るを、眼のあたりに見るにつけ、俊助は故人が臨終の其の遺言と、又遺言をした其の時の心根をも思遣つて涙ぐんだ。

「鶴子さん。あなたは何うして其ういふ事を言ふのです。あなたが今居

る此の家は一體何んな處で、あなたは何ういふ身分であるか。其れを言つて御覽なさい。」

「まわ、鶴子さんですつて。私そんな御嬢さま扱ひにされるのは大嫌ひよ。鶴子さんといふ柄ぢやありませんから、何うかお鶴さんと言つて頂戴。そうして何ですつて。此の家が何だか言つて見ろつて、其れは言ひますわ。此處は大手町の稻川といふ御茶屋なんですよ。御茶屋も御茶屋、曖昧な茶屋なのよ。」

「そうして、あなたは何です。」

「私。私は知れ切つて居るぢやありませんか。此の家の酌婦ですわ。」

「其ですか。あなたの返事は立派でした。曖昧茶屋の酌女。それが名譽ある身分でせうか。苟くも福島縣選出の貴族院議員とまで成られた楯岡四郎藏先生の娘御ともあるべき方が居られるべき正當の境遇でせうか。」

鶴子さん。腹を立て、は行けません。僕は僕の思ふただけを打ちまけて言ふのですから。」

「おや、又鶴子さんですつて。嫌だわねえ。だけれど、私は腹なんか立ちやしないの。腹を立てる様なウブな女ぢやありませんからね。さあ、尾形さん。あなたの思つただけの事はザックバランに言つて下さい。私、控へ目に物を言つたり、心にもない追従を言はれるよりか、御腹にある事はすつかりさらけ出して貰つた方が、何んなに氣持が好いか知れないわ。」

「あなたが氣持を悪くしても言ふだけは言ひます。」

「あなたは男らしいわね。さあ、伺ひませう。」

丸で眼下にあしらつた鶴子の態度は、此奴中々の大變ものだ、と俊助は心の中に思つた。

「鶴子さん。いや、僕はあなたを鶴子さんと言ひます。曖昧茶屋の酌婦

としてあなたに應對するのではない。僕は物故せられた恩人楯岡先生の娘御として應對するのですから。」

「まあ、何とでも仰やい。そして何うなの。」

「あなたの父さまが息を引取られるまで、何んなにあなたの事を心配せられたか。いや、あなたばかりではない。あなたの冒して居られる秋田一家の事にまで、其れは楯岡先生の苦心といふものは非常なものでしたぞ。わざ／＼此の僕を東京から呼寄せて、奥さん始め皆の者には秘密だからといふて、僕ひとり枕元へ呼んで……。」

鶴子は上の空で聞いて居るのである。

「尾形さん。其の先きは知つて居ますよ。長崎から手紙で言つて寄したんだもの。其の返答は私と夫婦になつて秋田の家を襲いでくれといふのでせう。だから、長崎に居る母さんが、何うか其うさせたいから、歸つ

て貰ひたいつて。私には其れが嫌なんですわ。』
『何うして嫌ですか。其れが伺ひたい。』

『でも、知れてるぢやありませんか。あなたは學士とかいふ立派な御方
さ。此んな者を女房になさる筈はなし、又私だつて其れは出来ないわ。
尾形さん。惚けぢやないけれど、斯う見えても私だつて亭主にしよう、
是非なつてやらうと約束した人がありますからね。』
『いや、分りました。あなたの心は其れで僕に了解が出来た。深く言ひ
かはした人があるから、此の廣島も又此の家も放れる事が出来んといふ
のですな。』

俊助は眞面目で問返した。

(三八)

『まあ、其うさ。』鶴子は平氣である、『其れに、父さんだつて、餘り分からな

いわね。お互ひに氣心も知れぬ私とあなたを水點で夫婦に押付けような
んて。尾形さん。あなたに御世辭をいふんぢやないけれど、私だつて其
んな好い人のない前なら、あなたにだつて惚れてよ。』
俊助は苦り切つて、相手の顔を見詰めた。

『いえ、本當さ。學問が出来るか出来ないか、其んな事は色事に關係が
ないから何うでも可いんだが、鳥渡苦み走つた、正直さうな、頼もしい
……でもねえ、先口があつて見れば仕方がありませんわ。おほ、濟
まない事ねえ。遠方から入らしたあなたに惚けなんか聞かして。可い
わ、私受け賃にあなたに奢つてよ。御酒にしませうね。鳥渡、喜いちや
んや。御酒を早くね。』

『僕は其んな事をされて、却て迷惑です。』

『では、あなた御酒は行けないの。あなたが飲まなければ私だけ飲む事

よ。昨日の酒が未だ残つて居て、頭が重くて成らないんだもの。」
先程から餘程精神の興奮した物のいひやうは、宿酔の故かと俊助は始めて
悟ると共に、恩人の娘が斯かる自墮落の境遇に落ちた事を情なく思つた。

「鶴子さん。最早分りました。あなたに其ういふ人があつて、其れが果
して苦樂を共にすべき人物であるなら、結婚なさい。いや、僕は其の結
婚に就て出来るだけの斡旋を取ります。然しながら、其れと同時に、何
か今の境遇から足を洗つて下さい。僕は其の事をあなたに相談する爲め
に此處へ來たのですから。鶴子さん。僕は今一度いひます。何うか足を
洗つて下さい。あなたを此處から救出さないと、僕は死なされた先生に
面目がありませんから。」

「まあ、尾形さん。あなたは私を救出さうと言ひましたね。」

「其うです。あなたを此んな墮落の境遇から救出するのが、僕の先生から言

付けられた役目です。」

「だつて、私何も救はれる事はありませぬわ。私酌婦をしたつて其んなに
心に苦いやうな事はないんですもの。」

「心に苦くない。では、あなたは今の境遇に満足して居ると言ふのです
か。」尾形は屹と言つた。

「其うですわ。私は満足して居るわ。だつてさ、義理の母さんが貧乏して
居ながら、其れを見かねて斯な稼業になつたんでせう。可う御座んすか。
私是れは立派な事だと思つて居るの。何も斯んな稼業だつて、盗賊や拘
摸をするんぢやなしさ。男に酌をしてやつて、嬉しがらせるやうな事を
言つて、そして御金を貰うんだもの。其のうち今のやうな好い人が出來
て、向ふも惚れてくれれば私も惚れて居るんだから、斯う見えても私の
胸の中は何時でも春花が咲いて鶯が啼いて居るやうな氣持なの。其の人

は私が大連に居た時、守備隊で来て居て、其の時分から馴染になつたんだが、今では此の廣島の聯隊へ替つたから、私も其の跡を追つて此處へ住替をしたの。そうして明後年になれば満期になつて夫婦になれるから、其れまでは斯んな勤めをして居る筈なの。』

『ぢやあ、軍人ですな。』

『其う。陸軍の軍曹で、其れでも功四級なのよ。』

取留のないやうで、又何處やらに取留のあるやうな話に、俊助は小首を傾けた。

『では、其の人が除隊になるまで斯うして居るといふのですな。其れも分りました。然し、鶴子さん。僕は楯岡先生から莫大な遺産を戴いて、其れはあなたが是れから身を立てる費用に宛てるつもりです。』

『尾形さん。お金でせう。其の事も長崎から言つて來たわ。お金は結構

ねえ。あなたが下さるなら貰ひませう。そうして私惚れた人に入揚げるわ。』

『其んな事はかまはんです。』

『では、あなた。此處でパツバと御蔭きなさいな。そうして皆を揚げて陽氣に遊びませう。おほ、其れは嘘よく。其れよりも長崎の母さんに遣つて下さい。母さんは貧乏して居ますからね。私が戴くよりは何んなに悦ぶか知れないわ。』

『鶴子さん。楯岡先生があなたに對して慈愛を籠められた其の遺産は滅たに費やす事は出来ません。では、暫く僕が矢張保管して置いて、果してあなたが其の軍人と結婚して末の見込が付いた時、僕から改めて引渡す事にしませう。』

『何うなりと、其れはあなたの御勝手よ。喜いちやんや。其れより先つ

き言つた御酒は何うしたんだね。尾形さん。堅くるし事を言はないで、酒でも飲んで管を巻きませうよ。」

(三九)

午後の列車で廣島を立つた尾形俊助は、心の中に様々な想ひを浮べた。恩人の娘が醜業婦で居るさへ心痛しきに、其の醜業婦たるに甘んじて居るは、境遇人を作るといふ諺の通り、最早濟度し難き者となつたかと思へば、愈よ腸の斷る、様ながら、然りとて男を男ともせざる初對面の應接、流石に氣一郷を凌いだ楯岡四郎藏の血液が何處やらに傳はつて居るらしい。そうして、飾氣のない天真爛漫な詞から、金錢に對して極めて淡泊な様子。「矢張、鶴子さんは先生の子たるに恥ぢないで。」俊助が斯う思つた時、愉快らしく微笑した。而して、記憶は再び其の時に鶴子が言つた一言一句までを心の中に繰返すのである。

成程、鶴子が言へ所に一片の眞理はある。養ひ親が困まつたを見兼ねて斯んな勤めをした。其れは立派な事だと自分で思つて居る。婦人が醜業婦となる其の事が罪惡であるか無きかの問題を別として見れば、成程其れは子として親に事ふる美事に相違ないのだ。而して、意中の人が既に定まつて、其の人も自分を愛すれば自分も亦その人を愛して、未來に於ての結婚を樂んで居る。心は常に平和と満足とに充されて、敢て他人に救はれる必要はない。成程、其れも眞理である。

鶴子は斯くの如き平和と満足とによつて充たされて居るとして、さて自分は何うであらう。俊助は吾れ知らず人の上を吾が身に引比べた。

其れは退引ならぬ恩人の遺命によつてと言ひながら、現に互ひに相愛して既に結婚の契約さへ済ました加賀見静子とは、彼の通り飽きも飽かれもせぬ生別れをして、戀には望みなき一生涯を孤獨で送るのが自分の運命な

のである。之に反して、假令賤き稼業はしても、己が愛する人と結婚し得べき未來の希望を抱いて居る鶴子は、寧ろ自分より幸福な身ではあるまいか。いや確かに自分よりは幸福なのに違ひない。

「あゝ、駄目々々。僕は鶴子さんを救はうと思ふたが、鶴子さんよりは却て僕が救はるべき人間だつたのだ。」俊助は喟然として長大息をした。「人を救うのは自分が其の救ふべき人より幸福なる境遇に居てこそ其の人を救ふべきだが、僕と鶴子さんとの場合は其うでない。僕は鶴子さんよりも非常に不幸なる境遇に居るのを、今までは自分で意識しなかつたのだ。」樂天的なる鶴子の境遇と比べて吾が身を顧みると共に、俊助の胸には更に別様の懷疑が湧いて出る。

「何だ、馬鹿々々しい。自分こそ救はるべき境遇に居て、救うべき必要もない人を救はうなんて、其れは今度の鶴子さんの事ばかりではない。」

一體政治家で候の、天下の志士で候のと言つて、國家と國民との禍福を脊負つて立た氣で自分だけは居ても、其れが結局何の役に立つ。一度憐れむべき人と思つた鶴子さんが却て憐れでも何でもないやうに、これが國家の不利益だとか、又は國民の不幸だとか、吾れ〜が騒立つても、實際は却て其れが國家の利益になつたり、國民の幸福であるかも知れぬ。兎角テーブルの上の議論には疝氣筋が多いのだ。而して其のテーブルの上で疝氣筋の議論をして居るのが今の政論家なのだ。」

「だから、やめだ〜、政論家は最早死んだつてやめだ。其れは今度の鶴子さんの事が僕には最も適切なる教訓だつたのだ。」俊助は列車の中に獨語を言つた。

(四〇)

朝鮮馬山浦の入江を見晴らした山手へ、近ごろ新築された日本風の家屋と

日本風の門塀。此れなん幕府の遺臣加賀見屈山が其の不遇の老後を養ふべく選んだ住宅なのである。

親子三人は、日本から連れて来た女中のお鍋のほかに、朝鮮人の少女が一人、釜山から雇うた日本人の下男と、今ひとり通辯を兼ねた朝鮮人の下僕、併せて主従七人の小じんまりとした家庭である。

日本を放れるまでは、見も知らぬ外国へ移住して、如何に物淋き生活を送らなければ成らぬか、と元子夫人も令嬢静子も心細く思ふに拘はらず、此處も住めば都、居留地には日本から来た數多の人が雑居して、朝夕に悶悶める親切者さへあるので、角筈に住んだ昔よりは一層氣分の紛れるやうな事がないでもない。只折ふしに土着の朝鮮人の音ない來るのがオツクウに感せられたが、其れも馴るゝに連れては、中野あたりの百姓が角筈の屋敷へ出入するくらゐにしか思はれぬ。住居が變つて、そして國が違つても、

左程不自由や不都合を感せぬやうになつたと言ふものゝ、静子が心の底深く疊まれた只つた一つの愁は解くよしもなかつた。

それは言ふまでもなく法學士尾形俊助に對する彼れの愛情である。

日本の土地を放れたらば、其の味氣なき戀を忘るゝ術のあらうと思ひのほか、遠く此の朝鮮へ來つて見れば見るほど、彼の人の懐かしさは一倍であつた。

馬關で出會つたは眞の束の間。嬉いと、悲いとが一時になつて、何から言出さうかと思ふ間に、其の人はハヤ夢の如く去つてしまつて、泣くゝ母に扶けられて異國へ赴く船へ上つたのである。

其の夜の其の時に、二人の影を照らした月は今も空に懸かつて居るが、其の人の面影は絶えて見る事も、其の人の聲は絶えて聞く事も出来ぬ。只眼先に残つて居るは、尾形が悄然立ちながら自分の爲めに泣いた其の面ざし。

先に残つて居るは、尾形が悄然立ちながら自分の爲めに泣いた其の面ざし。

而して未だ耳元を得去らぬは尾形が別れる際に言つた其の一言。

『あなたと結婚せん代りには、誰とも結婚はせん。』

静子は其の時の事を想出しては口の中に繰返すのであつた。

詳しい仔細は何うか知れぬが、其時の尾形の詞が眞事であるとすれば、自分より他の人と結婚すべき筈の、其れは見合す事になつたらしい。さすれば、今更ながら元の約束を其まゝ、自分と結婚する事が出来ぬ理窟はなさそうな。

『然し、あなたとの契約も矢張破らなければ成らん。』

其れは何うした譯だらう。尾形さんに限つて、自分の前ばかり體のよいやうに、其の結婚をよしにしたなんて、其んな氣やすめなんか言ふ輕薄な人でない事は知つて居るが、其れとも、矢張あの時きりの氣やすめだつたのか知らん。いや、其んな事は決して無い筈だ。其の結婚を見合はせたから見合はせたと仰やつたのだ。

其れで、私とも結婚する事が出来ぬとは、何だか詞が矛盾するやうではあるが、其處には其れだけの譯があるとしても、定まつた妻のないからは、私との契約を元へ戻す望みがないではない。

静子は此處まで考へ及ぼして、吾れ知れず莞爾とするのである。

(四一)

然しながら、其の悦びも望みも次ぎの瞬間に於て忽ち消えるのである。

『でも、尾形さんだつて、果して私と結婚の出来るものなら、彼の時に彼んな味氣ない事は仰やるまい。餘程つらい譯があつて其れが出来なければこそ、一生涯無妻に暮らすんだつて。して見れば、矢張私にも希望といふものが無くなつてしまつたのだ。東京を立つ時、立派に諦めた通り、父さまや母さまの御介抱をして、此の朝鮮で骨を埋めるより外に私の運命はないのだ。』

静子は胸の中に沸きかへる失戀の悲みに涙を絞つたが、絶望の末には又消極的の勇氣が出るのである。否、出さうと試みるのである。

『いや、斯んな事を思ふは未練といふものだ。東京を引拂つて此の朝鮮へ立つ時の其の決心さへ持つて居れば、悲い譯もなければ、泣く事もない。尾形さんの事は成るべく忘れてしまつて、父さまや、母さまに、成るべく苦勞や心配を掛けないやうに。其れが人の子としての道なのだ。』忘れようとすれば尙ほ忘れぬ、其の煩悶は何時しか憐れなる静子の健康を害つたのである。蔷薇色なる其の顔には血の氣が絶えて、鉛のやうな蒼みを帯びたと共に、豊かなる其の肉付は愁といふ飽に削られて次第に瘠せ衰へた。別に何處に病があるといふでもなく、心は千鈞の錘を懸けられた如く重くなつて、夜さへ眠られぬがちとなつた。元子夫人は静子が何故に斯かる状態に陥つたかを知らぬではない。良人屈山には内證で意見もすれば

慰めもするのであるが、然しながら、静子の爲めに其れが何の藥となるべくもない。

一月過ぎ、二月過ぎ、朝鮮は流石に寒國と言ひながら、窓前の南枝漸く笑つて、春の眠りの次第に心地よくなる短夜にも、静子は殆んど曉がたまでマンチリともしないのである。眠りの足らぬが何よりも身體に毒だと元子夫人から注意されて、寢ようとするれば神經が愈々過敏となつて眼は益々さえるのである。

世間がシンと静まつて居るだけ、居留地の海岸通りを流して行く按摩の笛が枕元へ通つて、つい其處のやうに聴こえる。静子は其の笛の音を聞くと、此處は朝鮮でなうて、矢張自分は元の通り角筈に居るやうな心地になつて、暫く其の事を心の中に繰返すのである。そうして、角筈時代の記憶は更に一轉して、尾形俊助と始めて牛臥の海水浴で知己となつた始めから、華族會

館の園遊會で再び邂逅した事、終に互ひに結婚の約束をした時の其の嬉しさを想出すのである。

『あゝ、詰まらなさい。』

漸く吾れに歸つた静子は口の中で獨語を言つたが、途端に枕元の襖がスルスルと明くやうな音を感じたので、ハッと驚いた。

其れは大かた神経の故であらうと、力めて氣を静めるべく試みたのであるが、然しながら、次ぎの瞬間には、驚愕よりも寧ろ恐怖の念に撃たれた。何となれば、其の襖の間から、黒き塊りが踏込んだかと思ふ間に、枕元にスツクと立つたは大の男だつたのである。そして其の男は通辯兼帯に雇はれて居る張二といふ朝鮮人だつたのである。

『お前は失禮な。何故……。』

静子の心は此の場合に臨んでも顛倒しなかつたので、床から飛起さやうと

したが、其れはダメであつた。同時にムンヅと延ばした張二が腕は堅く自分の咽喉を攫んだので、息苦くなつて聲を立てる事が出来なくなつた。此のまゝ、縊殺されるのかと思ふと、何時の間にか息苦いのが止んだので、助けを叫ばうとしたが、矢張聲が立たないので、始めて猿轡を箝められた事を知つた。

(四二)

下男の張二は何故に斯かる暴行を働くのであらうか。静子は驚きと怖れとの中に尙ほ其れを考へるだけの餘裕はあつた。

張二は自分を辱めようとするのではあるまいか。斯う氣が付くと更に新なる恐怖を覺えて、静子は悚然としたが、然し其れは自分の誤解である事を直ちに知つた。

曲者は何時の間に用意したか、白毛布を擴げて静子の身體を巻かうとするのである。勿論、静子もあらん限の抵抗を試みたのであるが、張二の力に

比べては熊鷹の前の雀であつた。
 憐れなる静子は終に兩手ぐるみ木乃伊のやうに其の毛布の内に囚はれたのであるが、更に何やら帯のやうな物で腰のあたりを堅く縛つたと思ふ間に、此の部屋から外に通ずる雨戸が何時しか開けられた。そうして春の夜の朧なる月の光りは其處から射入つたので、静子は其の光りに透かし見ると、外には今ひとり朝鮮人らしい男の姿がイんで居た。

『私は何處かへ連れて行かれるのだ。』

静子が絶望的に其う思つた途端に、ふわりと己が身體が二人の手に擔上げられたと覺えたさき、其の跡は夢心地であつた。全く彼れは怖れと驚きのあまり氣を失つたのである。

『御令嬢。しつかりなさい。もし、静子さん。』

耳馴れた聲に呼起されて眼を見開くと、日本服を着けた日本人らしい男が

枕元に坐つて居る。そうしてあたりを見廻すと、疊も襖も日本の部屋なので、静子は氣絶して居る間に吾が身を再び日本へ運び歸されたのではあるまいかと疑つた。

何時の間にか解れた髪毛が臉の上へかゝるので、其れを拂はうとしたが、腕も身體も尙だ毛布に巻付けられたまゝである。

『こゝを解いて下さる。』

精一杯に言つた聲は、自分ながらも虫の鳴く音のやうに微かに且つ顫へて居る。

『漸く御氣が付いたですな。静子さん。私が誰だか、御分りになりますか。』

毛布に括つた帯を解きながら、其の男が言つた。

『私の名を知つて居るあなたは誰です。』

静子は確か曲者に誘拐かされた自分を、此の聞馴れた聲の人が救つてくれたのではないか、と思つたのである。

『まだ分らんですか。私は荒川です。』

『荒川さん……。』

『其うです。荒川實です。あなたの父さまに教を受けて居た事は御存じでせう。』

『其う、荒川さん。其うね。何うして先つき分からなかつたでせう。』

父の門下生であつた其の人と知つたので、静子は心強くも嬉しく感じたのである。

『其れは、あなたが餘りお驚きになつたからでせうよ。』

『そうして、私は何うしてあなたの處へ連れて來られたのでせう。』

『何うしてつて、私が朝鮮人にあなたを盗出させたのです。』

荒川實は斯う言ひ放つて冷かに笑つた。

(四三)

『では、私に亂暴を加へたは、あなただと仰やるのですか。』静子は又も高まれる動悸を制へながら屹と言つた。

『其うです。其れは此の荒川實の仕業なのです。しかし亂暴と言へば亂暴に相違ないですが、實際あなたを此處へ御連れ申さうとするには、暴力を用ふるより他に適當な手段がないのですからな。』

始めは味方と思つた荒川が當の敵であると知つて、静子は其の太々しき顔を呆れて打眺めた。

『荒川さん。實にあなたは恐ろしい人です。そうして何の必要があつて私を此處へ勾引したのです。』

『静子さん。あなたを驚かした事は何うか免して下さい。決して惡意が

あつて斯ういふ事をしたんぢやないですが、然しあなたを連出さねばならぬ必要は大いにあつたのですから。其の必要といふのは他ぢやないですが、静子さん。實は私はあなたに惚れたのです。」

静子は驚きのあまり吾れ知らず飛びすぎらうとしたが、荒川は無理に其の手を執つて引据ゑた。

「何も其んなに驚く事はありません。あなたのやうに年が若くて美しい方へ男子が惚れるに不思議は無い筈です。御耻かしいですが、先生の塾に居た時分から、何うかあなたのやうな美人を妻にしたいと、此の荒川は一人で胸を焦がして居ました。と云うて、先生や奥さんに打明けた所で、所詮御許しのある譯ではなし、其のうち、あなたは御両親と此の朝鮮に移住なすつたから、もう忘れてしまはう、あなたの事は諦めようと思つても、静子さん、私はあなたの顔が眼先にちら付いて、儘よ許しが出ようか

出まいが、先生に打明けて見ようと、東京から此の馬山浦へ渡つた事は渡りました。が、能く考へて見れば、とても玄關からの應對ではベケを食ふに極まつて居る。濟まない事だが、裏門から短兵急に押掛けやうと、斯う決心したんで、御宅に奉公して居る朝鮮人を味方に抱込んで今夜の始末となつたのです。假令少しの間でもあなたを驚かしたは濟みませんが、然し此の荒川が意中さへ察して戴けば、却て同情を寄せて下さる事が出来るでせう。何年といふ月日を叶はぬ戀に煩悶して、其の揚句があなたの愛を得たいばかりに、日本から此處まで来た荒川實です。静子さん。何も其んなに悪者に出合つたやうに恐れたり驚いたりしなくとも、お前が可愛さうだくらゐは言つて下さつて可いでせう。其れとも、あなたは此の荒川を無法な奴と思つて入らつしやるの。」

「其れは、勿論で御座います。卑劣千萬にも、力の弱い女と侮つて、夜中

に人の寝て居る處へ侵入して、而も手ごめに此處へ勾引すといふは、其れが名譽ある男子の行ひと言へませうか。あなたのやうな汚はしいと方とは詞を交へるさへ私には不快でなりません。」

荒川實は嘲けるが如く笑つた。

「わは、わは、あなたは私を大層嫌ひますな。そういう様子では此の荒川と結婚なんぞは無論承諾して下さらんでせう。」

静子は當り前だと言はぬばかりで黙して答へなかつた。

「いや、宜い。ではない仕方がない。しかし、静子さん。此の荒川だつて暴力を以てあなたを此處へ連出したくらゐだ。あなたが果して私の希望を叶へて下さらん場合には、何うしようといふ覺悟は持つて居ますぞ。」

「其れでは、あなたは私を何うしようと思つて居るんです。」

「此の上は矢張暴力より他はありません。先つきのやうに手ごめにも私

の望みを遂げんきや止まないのだ。」

「あれつ。」

静子が助けを叫ぶとした其の口は、脆くも敵の手掌の爲めに塞がれた。

「さあ、大聲を揚げるなら揚げて見ろ。」

じたばた手足を藻掻いても、纖弱き静子は終に悪魔の餌となるより他はないのである。

(四四)

「おい、荒川君。何うしたのだ。ひどい事をするぢやないか。」

あはや静子が辱しめられんとした一刹那、襖を明けて此處へ入つて來た年若き紳士があつた。

荒川があつと驚いたので、相手の口を押へて其の手の弛むと共に、

「人殺しい。」

静子の甲走つた聲は初めて發せられたが、其の紳士は優げに肩を叩いた。

『もう其んなに騒がんでも可いです。僕が飛込んだからには、此奴に無法な事は決してさせんですから。そうして、荒川君。君も先づ其の手を放したまへ。一體婦人を捕へて斯んな暴行をするなんて怪しからん。む、君が手を放さんけりや可い、僕も腕力に訴へるぞ。』

荒川實は静子を捉へた手を濫々ながら引込ました。而して静子は再び自由の身となつたので、われを助けてくれた相手の顔をつくづく見詰めたが、其の紳士は泰然として其處の座に直つた。

『む、分つた。荒川。君は此の婦人を手ごめにしようとしたんだらう。いや、惚けても其れに違いないのだ。御令嬢。其うでしたらう。』
静子が打領くのを認めた彼は屹となつて荒川の方へ瞳を向けた。

『おい、荒川。貴様が幾ら辯解しても僕は現場を見届けたのだ。貴様は

婦人を誘拐して確かに辱しめようとしたのだ。實に何といふ不徳義な、卑劣千萬な……いや其ういふ事は最早僕の口から言ふべき場合でない。貴様は刑事上の重き罪惡を犯さうとしたのであるから、早速居留地の警察へ引渡してしまふのだ。さあ行け。』

手を捕らへられて、荒川實は抵抗する勇氣もなく、平蜘蛛のやうに謝まるのみなのである。

『いや、私が悪かつた。私は實に悪い事をしたと悔悟しました。令嬢に對しても、あなたに對しても、謝罪なら幾らでもしますから、何うか警察の所だけは。』

『いや、免さん。貴様。行けと言つたら順はに行くのだ。』
再び捉まへられて手を振放すと見る間に、荒川の足は襖を蹴つて彼方へ飛出した。

『うぬつ。』
跡から追ッかけやうとしたが、矢を射る如き實の姿は終に見失はれたのである。

『野郎。逃げたつて逃がすものか。居留地のほかに逃場はないのだもの。』
紳士は獨語をいひながら、静子の傍に立歸つて、『御合嬢、さぞ吃驚なすつたでせう、然し丁度幸ひな所へ僕が來合はしたので、あなたの辱しめだけは御救ひ申す事が出來たのです。』

茫然として紳士の顔を打守つた静子は、漸くにして口を開いた。

『私を助けて下さつたあなたは、一體何方なの。』

『僕ですか。僕は名前は藤浪百之助といふて、近ごろ内地から此處へ來た者です。』

『其う。』静子は益々相手の顔を見詰めた。『あなたは何處かで御見かけ申

した事がありますわ。其うく、何時か、角筈の私の家へ、あの尾形さんに化けて荒川が連れて來た方ぢやないの。』

(四五)

荒川實の暴行を挫きて自ら藤浪百之助を名乗つた其の若紳士は、其の藤浪なのであるが、然しながら其處には大いに魂膽が潜んで居るのである。

静子に深き執心をかけた百之助は、自ら尾形の名を騙つて角筈で失敗を演じたにも拘はらず、尙も静子に對する情を思絶えないので、再び荒川實を策略の軍師と仰いで、此の馬山浦へまで押かけたのであつた。

然しながら、屈山老人の前で一旦尻尾を出したからは、公然と結婚を申込んだ所で希望の成就すべき筈は毛頭ないので、軍師荒川は茲に苦肉の計を案出したのであつた。其れは、先づ静子を脅かした上、荒川自身が敵役となつて無體の手をぬにまで及ばんとする。其處へ百之助が立役で現はれ

て本人を救つてやる。其れを緒に口説落さば、十中八九静子は此方のものであらうといふ荒川の設計に基づきて、其の夜の狂言は演ぜられたのであるが、扱愈々の正念場となつて、お前は尾形に化けて角筈へ来た人だらう、と静子に星をさゝれた事は、百之助の胸に大打撃だつたのである。何となれば、荒川に連れられて加賀見の屋敷へ赴いた時、静子に顔を見られたとは百之助に取つて實に思ひのほかな事なので。

『尾形とか。角筈とか。僕には何の事だか解せられんですが。』と彼れは成るべく空とぼけてしまはうと思つたのである。

『それから、私まだ思出した事があるの、藤浪さんは實は私を御嫁にしたいつて、荒川から申込んだ事はなくつて。』

『あなたを妻に……。では、あなたは加賀見の御令嬢ぢやないですか。』百之助は愈々とぼけて尋ねた。

『其う、私、静子です。矢張あなたは其うでせう。』

『成程、荒川に嘘かされて其ういふ事を申込んだ覚えは確にあるですが、あなたが其の静子さんであつて、斯かる所で御眼にかゝるとは實に奇遇です。而も其の時分には、媒妁の勞を執らうと言つた荒川があなたを辱しめやうとするなんて。』

『本當に荒川は憎い奴よ。』

『全くです。ちや、逃げたつて警察の手で屹度引捉らへさして、法律の制裁を加へてやりませう。』

『其れがよくつてよ。其うすと、あなたは私の好いた人。』

百之助は思はずにやりとした。

『御令嬢。冗談にも其んな事を言うてはいけません。』

『おや、其れは嘘よ。あなたなんか私の好いた人ぢやないわ。あは、』

「私の好い人、他にゐるの。私の好いた人本當は尾形さんなのよ。あは、」

(四六)

馬山浦の日本居留地で、對馬館といふ旅店の奥座敷で差向ひに酒を酌みながら、ヒソヒソ談して居るのは、藤浪百之助と荒川實とである。

「荒川君。困るぢやないか。幾ら狂言はうまく行つても、肝腎の玉がキ印になつては。」

「大きに其うです。實際私の口説場が上手過ぎたものだから、怖いと驚いたので逆上せたと見えませすな。しかし、あゝして寝かして置けば其のうちには心氣が静まるでせうから、静まりさへすれば正氣になる、正氣になつた所で愈々あなたの希望は遂げられるといつたやうな順序です。」

「君のやうに詭通りに運んで行けば可い。」

「何、大丈夫です。そうして後で正氣にさへ歸れば、今のうち少しぐらゐ氣のふれて居た方が、あなたの爲めに都合なのです。氣が確かなら家へ歸りたがるに極まつて居るですから。其奴を引留めて物にしようといふのは、憚りながらあなたには大分骨ですぞ。」

「成程、荒川君。其處の所は大いにあるね。」

「ですから、静子さんが取亂したのは、あなたの爲に天佑です。此處の宿屋の名が對馬館で、天佑と來ては日本海々戦。あなたが勝利の月桂冠を得られた東郷大將。私が秋山參謀で、無論論功行賞の場合には、年金附の金毘勳章が戴けるでせうな。」

「君は報酬ばかり先きに欲しがるから行かん。まだ失敗するか成功するか分らないぢやないか。」

「其處はあなたの腕次第さ。此の荒川といふ赤面の後へ、コツテリと白

塗りの、芝居ですれば光氏といふ柄で、あなたが優く持ちかける。静子さんが其處でポツと来る。よう御兩人くとは是非大向ふから手が鳴るうちに、濡の幕が濟んで、チョンチョン。はい御茶よろしか。菓子よろしか。は、は、は、是れでは、釜山で見た田舎芝居のやうだ。」

荒川は先つきから大分酔つて居るらしい。酔ふとはしやぎ出すのが此の男の癖である。

「其う君のやうに騒いでは行かんよ。時に、静子さんは、何うしたんだらう。先つきまで駈をかく聲がして居たが。」

「左様さ。幾ら何でも今までグツスリ寐入つて居るなんざ、捕虜として呑氣過ぎるですな。鳥渡、私が偵察と出かけませうかな。」

荒川はよろしくしながら立ちかゝつた。

「おい、待ちたまへ。もし眼でも覺まして居る所へ君が顔を出してはま

づいよ。」

「成程、そうだ。あなたが警察へ引渡すてんで、逃走した筋になつて居ますからな。」

「僕が行つて見て来よう。」

「よう光源氏、又の名は藤浪由縁之助。これから屏風に差金の蝶の妖術と御座い。」

「静かにしたまへな。」

「左様、荒川實が箝める猿轡は此の猪口に限りませす。」

自分でなみく注いだ酒を三口ばかり味はつて息を吹いたが、此處を立つて行つた百之助は何時の間にか顔色を變へて歸つた。

「君。大變だせ。静子さんは居ないよ。」

「えつ、玉を逃がした。其奴は大變だ。」

『まわ、君も行つて見てくれたまへ。』
百之助についで、荒川も静子を寝かした二階の一室に駆込んだが、寢床は明殻となつて、女輩には滅多に出来さうもない横手の窓から屋根傳に外へ逃出した形跡がありくと残つて居る。

(四七)

漸と此處まで漕付けた本人の静子を、油断する間に逃がしたは残念千萬であるが、斯うなれば、其れよりも心安からぬ自分たちの身の上。静子が元の正氣に立歸つたと立歸らぬとに拘らず、此處を逃出した以上は、自分等の悪事が本人の口から世間に洩れるは必定。さてこそ身の一大事と、藤浪白之助も荒川實も互ひに顔を見合はして色を失つた。さりとして、今更躊躇する場合はない。出来得べくんば静子の跡を追掛けて、再び本人を押へるより他に手段は無いのである。全く雲を攫むが如き探

し物ながら、静子が出たから時間は左ほど立たう筈もなし、逃行く先の路取は、自宅のある山手か、さなくば居留地の海岸通り、二つのうちのひとつと大かた知れて居る。今から追跡して及び得られぬ望みが無いでは無い。されば、山手の方は荒川、海岸通りは藤浪、と二人が二手に分れて早速その跡を追つかけた。

此の對島館の裏手に小さい横町があつて、其れを海岸へ向つて出ると、雜貨商やら料理屋やら日本人の商店がずらりと並んだ長い通りがあつて、其處を一本筋に行くと、直ぐ海岸になつて、廻漕店や宿屋で片側町をつくつて居る。其れを通り過すと、小さい川が横に流れて、之れに架けられた橋が海岸橋で、其の遙か向ふには領事館やら郵便局が立つて居る。百之助が橋の手前まで来ると、欄干の傍に黒い人影の彳亍で居るのを認め、彼方の棧橋から照渡るラムプの光りに透かして見ると、其の人影の輪

廓が静子に似て居るので、立停まつたまゝ息を殺して其の方を打守つた。静子に似たる人影は動きもやらず、橋の擬寶珠のやう其處に不動の態度を執ること暫くであつたが、やがて、しくしく啜り泣の聲が聴えた。扱こそと、忍び足に近寄つた百之助が、其の人影を距ること五尺ばかりの後、後に着した途端に、吾れより他に人のけはへを聴取つてか、此方を振向いた其の顔は、遠くから射し込むラムブの光りで真向に照らされて、其れは果して静子である事を確めた。

『静子さん。』

百之助が聲をかけたので、驚いて逃出すかと思ひのほか、静子は泰然として其處を動かなかつた。

『あなたは誰。』

『私です。あなたは其處に何をして居ます。』

『私、こゝで遊んで居るの。あなたは先つきの方ね。面白いわ。あなたも一所に遊びませうね。』
言葉の様子を聞いて、百之助は尙ほ静子の心の狂つて居る事を知つたのである。

『遊びますとも。しかし此處に居ては寒いですから、彼方へ行きませう。』

賺かして連れて行かうと百之助が手を取つたのを、静子は邪慳に振拂つた。

『嫌よ。私、寒い方が可いの。』

『でも、風を引くと行かんですから。』

『風なんか引いても可いから、私いつまでも此處に立て泣いて居るわ。』

『其んな事を言はないで、私と一所に行きませう。』

百之助が再び執へた手は再び振拂はれた。

『嫌。嫌てば嫌よ。私、橋の上よりか水の中へ入つて見たいの。』

静子は無心に川の面を見込むのである。丁度上潮の海水は此の橋の下までなみ／＼と漲つて居る。

「其んな無理をいふものぢや無いです。此の水へ陥れば死んでしまひます。」

「死んだつて好い事よ。」

静子は物の怪に魅られたもの、如く、ひよろ／＼と橋の袂へ進寄つた。

「もし、危ないですぞ。」

「危くつても好いのよ。あなた其の手を放して頂戴。」

萬一を慮つて帯を攫んだ百之助の手を、無理に振解かうとして静子は藻掻いた。

「だつて、此の手を放して何うするのです。」

「何うでもいい、からさ、さあ、放して頂戴。」

「いや、放しません。」

百之助は力かぎり争うたが、女の力は驚かる、ばかり強いのである。攫まれた手を振拂ふと共に、再びよろけるやうに水の際まで進むと思ふ間に、ザンブとばかり川の中へ其の身を跳らした。

(四八)

静子が振拂つた力に煽られて、百之助はベタリと後ろへ倒れたが、慌て、起直つた時には、静子の黒き影が漲る水に呑まれて、サツと水煙が立つた。水心を知らぬ百之助には、見す／＼溺る、人を救ふべき術もないのである。一旦は聲をあげて助けを乞はうかと思つたが、己が疚き行ひを顧みては、其れも適當の處置でないと知つて、彼れは茫然として只つた今静子の沈める水の面を見詰めたが、漲り渡れる潮のうねりに燈の影の幽かに物凄く照らすのみであつた。

「當ちやん。何故久しく顔を見せなかつたの。本當に私どんなに氣を揉んだか知れやしないよ。」と女が言つた。

「其りや己だつて、同じぢやねえか。お前に半月ぶり會はねえんだものと男が言つた。

「あ、此の人はお極りを言つて居るよ。其んな氣やすめなんて止して頂戴な。」

「氣やすめぢや無え、全くよ。其の隊の方が新兵の仕込や何かで馬鹿に急がしいのだからね。」

「何が、急がしいのか知れたものぢやありやしない。お前さんが浮氣をするなら、私やお前さんを殺して私も死んでしまふよ。」

「何を言つてるんだ。其んな安い命があつて堪るものか。」

「ぢやあ、私が何ともしないなら、浮氣をするの。」

「馬鹿つ。男は笑ひながら、「誰が浮氣をすると言つたんだえ。見つともねえから、其んな當てのねえ格氣はよしてくれ。」

「でも、お前さんは浮氣をしさうだもの。」

「詰まらねえ事を言つて居やがる。浮氣ならお前の方だらう。」

「鳥渡！女は眼尻をキリ、と釣上げた。『鳥渡、當ちやん。私か何時

浮氣をしたのさあ。何月の何日何時何十分に私が浮氣をしました。其れはね、斯んな家業だから、御客を取るの仕方がないさ。だけれど

.....」

「おい、其の客を取るのが矢張浮氣ぢや無いか。最初は嫌な客だと思つても、其處は人情てえものは妙なもので、馴染むうちには可愛くもならうぢやねえか。」

「ぢやあ、私がお前さんのほかにいい人でも拵へたといふの。」

「其うよ。」男は眞面目で言つた。

「本當に口惜いつ、憚りながら私に限つて其んなちやありやしないよ、ぢやあ、相手の男は何てえの。」

「其んな事を己が知るもんか。」

「では、矢張お前さんも當てのない格氣を焼いてるんぢや無いか。」

「其うよ。お前が其うだから、己も烏渡眞似をして見たのさ。」

「ま、此の人は憎らしい。」女は嬉しさに莞爾としながら男の肩を軽く打つた。

此の對話の起つたは、廣島大手町の稻川の二階座敷。いつやら尾形俊助が通された其の六疊なので、女は言ふまでもなき酌女のお鶴。先ツきから差向ひの合酌も大分念が入つた飲みやうか、眼元にボツと赤みを帯びて、其

れが素面の時よりも一きは美さを添へて居る。

相手の男は、お鶴が情夫と浮名の立つた歩兵軍曹豊川當次。頬に際立つた痣はそもや遼陽の役に於ける彼れが軍功の紀念たる鐵砲傷。この爲めに人相が恐ろしく見えはするが、色の淺黒い苦み走つた男。身には軍服を着けたまゝ、大あぐらを掻いて居る。

(四九)

「本當に冗談ぢや無いね。」お鶴はしみじみ、思ふ所ありげに言つた。

「其うよ。もう御互ひに痴話ぐる間でも無えやな。お前も其うだが、己も今ちつと眞面目に成らう。」

「全くね、お前さんの除隊になるも、もう直なんだからね。格氣なんか焼かうよりも、世帯を持つ支度にかゝらなくちや成らないんだ。」

「お前が其う言つてくれると、己も何だか是れから先きに張合があつて、

隊を出たら商賣に何をしようかなんて、じみな心にもならうといふものだ。」

「其れは私だつて其うさ。今こそ斯んなペンペラ物を引つけて、だらしの無い風をして居るが、天下晴れてお前さんの御内儀さんに成れば、すつかり生變つた氣になつて、筒袖に前掛で。朝から晩まで勝手働きをしよう、其れはツかりを樂みにして居るのさ。あれが稻川で酌婦をしたお鶴か。まあ變れば變るものと、世間で言はれるやうにね。だが、當ちやん。其の時に世帯じみた女は嫌だなんて私を嫌つちや行けないよ。」

「何で嫌ふものか。お前には是れまで散々苦勞をさしたんだもの。」

「其う言はれると、私は嬉しいのか悲しいのか涙が出たくなるよ。だが、お前さんと大連で始めて會つてから今日までの事を思出すと、宛然夢だね。」

「夢でも嬉しい夢だから好いやな。斯う何だか嫌に談が理に落ちて陰氣になつたぢや無えか。」

「私でも斯んなに沈む事があると思ふと、不思議なものさね。では、陽氣に一盃飲直さうかね。」

「己は澤山いけねえから、お前、飲みねえ。」

「其う言はれると、私も飲みたくないよ。酒を飲過すとロクな事はなからね。何時かも、お前さんに話した通り、私の實の父さんから大層な御金を私に下すつたんだつて。わざ／＼尾形といふ人が東京から其の事で尋ねてくれたんだけれど、生憎、前の晩から持越した酒の酔で、私がクダを巻いたもんだから、其の人は、何うせ身が固まつた上でなくちや其のお金を引渡す事が出来ないつて、其れつきり便りも何にもないが、澤山でなくても、此處で二百か三百送つて貰つたら、世帯を持つにも都合が

よからうと、今では本當に後悔して居るよ。」

「其うよなあ。其の事は何時か聞いたが、お前も大分シミつ垂になつたぢや無えか全くお前の實の父さんがお金を残してくれたのか、其れとも、其の尾形とかいふ男が好い加減な茶らつぽこを言つたのかそれから使ひも無え人では、何だか知れたものぢやありやしない。」

「其れも其うね。」

「だからよ、其んな當てにならねえ事を當てにしねえで、二人が一所になつたら共稼ぎに稼ぐんだ。」

「當ちやん。お前さんの心は實に潔白ねえ。」

「潔白か、何か知らねえが、人間は依頼心を起しちや駄目なんだから。」
「私も人に絶る事は大嫌ひなんだけれど、お前さんと一所に世帯を持つてんで、もし其んなお金でもあつたらばと、矢張女は愚痴だわね。」

「何かん言ふうちに、又理に落ちてしまふぢや無えか。行けねえ〜。今度は己の方が酒でも飲みたくなつた。」

「其うね、あついのを。」

お鶴が手を鳴らさうとした途端に、

「豊川さん。御二人つきりで大層しんねこです事ね。」

銚子を提げたり入り入つて來たのはお喜美といふ仲居である。

(五〇)

「喜いちやん。お前だつて些しは顔を見せてくれても可いだらう。」軍曹
豊川當次は笑ひながら言つた。

「あら、あんな様子のいゝ事を。でも、お鶴さんと差向ひの所へ顔を出しては御迷惑だらうと存じまして。」

「ふゝ、巧く言つて居るせ。どれ、其のつもりで思ひざしと出かけよ

う。『當次は猪口をお喜美の方へさした。』

『有難う。だが、思ひざしを戴いてはお鶴さんに叱られますわ。ねえ鳥渡。』笑ひながらお鶴の方を振顧つた。お鶴も矢張笑つて居る。

『喜いちやん。大丈夫よ。此の人には疾うから愛憎を盡かして居るからさ。』

『何かんつて、口は重寶で御座いますことね。豊川さんが入らつしやらないと、焦れて〜私たちを散々困まらす癖にさ。』

『だから、其の理合せに、今日は私がお前さんに騒るよ。』お鶴が言つた。『本當に此れが御馳走さまといふのですわね。では、彼方の用を片付けてから悠くり伺ひませう。』

『うむ、其うしねえ。だが、體の好い事を言つて逃げちや行けねえよ。お鶴と二人つきりでは退屈で行けねえから。』

『おほ、おほ、まさか其うでも御座いますまいよ。ですが、退屈といへば、面白い事がありますわ。』

『面白い事つて何だ。お前が面白いと言ふんなら、阿彌陀の籤を引いて焼芋買ひに行く、らゐな事つたらう。』

『あら、其んな遊び事ぢやないの。帳場へ氣違ひの女が来て居て、其れはすばらしい別嬪ですが、言ふ事が可笑いのつて、本當に皆で腹を抱へて笑ふんですよ。』

『ふ、む、別嬪の氣違ひとは何だか芝居氣があるね。一體何うして其んな化物が此處へ舞込んだんだらう。』

『鳥渡、當ちやん。御よしなね。』鶴子は口を出した。『お前さんは別嬪だといふと直ぐ夢中になるから、其れが悪い癖なんだよ。』

『本當にねえ、お鶴さん。だから、お前さんも油断しちや行けません』

よ。

「何だ。喜いちやん。お前までが其んな可笑しな事を言ふもんぢやねえ。時に何うだらう。お鶴。其の狂美人つてえのを此處へ呼んで見ちやわ。」

「其うねえ。お前さんさへ浮氣を出さなければ。」

「やい、何を言つてるんだ。己が何ぼ何でも、キ印に手を出すほど女にかつえちやわ居ねえや。」

「他に澤山あるからね。」

「又あんな氣障な事を言つて居やわがらわ。喜いちやん。何も御慰みだ。」

其のキ印を此處へ呼んでくんねえな。」

「お鶴さん。可う御座んすか。」

「おほ、此の人は嫌だわね。私に嫌に氣を置いてるぢやないか。大丈夫ですよ。」

「其う。では直ぐに連れて参りませう。」

「其うしねえ。」

仲居のお喜美が立つた跡で、豊川當次は考へ込んだ。

「しかし、罪だわ。氣のふれて居るものを座輿の慰みにするなんて。」

「本當に其うなんだよ。弄ふのは好い加減におしなさいよ。何でも家の

旦那が馬關から抱へて来て、矢張酌婦にしようと言ふんださうだが、私

はまだ本人には會はないけれど、氣のふれた者に家業をさすなんて、家

の旦那も餘程因業だらうぢや無いか。」

「うむ、其うか。」

當次が打額いて居るうち、ふらりと座敷の真ん中に突立つたは、鉛よりも真青な顔色に瞳の凄く据つた、一眼見るから精神に異状があるらしく、然りとて、眼鼻立は極めて美しく、肉のキメ細かく、黒き髪のプロサリとし

た、如何にも絶世の美人であるが、是れなん加賀見静子が成れの果であるとは神様ならぬはかは知るものもあるまい。

(五一)

「さあ、おキチさん。其處へ据わつて皆さんに挨拶をするんですよ。」

仲居の喜美子が後ろから教へると、

「おは、可笑いこと。私の名前はおキチなんて其んなぢや無くつてよ。私は静子と申します。」狂女は留度なく笑ふのである。

「其う。静子さん。」お鶴は其の美き顔を惚れくと眺めて、「矢張御嬢さんらしいわね。何てえ物越しのしとやかな。」

「其うよ、私お嬢様よ。斯んな處に居る事大嫌ひなの、其れに怖ろしい人が私を此處へ連れて來たの。私悲い〜。」今まで笑つた静子は急に啜泣をした。「早く歸りたい事よ。おつ、あなたは軍人。」始めて當次が軍服

に氣が付いたのである。

「軍人なら、何うしたの。」お鶴は優しく尋ねた。

「此の人みたいな軍人が能く私の家の前を通つたの。喇叭を吹いて、鐵砲かついで……あ、あ、私内へ歸りたいこと。」

「そして、お前さんの内は一體何處なの。」

「私の内、大日本帝國よ。」

「馬鹿に大きく出やがらぬ。」當次は笑ひながら言つた。「そして大日本帝國の何處なんだ。」

「東京よ。」

「成程、道理で田舎者ぢや無えや。餘程由緒がありさうだな。」當次はつくづく静子の顔を見詰めた。

「あら、恥かしい事よ。其んなに私の顔ばかり見て。ぢやあ、あなたは

私の意中の人ぢやなくつて……顔、違つてよ、違ふ事よ。私の意中の人、東京へ歸つてしまつたの。私あひたいわ。會はして戴きたいわ。』

『矢張、色狂ひだ。漢語づくめの惚けが可笑しいや。』當次は小聲でつぶやいた。

『本當よ。私失戀の人なの。そんなに笑つて居ないで、皆私の爲めに泣いてくれて可いわ。あら、よくつてよ。皆さんが泣いてくれなければ私ひとり泣く事よ。』静子は子供のやうに両手で眼をこすりながらシヤクリ上げるのである。

『其れで大かた筋道が分かつたやうだね。』お鶴は同情の眼尻を彼方へ注いだ。『お前さんは東京で立派な内に育つたお嬢さんだつたんだね。』静子は尙ほ泣きながら頷くのである。

『其れが、惚れた男に添へないから、氣がふれて斯んな處までうろついで来たんだらう。』

『あら、私、氣なんか狂れちや居なくつてよ。』

『其う〜、氣は確かなんだけど、色戀に苦勞をして斯んな處へ來たんでせう。』

『あら、其うでもないの。私朝鮮で死んでしまつたの。』

『ほ〜、何だか尠も取留めが附かなくなりましたわね。』仲居のお喜美は腹を抱へて笑つた。

『喜いちやん。其んなに御笑ひでないよ。此のお嬢さんが斯んなに落おちたれなすつたのは餘程其處に譯がありさうだね。』

お鶴は身に染みながら言つたが、其の態度を静子は眼を放さず打守るのである。

『あは〜、あなたは私の好きな姉さんよ。』

「其う。私わたしが其そのんなに氣きに入いつたの。」お鶴つるは子供こどもをあやすやうに言いつた。
 「でも、私わたしの爲ためめに泣なてくれるのはあなたばかりなんだもの。」
 「まあ、何なにを言いつてるんだか知しれないが、何なんだか私わたしも釣つり込まれて、此この子こが可愛かわいさうで懐なつかしいやうな氣き持もちになつたの。そして、お前まへさん。何なにか喰たべたいものがあるなら其そのう御お言いひな。」
 静しづ子は其その首くびを掉ふつた。

(五二)

たわいなき静しづ子の顔かほから姿すがたからお鶴つるは更さらに惚ほれく〜と見詰みづめた。

「本ほん當たうに、上じやう品ひんで、美うつくくつて、人柄ひとがらで、斯こんなにならない前まへは何なにんなに綺きれい麗れいな御お嬢ぢやうさんだつたらうと私わたしは思おもふわ。」

「ぢやあ、お前まへの方が惚ほれたんだな。」

「違ちがひない。私わたしは此この人ひとに惚ほれたかも知しれないわ。心しん底そから可か愛あいいやう

な氣きがして成ならないんだもの、そうして、喜きいちゃん。内うちの旦那だんなが馬ば關かんから抱かへて來きたといふ事ことは今いま朝あ聞きいたが、一たい體たい馬ば關かんへは何なん處ちから何なんんな手て蔓づるで連つれて來きたらうね。」

「私わたしも詳くわしい事ことは知しらないが、何なんでも馬ば關かんへは朝あ鮮せんから連つれて來きたらうかと、旦那だんなが其そのんな事ことを言いつて居ゐましたよ。」

「其そのう。道だう理りで、先まつき、此この人ひとも私わたしは朝あ鮮せんで死しんでしまつたとか、可か笑わしな事ことを言いつたのね。」

「其そのの通とほりよ。」傍そばから静しづ子が再またび口くちを利きいた。「私わたし死しんでしまつたの。」

「何なんだか、えたいが分わからないのね。そうして、内うちの旦那だんなも餘あまり罪つみが深ふかいぢやないか。斯こんな正しやう體たいもない者ものを連つれて歸かへつて、勤つとめをさせやうなんて。」

「でも、玉たまがよくて直ね段だんが安やすいから、掘ほり出だし者ものだと思おもつたんですとさ。」

「成なる程ほど、それは其そのうさね。黙だまつて坐すわらして置おけば、斯こんな美うつくしいのは廣ひろ

島中尋ねたつて滅多にありやしない。然し、本人に因果を含めて承知の上といふなら兎も角も、此の通り無我夢中で居る者を御客に出すんぢや、強姦するも同様だらうぢやないか。

「其れや全くお前のいふ通りだ。」軍曹豊川當次も始めて同情の意を表した。「これを法律沙汰にすりや此處の親仁は立派に犯罪者なんだが、まさか其うは行くめえな。」

「其れは其うさ。何うせ法律の網目を潜るのが商賣なんだからね。然し、私は何うかして此のお嬢さんに其んな憂目を見せないやうにして遣りたと思ふわ。當ちやん。もし切迫つまつた場合には、お前さんの智慧も借りなくちや成らないから、今から頼んで置くよ。」

「其處は大丈夫だよ。お前にはのろいが、斯う見えても陸軍々曹で、生きるか死ぬかの戦場を踏んだ兄さんだ。まさかの時は此のサーベルが物を

言はあな。」

「なに、其んな荒つばい仕事を頼むんぢや無いよ。然し、お前さんが後ろに附いて居てくれると私も頼もしいのね。」

「お鶴さん。御馳走さま。お喜美は傍から冷かした。」

「其うく、御馳走さまと言へば、お前さんに奢る筈だつたわね。序に此の静子さんにも何か御馳走をしよう。斯うつと何がよからうね。」

お鶴が小首を傾けて居る處へ、

「あの、喜いちやん。旦那が其う言つたの。其のおキチさんに用があるから、連れて入らつしやいつて。」

「そろく、閻魔の廳へ引出される譯なんだな。」當次は氣の毒さうに静子の方を見遣つた。

「其う。では御馳走は後程に戴きますから、さあ、おキチさん。お前さ

んも下へ降りるのですよ。』

『あら、私、おキチぢや無いつてはな。』

『では、静子さん。』

『はあ、姉さん。では左様なら。』

屋敷育ちの、恭く禮をして二階梯子を降りて行く、其の後姿をお鶴はジツと見送つて、

『當ちやん。本當に私や身につまされて、何だか變な氣持になつてよ。』

(五三)

馬山浦に一たび水に投じた加賀見静子が、何故に此の廣島に徘徊て居るのであらうか。其の事實は極めて簡單である。

静子は一旦水底に沈んだのであるが、丁度通りかゝつた小船は、日本から密航婦を運んだ馬庭作次といふ名うての人買ひだつたので、其れと認めた

作次は船頭に言付けて静子を引揚げさせ、本船へ連れて行つて有らん限りの手當を加へたのであるが、まだ命數の盡さぬかして、静子は再び其の息を吹返したのであつた。そうして類稀なる静子の美貌は人買たる作次をして私かに心の中に笑みを含ませしめた。

此のまゝ日本へ連れて歸れば、幾ら捨賣にしても三百圓や四百圓の物はあゝる。其れほどの上玉を手もなく拾つた己が幸運を悦びつゝ、馬關まで賺して送り歸したのであるが、作次は茲に於て己が目算のガラリと外れた事を悟つて失望した。其れは本人が取留もなき事を喋舌つて、泣いたり笑つたりするは精神の興奮せる一時的の状態であらうと思ひのほか、物狂はしき静子のさまは、馬關へ歸つても尙ほ止まないものである。幾ら美人とは言ひながら、本性を失へる狂人では物にならぬ、と買手の方で孰れも二の足を踏むので、作次が詮方なさに大安直に負けても、滅多に手を出す者の無かつた

を、其の安直で美人といふ所に眼を付けて乗氣になつたは此の稻川の主人であつた。

只つた五十に足らぬ端金で、作次の手から此の狂美人を引取つて、自分は少し掘出し物をしたつもり。些しは氣がふれて居ようが、當人の綺麗なソツポで一釜も二釜も起さうといふのである。

『のう、お静。先つきも言つた通り、今日からお前は錢で買はれた此處の奉公人だ。随分好い客を取つて、お前も好い目をすれば抱主にも好い目をさして貰ひてえんだ。』

帳場格子に脂下つた亭主の前には、可憐なる静子が茫然として控へて居る。

『私、奉公人なんか、其んな者に成れやしないの。私はお嬢さまよ。』

『お嬢さまでも奉公人でも構はねえから、客さへ取つてくれ、ば言分は無いだ。』

『あら、客を取るつて、何んな事をするの。静子は無邪氣に問ふた。

『成程。お前に客を取るといふ事が分らねえのは無理も無えや。おい、

お喜美。三番の座敷へ此の子を連れて行つて、客を取るのは斯うだといふ事を、お前教へてやつてくれ。』

『はあ、宜う御座んす。お静さん。何方へ行くんですよ。』

仲居のお喜美に促されて、

『三番つて何處。』

『何處でも可いから、私と一行に入らッしやいな。』

『何處でも私行つてよ。そうして客を取るつて何んな事か。私、お稽古をするのよ。』

『其う〜、全くお静はえらいや。ぢやあ、お喜美。お前に任すから宜くやつてくんねえな。』

亭主が仲居に眼くばせするのを、知らぬが佛の静子は丸で夢中なのである。

「さあ、私、客を取る御稽古に行く事よ。」

一足踏込めば色飯鬼の餌食となるべき危くも憐れなる己が運命を静子は意識しないのである。

(五四)

「其んなに悪留しちや困るよ。此れから隊へ歸るまでに買物に寄る處があるんだから。」軍曹豊川當次は帯革を攫んでお鶴を押除けやうとして居る。

「だつて、まだ時間になりやしない事よ。お前さんには色々談が残つて居るからさ。」

「何時もの御極まりを言つて居るせ。己だつて些とでも此處に居てえ事は居てえんだが、今いふ通り、今夜是非買物をしねえちや成らねえから。」

「ぢやあ、無理に留めやしないけれど、其の代り土曜日には屹度だよ。」

「其りや、ちやんと心得て居らあ。」

「では、左様なら。」

「馬鹿に改まつた口上を遣ふぢやないか。」

「でも、旦那様を送出すんだもの。」

「其うだ。己も其の氣で送出されよう。あは、。此れぢや丸でお前と飯事をして居るやうなものだ。」

當次が笑ひながら降りて行く後から、お鶴も追つかけるやうにして續いた。

「でも、當ちやん。屹度だよ。」

「うむ、大丈夫よ。」

靴を引つかけると間もなく、佩劍の音をガラリとさして威勢よく表へ飛出したのを、お鶴は上り口に立ちながら、姿が見えずなるまで懐けに見送つ

て、

「あゝ、詰まらない。會つて居る間は嬉しいが、會つて別れが無けにやよ。』
吾れ知らず中音に歌ふと、

『よう、御馳走さま。』

後ろから出しぬけに脊中を叩いたは、此れも朋輩の松江といふ酌婦であつた。

「あら、喫驚したわ。』

「でも、餘り惚れて居るから、懲しめて遣つたのよ。さうして、豊川さんは歸つて。』

「あゝ、今歸つたの。』

「何うも御氣の毒さまね。私も一度座敷へ顔を出さうと思つただけれど、今夜は馬鹿に忙がしいもんだから。』

「忙がしければ結構よ私なんぞ是れから獨りつぼちで寝るばかりさ。』

「そうして、彼の人の事はばかり思ひつゞけでは遣切れない事ね。其れより私の御客の所へ遊びに御出でな。』

「有難うよ。今夜の御客は誰れつ。』

「お前さんの知らない人。此れで二度目なんだから。さうして御連れに彼のおキチさんを當てがつたんで、先つきから大騒ぎなのよ。』

「さあ、何うして大騒ぎなの。』

「だつても、おキチさんが最初御客へ出るといふんで、大層勇んで出た事は出たんだが、扱となると嫌だつて、おい／＼泣出すんだもの。其れで御客は怒り出すし、私が幾ら賺かしても何うする事も出来ないから、今は旦那が奥でおキチさんを折檻して居る所なの。』

先つきから、心を他に取られて氣付かなかつたが、其う聞けば、奥の方で

幽かな泣聲のするのは氣狂ひの静子らしい。お鶴はじつと耳を澄ました。

『あの泣聲が其う。』

『あゝ、其うなんだよ。』

『私、鳥渡行つて見るわ。』

お鶴は小走りに奥へと馳せて行つた。

(五五)

閻魔のやうな恐ろしい赤面をした亭主の前に、可憐なる狂女は引据ゑられ、病氣と苦勞とにやつれた其の顔に取亂してしく〜泣いて居るのである。病氣と苦勞とにやつれた其の顔に取亂した黒髪のふつさり懸かつたは、先つきからの折檻に束でも攫まれたらしい。

『やい、手前のやうに強情な女も無えものだ。是れほど因果を含めても、己の言付けを背くと吐かすのだな。』

静子は泣いたまゝ、答へをせぬ。

『おい〜、何でえ、人にばかし口を利かして。いゝわ、客を取るのが強て嫌だと吐かすなら、此方にも分別があらわ。痛い目をさしても己の言分を通すのだ。』

『だつて、其れは壓制だわ。婦人の操は暴力だつて穢されない事よ。』

静子は正氣の人の如く従容として言つたが、主人の眼は愈々怒氣を帯びた。

『何を小癩な理窟を吐かしやがるんだ。狂氣のくせに、壓制でも何でも、貴様の身體は此の己が錢を出して買つたんだから、己が勝手に客を取らすんだ。』

『嫌よ〜、客を取るつて。彼んな事なら私大嫌ひ。後生だから勘忍しつ下れ。』

静子は再びしく〜と泣きはじめた。

『よし、ぢやあ仕方がねえから痛い目をさすんだ。』

亭主が毛だらけの腕を此方へ差延べたと見る間に、静子の太股のあたりを嫌といふほどつねつた。

『痛い。後生だから勘忍して。』

静子が立上つて逃げまはらうとするのを、今度は脛を揚げてドツと蹴倒した。静子は身體を横さまにしたなり、其の場に泣沈んだが、無情なる主人は伸しかゝつて其の襟首を固く押へた。

『やい、此れでも己の言付に背くのか。背くなら背いて見ろ。まだく痛い目を見せるんだ。』

力を極めて畳へ摺り付けるので、静子は身體の揺れる毎に悲鳴をあげるのである。

『およしなさい。旦那。』

後から静子を押へた暴虐の手を制めやうとしたはお鶴である。

『貴様はお鶴ぢや無えか。何うして折檻の邪魔をするのだ。』

『だつて、旦那。餘りひどいぢやありませんか、可愛さうに、何にも知らない此の子を其んなむごい目に會はしてさ。』

『あら、姉さん。能く来て下すつたわね。』始めて鶴子の顔を認められた狂女は、涙に泣腫れた其の眼尻を嬉しげに此方へ向けたが、亭主は其れを打消すものゝ如く、今度は鶴子に喰つてかゝつた。

『お鶴。貴様の知つた事ぢやねえから、貴様は引込んで居ろ。むごい目に會はされるは此奴の心からだ。うぬ、主人の言ふ事を利かねえで。』再びこづき廻さうとする其の手をお鶴は力一杯に制止した。

『でも、旦那。待つて下さいと言へば些しは待つて下すつても可いぢやありませんか。斯んな弱い女をつかまへて腕立をするなんて、旦那も男らしくはありませんよ。』

『え、何を何うしたと。』

(五六)

『だつて、其うだわ。お前さんの力で此の子をひどい目に會はすのは、何時だつて會はされるぢやありませんか。だから、私の文句から先づ聞いて下さいといふんです。』

『そうして、お前の文句とは……。』

『旦那。ねえ後生ですから、此の子の事は私に任かして下さいまし。』

『任かすといふと何うするんだ。』

『任すのは矢張任すんでさあ。お前さんが力づくでは此の子を往生させる事が出来なくつても、其處は女同志で、私が何とかして因果を含める事が出来やうと思ひますわ。』

『ふむ、其れは其うだが、もしお前の手でも行けねえ日には何うするん

だ。此の子だつて金のかゝつた身體だから、其うべん／＼と只で食はして置く譯にや行けねえんだ。』

『其れは私だつて泥水を飲んだ身ですもの。此の子にお金のかゝつて居るくらゐは知つて居ますよ。可う御座んす。其れぢやあ、私の手でも客に出ないといふなら、此の子にかゝつたお金だけは私から旦那へ立派に御返しをしようぢやありませんか、お金さへ返してしまへば、旦那の方だつて文句はありますまいから。』

『ふ、む、お前は豪勢に此の氣違の肩を持ちやがるな。ぢやあ、今日の所はお前に任すでしょう。其の代り、明日になつて矢張手に了へねえぢやあ、今度こそ容赦はしないぞ。』

『可う御座んすとも。では、静子さん。彼方へ行つて、今夜は私と一所に寝ませうね。』

「其う。私、嬉くつてよ。」狂女は満足らしくにや／＼笑つた。其の翌る朝のこと、何時も朝寝をするお鶴が八時過に起出でたが、同じ店に夜を明した静子は尙ほすや／＼と眠つて居る。

「静子さん。もう起きるんですよ。」

蒲團の上から揺起されて、

「私、眠い事よ。」

「本當に氣のふれて居る者は香氣だね。」又も彼方に向けた静子の寝顔を、お鶴は打守りながら獨語を言つた。「自分の身體が何ういふハメになつて居る事も知らないでさ。もし、静子さん。冗談じゃないよ。今日は早く起きて、私と一所に御参りに行くんだよ。」

「あなた、お鶴の姉さんねえ。」静子は眼を見開いて始めてお鶴に起された事を知つたのである。「姉さんがもう起きて居るなら、私も起きる事よ。」

「本當に順はな事ねえ。さあ、顔を洗ふのよ。さうして御腹は減つたらうけれど、此の内の御飯は遅いから、今のうちに御参りをするのよ、お前さんの好い人に會へますやうにつて。」

「其う。其れなら私何處までも御参りするわ。」

「おほ、現金だわねえ。」

臺所では漸く飯焚の女が起きて居るばかりなので、其れに勝手口を明けさせて、お鶴は静子連れれたまゝ往來へと出て行つた。

(五七)

朝飯前に御参りに行くと言つて出かけたお鶴は、正午過ぎの一時頃になつて漸く稻川へ歸つて来たが、一所に連れて出た静子の姿が見えなかつた。

「お前。今まで何處へ行つて居たんだ。」

帳場格子にがん張つた亭主は不機嫌らしく尋ねた。

「鳥渡、其處まで御参りをして、其れから買物や何か。」
 「そして、氣違ひも一所だといふぢや無えか。」

「はあ、お静さんも一所でしたの。」

「うむ。で、彼奴は何うしたんだ。歸つたのはお前ひとりやうだが。」

「其うです。お静さんは他へ残して置きました。」

「何うした。」亭主の顔色は見る／＼險阻になつて來た。「お鶴。お前はよもや玉を逃がしたんぢやあるまいな。」

「其んな事はありませせんわ。だけれど、旦那。彼の子を此處へ連れて歸つた所で、客を取らう筈はなし、又そんな事をさすのは餘り罪だと思ふから、旦那に相談しなかつたのは悪いけれど、私の一存で外へ預けて來たのです。」

「ふざけた事を吐かしやあがるな。ぢやあ矢張逃したも同然だ。お前な

んぞに其んな事をされて堪まるものか。やい、お鶴。玉を那處へ置いて來たか言ひねえ。」

「だつて、其れを言ふ事は出來ませせんわ。言つてしまへば、お前さんが又引戻すでせう。」

「知れた事つた。引戻さいで何うするものか。サア遣つた先を言ひねえ。」

「先を言つて引戻させるくらゐなら、てんで預けに行くものですか。旦那。お前さんは昨夜の約束を覚えて居ませう。お静さんが何うしても私の手に了へなければ、本人にかゝつたお金だけを私からお前さんへ返せば可い筈ぢやありませんか。」

「ぢやあ、お前は玉を逃がした代りに、其の金を償ふと言ふんだな。」

「其うですとも。一體如何ほどになりませうね。」

「幾らつて、細かい事は言はないが、五十圓くれれば我慢してやらあ。

玉はよくても気がふれて居るんだから。』

『五十圓とは、旦那、餘り高過ぎるやうだけれど。可う御座んす。五十圓だけは私から御返しませうよ。』

『處で、其の金を今くれるんだな。』

『お前さんにですか。』

『其うよ。其うだらうぢやねえか。』

『だつて、私の懐ろに五十圓なんてある譯はないわ。』

『ぢやあ、お前は懐ろに文なしで、何うして其の五十圓を己に返すといふんだ。』

『おほ、旦那も商賣人のくせに、其は知れ切てるぢやありませんか。私の借金にして證文だけを書替へるんでさあね。』

『餘程、人を馬鹿にして居やがる。肝腎の玉は他へ隠して、金といへば證

文だ。其んな虫のい、談で納まる奴が何處の世界にあるものか。』

『ぢやあ、納まらなければ、旦那は何うするといふのです。』

『知れた事つた。氣違ひの居所を探がして連れて歸るんだ。』

『まあ、其う。』お鶴は度胸を据ゑて鼻で笑つた。『連れて歸れるものなら歸つて御覽なさい。』

(五八)

『お前が言はねえでも、連れて歸つて見せるんだ。お鶴。何處へ玉を隠したか、言つてしまひねえ。』

『いえ、言ひませんわ。私が言はなけりや何うします。お前さんは警察へ願つて彼の子を探がし出す事が出来ませうか。』

『此奴、己に後暗い事でもあると言ふんだな。』

『其うですわ。お前さんが彼の子を連れて來なすつたは、何うせ眞つ直

くな道ぢやありませんか。』
 『ぢやあ、誘拐をしたとでも吐かすのか。』
 『まあ、何だか知らないが、其んなに旦那の方から事を荒だてないで、其の五十圓は私へ貸して下すつた方が餘程おとなしいぢやありませんか。』

『いゝや。嫌だ。其んな脅迫がましい事を言はれて、一文だつてお前に貸すものか。何うでも玉を引捉らへて歸るんだ。其れが誘拐なら警察の手へは掛けられめえが、蛇の道は蛇だ。探偵に錢をつかまして、裏から探ぐる仕方は幾らもあるのだ。』

『よう御座んすとも。探がせるものなら探がして御覽なさい。』

『其うよ。捉へなくて何うするものか。だが、お鶴。其の時にや、お前が幾ら庇ひだてをしたつて、彼の狂氣女に客を取らせねえぢや腹が癒え

ねえんだ。』

切れ目の長い眼尻で睨まれて、お鶴はゾツとした。幾ら蛇の道は蛇といへ、滅多に静子の居る所は探出される筈はないが、然しながら、萬一にも探當てられたらば何としよう。只でさへ強慾非道な此の主人が、自分に對する意地からでも、今までより一層静子を酷い目にあはすは知れ切つて居る。さすれば、助けてやらうと思つた自分の志ざしが無になるのみならず、却て反對に静子を一倍の苦境に陥れねば成らないのだ。お鶴の旗色が怪くなつたを見て、亭主はせゝら笑つた。

『何うだえ。其れよりも今のうちに居處を言つてしまつたら。』

『旦那。それよりも其の五十圓さへ私の貸しにして下されば、文句はな

いぢやありませんか。』
 『其りや何うしても出來ねえ相談だよ。お前が現金を此處へ列べたなら

「ば格別さ。どりや、是れから狂氣女の行つた先を突止めて来ようかい。」
張場での談判が物の分れになりかけた時、表へ入つて来た客がある。

「誰か居ねえか。え、御客様だよ。」

亭主が聲をかけたので、お鶴も始めて氣が附いて其の方を振顧つたが。

「お前さんは鶴子さんでしたな。」

向ふから名前を呼ばれて愈々驚いた。

「あなた、何時しか會津から入つた……。」

「其うです。僕は其の時の尾形俊助ですが、お前さんに又用事が出来たので、遣つて来たのです。」

(五九)

尾形俊助が又も尋ねて来たは、何の用であるか知らず、例の二階座敷へ通した跡でお鶴は亭主と再び對話をつけた。

「ねえ、旦那。今の客が来たからには、私も事によつたら、五十圓ぐらの融通はして貰へようかと思ふから、其れまでのところはどうか待つて下さいな。」

「ふむ、五十圓。ナマで呉れるといふなら、其れや待ちもしようが、何うも己らにや合點が行かねえや。先つき見た所では、此んな家へ登るよくな風體とも見えねえが、一體あれはお前の客なのか。」

「其う。御客といへば御客、親類といへば親類見たいな人なんです。」

「何だい、怪いな。お前、己らに金をよこすんぢや無くて、あの男に口を利かして、法律すくめでツイにしようといふんだらう。」

「旦那。そんな事は大丈夫ありやしません。屹度御金で返せるだらうと思ひますから。」

「まあ、何でもいゝや。幾ら理窟を列べた所で、己らだつて、其れに言

ひまぐられるんぢや無え。ぢやあ、お鶴。二階で談のつくまでは待つてやるから、何とでも相談を極めて來ねえ。」

『では、鳥渡ですから。』

お鶴が階子を登つて行くと、絶えて久しき尾形俊助が嚴然として控へて居る。

『あなた、何時やらは本當に失禮を申上げました。』

『いや、僕こそ大失禮をしたですが、あれから御變りもないやうで結構ですな。』

『あれから、あなたが何うなすつたかと思ひましてね、あの時は私酔つて居たもんですから、始めて御眼にかゝつたあなたに太平樂ばかりついで、大かた失禮な女だと腹を立つて、其れきり便りもなさらないんだらうと其う思つて居ましたの。』

『何うして、お鶴さん。實はお前さんに感心してしまつたのです。何時かお前さんに會つてから、僕はすつかり僕の人生觀を一變してしまつた。』

『何の事ですか。大層御咄がむづかしい事ねえ。』

『いや、全くです、お前さんが斯ういふ境遇に陥られたは氣の毒なもの、憐むべきもの。僕が最初此方へ尋ねるまでは其ういふ考へであつたのですが、實際お前さんに會つて見れば、全く僕の豫想外ぢや。お前さんは、爲て居る家業は賤いが、一點の心に疚い事もなければ、前途に希望の光明を認めて居るから、心の中は平和である、満足である。と斯う言はれた。僕は其れを聞いて大いに悟つた。即ちお前さんを憐れむべき者と思ふたのは、寧ろ僕自身が憐むべき者であつたのだ。丁度其れと同じく、社會の改良だの、政治の刷新だの、人の頭痛を痲氣に病んで居た此の尾形俊助の半生は誤まれる半生だと知つたのだ。お鶴さん。だから、彼れか

「僕は東京へ歸つて、丸で生變つた人間になつてしまつた。主義も捨てた。方針も改めた。もう政治上の事には嘴も容れなければ頭も惱めない。僕は何處までも獨立獨行、實業を以て身を起さうと決心した。そして其の決心の結果は今度米國へ赴く事となつたのです。」

「米國つて、大層遠い御國ぢやありませんか。」

「其うです。僕は其の遠い國へ行つて農業に従事する。昔の政論家であつた尾形俊助は、お前さんに感化せられて外國の百姓となるのだ。其の僕を載せて外國へ行く船は明日神戸を出帆する。僕が其の間に此處へ尋ねて來た用事は他ぢやない。楯岡先生から僕が預かつた金の一件です。其の金高は丁度五千圓ある。それは無論お前さんへ渡すべき筈のものだが、お前さんの今の身の上では、能う手渡す譯に行かん。何時かと言ふた通り、お前さんが果して堅氣になつたなら、其の時に受渡しをするとして、

僕は外國へ行つてしまふんだから、現金の保管は楯岡四郎次君、即ち楯岡先生の總領で、お前さんの爲には義理ある兄さん、其の人に事情を明かして頼んで置いた。お前さんが其の遺産を受取つても心やましからぬ身分となつたら、直接に四郎次君へ通知を出すのです。さすれば四郎次君は改めて兄妹の對面をすると同時に、其の五千圓をお前さんの手へ渡す筈になつて居ます。」

(六〇)

何から何まで行届いた俊助の詞に、お鶴は何時やら大言を吐いた自分の事を私かに心恥かしく思つた。

「何うも有難う。だつて、私そんな五千圓なんて澤山な御金を戴く譯はありませぬわ。」

「お鶴さん。でも、其れが亡くなられた楯岡先生の御志です。お前さん

も其の先生の思召の程を味はつて、何うか一日も早く此の醜業から脱して下さい。そうして、お前さんの愛して居る其の人と清浄なる家庭を作つて下さい。そうすれば折角先生がお前さんの爲めに残された金も仇にはならぬのですから。先生も大かた其の事を草葉の蔭で希望して居られるでせう。僕は外國へ行つても矢張その事はかりを祈つて居ます。お鶴さん。是れほど僕のいふた事はお前さんに分かつたでせうね。」

「はあ、分かりました。此のお鶴は今日まで自墮落に身を持崩しました。が、あなたの教へと、阿父さんの御情けとを忘れないで、屹度是れから堅氣な眞人間になつて見せますわ。」

「何うぞ、其うして下さい。」

「さうして、尾形さん。私あなたに、御願があつてよ。」

「御願とは。」

「あの、五千圓なんて、其んなに澤山は入りませんが、今のところ、濟みませんが、些しばかり融通して戴けますまいか。」

「今のところ、御前さんに何の必要があるのです。先生の残された金は決して無駄に費す事を許さんですが。」

「あら、無駄ぢやありませんわ。私、人を救つて遣りたいの。其の人は本當に可愛さうなんですわ。まだ十八か十九かの立派な御嬢さんですが、氣がふれて居るの。其れが人買に誘惑されて、此處の家へ賣られて、主人は私たちと一所に客を取れと言ふんです。本人は氣が狂つて居ても、其んな事は嫌だといふから、主人が腹を立て其れは酷い眼に折檻をするの。私あんまり可愛さうだと思つたから、主人には黙つて連出して、他處へ隠してしまつたの。すると、主人が其の金を返せばよし、返さなければ何うしても探し出して客に出すといふんです。」

「ぢやあ、其の婦人を助ける爲に金が入るんですな。」
 「其うなの。そうして、ひどく身體が疲れて居て、氣のふれて居るのも一つは其の故らしいから、成らう事なら病院へでも入れて保養をさしてやりたいと思ひますわ。斯う言へば、何だか、金が欲しさにあなたに好い加減な事を言ふやうだけれど、全く其の子は可愛さうなんです。」
 「そうして金高は何れくらゐ入ります。」

「主人へ返すのは只つた五十圓ですが、病院へ入れると其の入費もありますから、百圓だけ都合して戴けば結構ですわ。」

「宜い。其んな金ならば僕が立替へて置きませう。」俊助は衣兜から十圓紙幣を十枚だけ數へて鶴子の眼の前に出した。

「本當に色々な御無心を申して済みませぬのね。だが、此れで人間ひとりが助かると思へば私こんな嬉しい事はありませぬわ。そうして當人だつ

て、あなたに此の御金を出して戴いたと知つたら、何んなに悦ぶでせう。ですから、あなたも其の子の置いてある所へ鳥渡入らッしつちや下さらないの。其うすれば、本人からも御禮を言はせませうから。」

「なに、僕は直ぐ神戸へ歸らんさや成らんから。」

「でも、あなたに本人を御見せ申さないでは、何だか私が好い加減な嘘でも言て御金をいたゞいたやうぢやありませんか。」

「お鶴さん。其んな心配は無用です。あなたを信用して居ます。少くとも楯岡先生の娘御が、其んな卑劣な事を爲さらん事は僕の方で保証します。尾形は快げに笑つた。」

(六一)

猶豫をしては明日神戸を出帆すべき汽船の間に合はぬと、俊助は匆々にお鶴と別れて其の夜の流車で廣島を去つた。

もし果してお鶴に勧められた如く、尾形が眼のあたり其の不幸なる狂女を訪れたらば、一たびは未來の妻として許せし加賀見静子の境遇の如何に激變せるかに驚いたのであらう。而して精神を喪へる静子と雖も、思ひがけなく其の意中の人に再會するを得たる事を悦んだのであらう。然しながら、人と人との運命は水の上に漂へる二つの木の葉が、風波のため合せんとしては又離るゝと同じである、静子の居る廣島の土地を尋ね來た尾形は、終に明日の船で遠き海外へ出立するのである。俊助は静子の事を知らぬ。静子は俊助の事を知らぬ。そうしてお鶴は静子と俊助との關係を知らぬ。此の三人の關係を知つて居るのは神様ばかりであるが、神様は三人を一つ所に寄せなかつた。即ち静子と俊助とは縁といふものがないのであらう。

百圓を融通して貰つたお鶴は、尾形を送出すと、早速其の半分を主人の前へ

叩付けた。

金を見せられては、主人も言分はない。五十圓を受取る以上は、静子といふ狂女に對して今後何等の故障も言はぬといふ一札を主人から受取つて、お鶴は其の足で静子を隠してある處へ飛んで行つた。

静子の隠れ家は何處。それは聯隊の傍にある慈惠病院である、情夫の豊川軍曹と知己であつた看護卒の除隊されたのが其處に勤めて居るので、お鶴は其の縁故から狂女を此の病院で匿まつて貰つたのである。

『姉さん。能く來て下さつてね。私ひとりで淋しかつたわ。』
お鶴の病室へ入つて來た姿を見て静子は嬉げに言つた。

『其う。私、あなたに悦ばせる事があるのよ。』

『何んな事。』

『あのね、私の家へは御金を返してしまつたから、もう、あなたが大切

「びらで此處に居たつて構はないの。どうして他に御金が澤山出来たから、元の身體になるまでは、何時までも此の病院で養生するのですよ。」

「だつても、私病氣なんか些とも無くつてよ。」

「あゝ、病氣は無くつても、身體が勞れて居るからね、お薬や旨い物を澤山たべて達者になるの。」

「お薬は嫌だけれど、旨い物なら喰べるわ。だけれど、其んな贅澤しても、私御金を持たないんだもの。」

「さあ、其の御金を私が澤山持つて来たから心配する事は無いのよ。」お鶴は相手を安心さす爲めに五十圓の紙幣を出して見せた。

「姉さん。何うして其んなに御金を持って居て。姉さん。盗賊したんぢやなくつて。」

「盗賊とは情けないね。私、其の金は人に貰つたの。其の人は大層やさ

しい人よ。静子さん、あなたも澤山禮を言はなくちや行けない事よ、私があなたの事を話したら、其の人が氣の毒がつて斯んなに御金を出してくれたの。」

「其う。有難いわね。私御禮をいつてよ。其の人何處に居て。」

「其の人は、もう行つてしまつたわ。」

「ぢやあ、仕様がな事ね。」

「静子さん、だからあなた名前だけでも覚えてお出でなさい。」

「何といふ方。」

「其の人、尾形俊助といつてよ。」

「あゝ、尾形さん。狂女は寢臺から飛上かつた。」

(六二)

「静子さん、確かにしなくつちや行けない事よ。」

お鶴は其の舉動の常に變はつたのを見て、近寄つて抱止めようとした。

『お鶴の姉さん。其處を放して頂戴。私、會ひたい事よ。尾形さんに會はして頂戴よ。』

静子は頭是なく泣き出した。

『鳥渡、何うしたの。』

『だつて、尾形さんでせう、尾形俊助さんでせう。私知つて居てよ。私の意中の人よ。姉さん。ねえ後生だから、今から私を尾形さんの所へ連れて行つて頂戴よ。』

『ぢやあ、あなたの好い人てえのは尾形さんなの。人違ひぢやなくつて。ねえ、静子さん。其んなに泣かないで、譯を言つて御覽よ。』

『だつて、其うなのよ。私の意中の人は尾形さんなのよ。私、結婚の約束をしたの。私、尾形さんの未來の妻だつたの、そしたら、尾形さんは會

津へ行つてしまつたの。會津で他の御嫁を貰う事になつてしまつたの。』
お鶴は呆れて其の顔を見詰めた。

『鳥渡、會津なら楯岡ぢやなくつて。』

『其う、楯岡さんなの。姉さんは能く知つて居る事ねえ。』

『だつて、私、その楯岡は私の父さんよ。』

『あら、姉さんが其うなの。静子は眼尻を逆まにした。』ぢやあ、姉さんが尾形さんの御嫁さんになつたの。あら口惜い。私、姉さんに尾形さんを横取されたわ、そんな姉さんなら、私もう嫌ひよ。』

『静子さん。其んなに腹を立てなくつても可いのよ。私、尾形さんなんかとは夫婦にならないもの。』

『何うして。』

『何うしてつて。私にはもう良人が極つて居るの。』

「そうして、尾形さんは何うして。」

「尾形さんは獨りで明日米國へ立つの。」

「明日米國へ……其れまでに會ひたいわ。是非會ひたいわ。姉さん。會はして頂戴。私に會はせてくれなければ、姉さんが尾形さんを取つたのよ、屹度其うよ。尾形さんの御嫁さんは姉さんよ。」

静子と尾形とに斯かる關係のあらうとは、お鶴の始めて知つた事なので、今更夢に夢見た心地。

「静子さん。本當に惜い事をしたのねえ。尾形さんと其んな譯なら、無理にも此處へ引張つて來るんだつたに。」

「何故、連れて來てくれないの。矢張、姉さんの御婿さまだからでせう。」

「其うちやないけれど、全く其んな事は知らなかつたんだもの。尾形さんだつて、あなたが其うだと分れば、屹度來てくれたに違ひないわ。」

「私、い、事よ。是れから獨りで行つて尾形さんの御眼にかゝるの。」
「其うねえ。明日神戸の出帆といへば、何時か知れないが、是れから直に行つたら間に合ふかも知れない。静子さん。可いわ。私も一所に行つてよ。」

(六三)

米國行のゲーリック號が今日の正午に抜錨するので、神戸の大棧橋は一方ならぬ混雑である。

外國船だけ、乗客の大部分は外人なので、世界の紳士淑女の歩きぶりは斯うしたものと言はぬばかり、此等の乗客が寛かに足を運んで行く間を縫つて、見すばらしい姿の支那人が行李を擔げて忙しく駆けて行くと思れば、其の跡からばらばら走るの日本から移往する労働者らしい。怪な古洋服をぶざまに纏うたのは、まだ上等に屬する部で、中には手織木綿の布子を

尻高くからげて、股引だけは買ひたての白いのが、其の下から見えて居る。大かた竹行李を赤毛布にくるんで真ん中を白金巾で括つたのを小脇に抱くもあれば、重さうに背負つたのもある。

生れ故郷の日本の土地で、生存競争に負けた死者狂ひに、此の手合が海外へ飛出すのかと思へば勇ましくもあれば又憐れでもある。孰れも最愛の親を捨て、妻子を捨て、伸るか反るかの運命を萬里の波濤に試みるうち、扱病氣に仆れるのもあらう。死に朽ちるのもあらう。失望して命からかく逃げて歸るもあらう。窮するあまりに墮落するのもあらう。果して成功して故郷に錦を飾る者幾人ぞと思へば、何事も臺灣の富籤を引いて當ると當らぬとが浮世のさま。

其のほか問屋船宿から運ぶ荷物のさま々々。客を送り迎ふる人のかずく。一しきり火事場のやうな騒ぎが。些しく静かになつたは最早出帆の間近く

なつたらしい。此の時に「蓬萊屋」といふ法被を着けた若者を先導に棧橋へ練出したのが、尾形俊助と且つ俊助を見送る一行であつた。

流石蠻カラーの尾形も此の日は珍らしく、カイゼル髯のピンと刎ねたはコスメチックで手入をしたらしい。仕立おろしのフロツクに黒の山高帽子を戴いた風采は誰が眼にも天晴な紳士である。

俊助と並んだのが、焼討事件以來尾形と運命を俱にした政黨壯士杉本七十郎。相變らず殺風景な書生風であるが、是れでも進歩黨が内閣を乗取れば次官になれるのだ、と當てにならぬ抱負を本人だけは持つて居るのださうな。

此の杉本より些し後になつて居る羽織袴の若紳士は是れなん尾形の大恩人たりし故楯岡四郎藏の相續人たる楯岡四郎次。俊助の外航を送る爲めに會津から此の神戸まで出向いたのであつた。此のほか、十人はかりゴチャゴ

チャして居る見送人は、大かた京阪地方に居る尾形の舊友なのである。
 『尾形君、何うか自愛してくれましたまへ』。杉本は豪傑風に反身で言つた『斯うして君とは西と東へ別れてしまふやうに、銘々の目的も主義もすつかり違つてしまふたんだが、其れは仕方がないさ。御互ひの友誼だけは何時までも續けるんだ。』

『其れは無論さね。』尾形は微笑んだ。『僕も米國へ行けば、百姓になつて大いに金をつくるつもりぢやが、君も今日の意氣を喪はんで國家の爲めに活動したまへ。』

『活動するとも。君が成功の月桂冠を戴いて今度歸朝するまでには、吾が輩も内閣に於ける椅子の一脚ぐらゐは占めて見せるさ。』

『一脚でも二脚でも占めるだけ占めるさ。』

『大層、御盛んな御談ですな。』

後ろから楯岡四郎次が口を挿んだが、棧橋脇に繋がれた本船では、ポーと間の抜けたやうな汽笛が鳴つて、渦巻く煙は風の故か、此處まで這つて来る。

(六四)

『實にひどい煙だね。』

杉本が顔をしかめて居る間に、尾形は振返つて楯岡四郎次の側へ近寄つた。

『楯岡さん。では、鶴子さんの方は昨日申したやうな都合にして置いたですから、孰れ本人からあなたへ請求して來られませう。其の時には、鶴子さんが果して着實な身分になられたか、否かを確かめた上で、何うか現金の御引渡しを願ひたいし、其れから、當人に表立つて御面會なさるやうに、此の事は僕から折入つてあなたに願ひます。』

『私も何うか一日も早く其うなれるのを望んで居ます。』

『其うですか。あなたの御心を伺つて僕も安心といふものです。其れが

濟めば、僕も故先生に托された事を仕了せられた譯になるのですから。』
 斯ういふうちに、本船の甲板から架けられた梯子の下へ達したので、俊助が
 眞つ先に登つて行くと、上り口には尾形の來るのを待受けて見送人が此處
 にも群集をして居るうちに、一きわ視線を引いたのは彼の長崎縣事務官た
 る梶村法學士と、其れに並んで警視總監金井直方の令嬢綾子が立つて居た
 事である。

其の時、綾子は既に令嬢ではなかつた。或る媒妁する人のあつて、此の梶
 村法學士と結婚したのが丁度今から一月ほど前で、新婚旅行を兼ねて夫婦
 任地に赴く序に、此の神戸まで尾形を送つて來たのである。

『やつ。梶村君。何うも有難う。令夫人にまで御足勞をかけて濟まなか
 つたな。』

俊助に會釋されて綾子も其の頭を下げた。

『實は君の宿から送つて來る筈なんだが、生憎客來があつて時間に遅れ
 たものだから、船の方へ先驅をしたといふ始末さ。』

『尾形さん。何うか御身體を大事に遊ばしませ。』

令嬢時代にはお俠であつた綾子も、境遇人を作るのか、梶村に嫁いでから、
 何となく落付いたらしい口の利きやうである。

『あなたがた御夫婦も何うか。梶村君。消息だけは時々通じてくれたま
 へ。特に令夫人が御めでたの時分には電報で其の福音を齎らしてくれた
 まへ。僕も電報で御祝ひをするから。』

梶村は磊落に高く笑つた。

『あは、あは、赤ん坊か。なに、其れなら前途頗る遼遠なりさ。其れよりも
 僕は只君の成功を祈るのだ。』
 『何うか祈つてくれたまへ。』

「尾形さん。」綾子は側から口を添へた。「私も祈つて居ますわ。だが、静子さんは何うなすつたのでせう。今度あなたが洋行おそばす事を御存じでせうか。」

俊助の顔には忽ち曇りを帯びた。

「加賀見の令嬢ですか。無論僕の事が知れる譯はないです。朝鮮へ立たれる時に、馬關で鳥渡あうたきり、御互ひに便はないのですから。」

「まあ、其う。此の見送り人のうちに静子さんが入らしつたら、私どもに悦ばしいと思ひますわ。本當に彼の方は御可愛さうねえ。屹度今でも朝鮮で、父さまや母さまと一所にくらして入らつしやいませうね。」

「大かた其うでせう。」

「何でも馬山浦でしたわね。私、長崎へ着いたら直ぐに手紙を出しますから、あなたの事も其う申して滑りますわ。しかし、何んなに静子さんが

残念に思し召す事とせう。」

「其んな事は寧ろ言はんで置いて下さる。」

「だつても……。」

綾子は何か言はうとしたが、其の時に尾形は他を振向いて、別な見送人に挨拶をして居た。綾子の口から昔の戀人の名さへ聞く事の堪えがたいのであらう。

相手を失つて、手持不沙汰に綾子は控へたが、途端に棧橋から梯子を登つて甲板へ現はれた人の姿を見て綾子は吾れ知らず其の方へ駆寄つた。

「おッ、あなたは静子さんぢやありませんか。」

(六五)

綾子が叫びは相手の耳に入らぬらしい。彼れはぢろくく其處等を見廻しながら暫く甲板の上にゐんで居たが、

「お、尾形さん。」

何時しか俊助の姿を見付けて、疾風の如く其の方へ走寄つた。

「あなたは誰です。」

俊助がちらりと見た眼には、いたく窶れた静子の面影が其の人とは思へなかつたのである。

「あ、矢張あなたは静子さんねえ。」

綾子が再び駈けて来たので、俊助は始めて心付いたが、静子は此の時男の脚下に泣きくづをれた。

「静子さん。あなたは何うしたのです。」

「だつて、あなたに……。」

静子は半ばを言ひかけて、半ばを言ひ得ず、只泣聲ばかり聞こえるのである。

此の意外なる出来事に、見送人の一同が呆氣に取られて居ると、今ひとり女の影が甲板に現はれた。尾形は其れがお鶴である事を認めためたので愈々驚いたが、お鶴は静子の泣いて居る側へ直ぐに駈寄つた。

「尾形さん。あなたは驚きましたらう。」

「お鶴さん。其れぢや此の人はお前さんと一所なんですかね。」

「其う。私が廣島から連れて来たのよ。昨日あなたに御金を出していただいた可愛さうな子は此の人なの。」

俊助は打領いたが、拔錨を知らず汽笛の聲が慌がしげに聞こえる。

「もう出船ださうですから、御見送の方は御歸りを願ひます。」

船宿の若者が頻りに注意する。

「お鶴さん。此の通り時間が迫まつて居るから、詳しい事は聞いて居られぬが、お前さんの今いふたゞけで大概の事情は察せられた。」

「其うですか。此の人にあなたの名前を言つたら、其の方なら是れ〜だからつて、本當に私も喫驚してしまつて、急に此處へ御連れ申す事にしたのですわ。」

「其うですか。いづれ跡で手紙で詳しい事は聞きもしやうし、言ひもしやうが、静子さんの身體はあなたに宜く頼みます。」

「可う御座んすとも。私、命にかへて引受けるわ。」

「む、そうして、序だから紹介させう……。楯岡さん。俊助は四郎

次を呼んだ。『あの方が廣島に居られる鶴子さんです。お鶴さん。これが會津の楯岡さんだから、挨拶をなさるが可い。』

「お初に御眼にかゝります。鶴子は極り悪げに辭儀をしたが、廿年來始めて兄に會ふた懐かしさに眼は涙ぐんだ。

「私が楯岡四郎次です。」

錨綱を巻上げる音が騒々しいと共に、愈々出帆の合圖たる鐘の聲が頻りに聞こえる。

「尾形君。左様なら。」

「尾形君。萬歳。」

先つきから甲板を下りた見送人たちは棧橋から告別の叫びをする。

「尾形さん。私……私も一所に外國へ行くの。」

静子が俊助に取付くを、綾子とお鶴とが無理に引放して梯子から降した。

程なく波を掻いて揺ぎ出したゲイリツク號の甲板には、尾形俊助の立つた影が次第々に豆のやうに小さくなる。同時に棧橋の上から異口同音に、

「尾形君。萬歳。」

と叫ぶ其の聲を破つて静子は正體なく泣いた。

この後、尾形と鶴子との間に手紙の往復が數回あつたが、尾形の差圖によつて其時病ひ大かた癒えた静子の身體は朝鮮の親元へ送歸された。そうして、其の年の秋、漸く泥水を洗つたお鶴は丁度除隊せられた豊川と結婚して、東京の本郷邊に今も樂い家庭を作つて居る。それから二年目の春、米國からお鶴の處へ届いた年賀狀は俊助と静子との連名で、事業も着々成功し、今では加賀見一家も朝鮮から更に此處へ移住して、行く／＼は盛んなる日本村を拵へるといふ事が書いてあつた。

新朝顔日記 後編 終

明治四十年十二月十八日印刷
明治四十年十二月二十二日發行

【新朝顔日記後編】
(實價金五十錢)

著者 伊原敏郎

發行者 和田静子
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所 春陽堂
東京市日本橋區通四丁目角
(電話本局五十一番)

印刷者 中野 鏝太郎
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷所 帝國印刷株式會社
東京市京橋區築地三丁目十五番地



伊原青々園氏著

前編 田代曉舟氏 裝畫
後編 緒崎英朋氏

小 説
夫さだめ

前編 實價 五拾錢
後編 實價 四拾五錢
郵 稅 各 六 錢

著者が一機軸を出せる
「新講話」の一なり、才色ふ
たつながら秀でたる佳
人が心に染まぬ良人と
家庭とに嫁ぎて半生の
歲月を涙の中に送ると
いふ憐れなる事實物語
讀んで興味あるうちに
活きたる無限の教訓の
其の間に籠もれるは家
庭の好き讀物たること
を保證す

春 陽 堂 發 行

F-2J-31

終